

第9回熊本大学 東光原文学賞作品集

2017年3月発行
熊本大学附属図書館
Kumamoto University Library



◆ 大賞 ◆

雪の下に咲く 黒瀬 優

◆ 優秀賞 ◆

アジサイの日

若狭と鉄炮

臨時運行レトロトレイン

縁者欠格

木乃 一孝

野 良 犬

藤崎 銀杏

三杉 望海

第九回熊本大学東光原文学賞作品集

第九回東光原文学賞作品集 目次

館長のことば

熊本大学附属図書館長 山尾 敏孝 / 4

第九回東光原文学賞作品集の公刊にあたり

大賞

雪の下に咲く

黒瀬 優 / 8

(工学部機械システム工学科四年)

優秀賞

アジサイの日

木乃 一孝 / 45

(法学部法学科三年)

優秀賞

若狭と鉄炮

野良犬 / 80

(文学部歴史学科四年)

優秀賞

臨時運行レトロトレイン

藤崎 銀杏 / 117

(大学院教育学研究科教科教育実践専攻修士課程一年)

優秀賞

縁者欠格

三杉 望海 / 140

(文学部総合人間学科四年)

選考を終えて

坂口 至 「東光原文学賞総評」 / 173

跡上 史郎 「講評」 / 176

岩瀬 茂美 「講評 答えは自分の中にある」 / 179

第九回東光原文学賞作品集の公刊にあたり

附属図書館長 山尾敏孝

本年も附属図書館の事業として「東光原文学賞」の作品募集を実施しました。本学の学部生、大学院生および留学生等を対象としましたこの事業も本年度で第九回目を迎えます。熊大生の言語力向上と創造力豊かな学生の育成、附属図書館の利用者の増加など地域社会における文学・文化活動の一助になることを趣旨とし、小説作品の投稿を募りました。今年度の応募数は二十八編で、応募者の学部及び大学院の内訳は次のようでした。

文学部十三編、教育学部一編、法学部三編、理学部一編、医学部三編、薬学部一編、工学部三編
大学院は社会科学文化科学研究科一編、教育学研究科一編、自然科学研究科一編
学年別には、一年生四名、二年生六名、三年生七名、四年生以上八名、大学院三名

今年四月に熊本地震があった関係で応募数がどうなるか非常に心配しました。しかしこれも杞憂に終わり、応募数はなんと昨年のおの二十八編に達しました。この数は平成二十年度の第一回の二十九編に次ぐ多さです。応募の内訳をみますと以下のようなことが判明しました。まず、

全学部から応募があったことです。中でも文学部からの応募は十三編もありました。これは文学部の先生のご指導や文芸サークル等に所属する学生の投稿によるものだと思います。特筆ものです。また、大学院研究科の学生から平成二十四年度の第五回以来の応募がありました。研究の合間に構想を練って応募していただいたようです。学年別にみますと各学年から応募者があり、上級学年になるほど多くなっています。また、今回初めて応募された方が十九名もあったことも応募者増につながったと思われ、本当に嬉しく思いますとともに感謝申し上げます。男女別では、男子学生が二十三名と多く、女子学生の投稿も期待したいと思います。

このように熊本大学の全学部から応募があったことは本文学賞の意義を十分に発揮できたことと思っております。今年度の応募作品のレベルも例年に比べて高くなり、最終的に優秀な作品は五編となりました。通常は四編の優秀作品を選ぶのですが、選考委員の先生方を大いに悩ました結果です。そして、昨年は残念ながら出なかった「東光原文学賞」の大賞も出ました。その栄誉を称えたいと思います。また、受賞された皆様、誠におめでとうございます。そして、惜しくも受賞できなかった皆様には、ご寄稿していただきましたこと厚くお礼申し上げます。本書には、受賞された作品五編を掲載するとともに選考委員の講評を載せています。これらの作品や意見を参考にして、さらに精進して再度挑戦していただき、小説力アップに繋げていただきたいと思います。

今回の入賞作品を含む作品を選考後に読む機会を得ました。なかなか読み応えがあり、皆様の

表現力に感心しながら素晴らしさを味わいました。また、今回の応募者の方々に図書館からアンケートをお願いしたところ半数の皆様から回答を得ました。募集をどこで知ったか、次回も応募するのか、応募方法はわかり易いかを尋ね、そして最後に自由にひと言書いてもらいました。本文学賞については、小説を書くよい機会になったとか、図書に触れるきっかけとなったとか、小説を書く楽しみを発見したとか、この企画に賛同していただき、継続する重要性を認識しました。昨年、応募数が減ったとき、この巻頭言で「熊大生の作品力、文学力が落ちたとは思いたくありません。きっと、書きたくとも他の用事で忙しすぎて書く時間がないのでしょうか」と書きました。来年も今年と同様な応募数があれば、この心配も解消されると思っています。そのためにも、アンケートにありました意見を参考に改善に努めたいと思います。募集情報については、より広範なポスターや図書館内の広報からの告知が必要であり、広報の重要性がわかりました。応募方法のあり方や小説の書き方指導や添削指導など学生が必要としている支援内容を把握し、作品投稿と作品の質向上を目指して図書館も取り組みたいと思います。

忙しい現代に生きている学生の皆様にとって図書館はどのような存在でしょうか。今はインターネットを開けばほとんどの情報が手に入る時代であり、大量な情報が溢れています。良い情報も悪い情報もさまざまな形で存在しており、情報の中に埋もれた生活をしているようなものです。この中でも小説を読むことは可能ですが、マンガを読む時間はあっても時間をかけて小説を読む方は少ないのではないのでしょうか。活字離れが言われている中ですが、印刷本を手に取り、活字に触れることをお勧めします。インターネットとは違った創造と感動の世界を必ず与えてくれる

と信じています。その意味でも重要な場所が図書館です。図書館には、皆様を一気に引き込み、早く読み終えたい気にさせるような素晴らしい作品が多数あります。もし探している本がなければ注文も可能です。図書館で様々なジャンルの小説等に触れながら小説を書くことにチャレンジしていただければと思います。今までの体験や読書や文献、種々の情報を取り込んでの創作に何度も挑戦し、切磋琢磨して、自分の納得のいく作品に結び付けていただきたいと思えます。そして他の学生や教職員の皆様に喜びと希望を与えてくれる作品が一つでも多く出ることが期待しています。



上段：跡上 坂口 岩瀬
下段：坂本 堀尾 山尾 石本 本田

雪の下に咲く

黒瀬 優

桜の木を雪が覆っている。それだけで十分不吉な演出を感じた。風が氷晶を巻き上げ、白い煙を伸ばすが、雪が減っている気配は無い。ただ、空に流れる白粉だけが夜の暗闇に溶けてゆく。裏道の二人を暗闇から守るのは、点滅する死にかけた街灯だけだった。

父を死に追いやった男とこんな形で話す事になるとは。

しかし、この対等な状況というのは、むしろ弱者の私にとって、不利であるかの様にさえ感じさせた。自らの意思で一騎打ちの場までやって来たが、既にここから逃げ出してしまいたい気持ちに押し潰されそうだった。戦う勇気が無いのであれば、初めから戦いを挑む勇気も欲しくなかった。

何をもって勝ちとすればいいのかも、何をすべきかも分からない。しかし、漠然とした敗北や恐怖を感じさせられる。

「何に怯えているのかな。話をしたいのは君の方なのだろう」

彼が先に口を開く。先手を取られたというよりも、先制攻撃をされたといった気分だ。私はそ

んな簡単に顔に出す女ではない。

私にそんな感情を抱かせる為の計算なのかもしれない。もしそうであれば、ここで悩めば彼の術中にはまった事になる。

「流石、赤尾社長の娘だよ。僕とこうして話をしているんだ。逃げる事が勝利条件の詐欺師としては君の勝ちだと言わざるを得ない」

自分からこの町に戻って来たくせに、よくもそんな言葉が口から出るものだ。今まで私の上に立ち続けていたのに敗北宣言など受け入れられるわけが無い。だが、彼は私が葛藤を纏めて言葉にする前に、静かに捲し立てる。

「さて、賠償金はお金を払えばいいのかな。違うな。お金で買える程君の幸福は安くない」

私から父まで奪った男がぬけぬけと幸福論を語る。なぜこんな男に父は騙されてしまったのだろう。しかし、父に勝ったという点から考えれば、こんな風に私の神経を逆撫でしているのも、凡人には理解出来ない理由からなのかもしれない。

「さて君の本当の敵は僕なのかな。違うな。君は気付いているはずだ。君のお父さんだよ」

一理あるとは思った。父が死ななければ、騙されなければ、私は今の様な生活を送っていない。しかし、騙す方が悪い。それをいくら天才が口で誤魔化したところで、私が納得するはずはない。

「ごめんごめん。嘘だよ。やっぱり敵は僕だね。君はこの不幸が気に入っているんだよ。でも、僕を見たら倒すのが礼儀だからね。君は今の自分の世界を壊されそうで怖いんだ」

白光と冷気が易々とカーテンを通り抜け、狭い部屋に突き刺さる。一晚掛けて温めた布団の私一人分しかない温かい場所に体を固定する。部屋の匂いで洗濯物を部屋干ししていたのを思い出す。

エアコンは寝る前に止めており、大学時代の友達がくれた変なぬいぐるみも凍えている様に見えた。初めてあの置き場に困るだけだったクマと心が通じた気がする。

私の目覚まし時計は午前十一時に設定されているが、未だに沈黙を貫いている。今日の予定はカフェでのバイトだけだ。しかし、目を閉じてても再び快適な夢の世界の門は開いてくれそうになかった。

消去法で大人しく起き上がり、凍えながらカーテンに手を伸ばす。結露した水を吸い込み、布にあるまじき冷たさだった。勢いよくカーテンを開くと、思わず目を瞑ってしまうほどの光が飛び込んで来る。こんなまぶしい朝があっただろうか。ゆっくりと目を開く。

雪。

ガラス一枚隔てた世界には雪しかなかった。元々この窓が切り取る景色は田舎町の低い建物ばかりであったが、そんな人工物は消えていた。色のある屋根は覆われ、白い壁と窓ばかりが空間に残り残されていた。そこには私の知らない雪の街があった。

雪が奪ったのは色だけではなかった。いつにも増して静かだった。いつもの雑音は遠くで聞こえ、近くでは表現のしづらい微かな何かが聞こえた。雪が音を消す音なのかもしれない。

雪は好きではない。余計な事を思い出す。

カーテンを閉めるが、やはり雪の存在感は消えなかった。目と耳には焼き付いてしまったし、窓の隙間は雪の気配を素肌に通ぶ。

気付けば、部屋の中まで雪に支配されていた。

少し早いが部屋から出て、バイト先に向かう事にする。私の働いているカフェはチェーン店ではなく、従業員も少ない。その為、分単位のシフトは存在せず、忙しそうな時は早く行くと喜ばれる。

今日は寒い。暖かいコーヒーを飲みに来る人は多いかもしれない。

顔にバイト用の化粧を施し、黒のカラコンを入れる。私の瞳は淡い茶色だ。父から譲り受けた目。父の事は今でも天才だと思っているし、尊敬もしている。

しかし、許す気は無い。だから、父の目を隠す。

準備を終え、外に出る。かなりの大雪に感じたが、実際にはせいぜい足首までしか積もっていなかった。しかし、勿論いつも通りに歩くのは難しく、十センチ先の地面が見えないというのは精神的にも歩くスピードを遅くした。

普段は裏道を通るが、今日は大通りを歩く事にした。といっても田舎町で、車が二台同時に走れる程度の道しかない。

浮かれた人間は楽しそうに靴の上に雪を積もらせて、雪の深い所を選んでふらふら歩いていた。残念ながら、私は手が濡れるのを嫌がって雪に触れない程度には面白味の無い人間だ。

「桜ちゃん」

すぐ後ろから声を掛けられる。自信の無さそうな呼び掛けであったが、反射的に振り返る。突如の事でよろけたが、声の主が伸ばしてくれた手に掴まる。細いわりにしっかりと腕だった。

「……お久しぶりです。林さん」

父の会社の、今では社長をしてきている方だった。かなり老けた。私が県外の大学に進学してからとは会っていない。

「桜ちゃん、君のお母さんからは聞いていたよ。こっちに帰って来てから、一人暮らしをしているんだってね」

私を起こしながら、林さんが話す。後ろの足跡が見えたが、私の物も浮かれた人間と一緒に、またよたよたとして真っ直ぐではなかった。

「はい。今はカフェでバイトをしています。いつか来てくださいね」

付いてもない雪を払いながら、カフェの場所も教えずに社交辞令で誤魔化しておく。林さんの事は嫌いではない。私は子供の頃から父の会社には顔を出していて、社員の皆には可愛がってもらっていた。特に林さんにはよく懐いていた。

しかし、だからこそ今となっては会いにくい。

「お父さんの会社の話、お母さんから聞いているよね」

聞いている。林さんは父の代わりに会社を経営している。そして、それを私に手伝ってくれないかと頼んでいた。

この話を断りづらいから、地元の人が良く使うこの道を通りたくなかった。大学を卒業して地元に戻った後でさえ一人暮らしを続けている事や、バイトで忙しいふりをしているのも同じ理由だ。この話をされたくない。

手伝う事ぐらいいは出来るだろうと皆は口を揃えた。しかし、あの父が失敗した事を私が手伝ってどうにかなるとは思えなかった。残念ながら私には才能が無い。

「はい。でも、今は難しいです。そろそろバイトなので失礼します」

適当に嘘をついてこの場から逃げる。実際にはバイトまでまだまだ時間がある。だが、それでも林さんは私に言葉を投げる。

「貴方のお父さんはああいう事になりはしたけど、天才だった。その事を誇りに思っているよ」それは分かっている。だが、そんな父ですらそれ以上の天才に食い潰された。その仕事の一端を凡人の私に担えるわけがなかった。

無言で頭を下げ、バイトに向かう。林さんの顔を見る事は出来なかった。弱い私には自分も林さんも傷つける勇気が無い。

父が立ち上げた会社は社員が三十人程しかいない、実家に隣接出来る程小さな物だった。所謂町工場という物で、普段は自動車の部品だったが、場合によっては何でも作っていた。

私は幼稚園よりも先に父の会社に通うようになっていた。様々な機械があり、子供一人では入ってもらえず、必ず休憩中の人が案内をしてくれていた。一度、隠れて忍び込んだのが見つかり、大目玉を頂戴した事があった。あの時はむしろそこまで怒られた事に驚きの感情を得たが、今思

うと心配を掛けて申し訳なかった。

社長の子供というのは、普通は気を使って厄介な存在だろうが、父と社員の距離が近かったお蔭か、みんな優しくしてくれた。

父はいつも適当に見えた。しかし、父が大丈夫だと言った事は、一見不可能でも本当に父の言った通りになった。社員の人は父が変な仕事を持ってくる度に文句を言っていたが、父の「大丈夫」の一言を完全に信頼していた。

父を信じていたからこそその社員と父のやり取りは見ていて面白かったものだ。父は苗字の「赤尾」から「バカ尾」と呼ばれる事が多々あった。確かに私から見ても、父は自分の力が必要な時以外は遊んでいた。

たまに「ごめんね。こんな仕事受けちゃったよ」という父の無理難題を合図に、社員は「本気ですか、バカ尾社長」、「おい、バカ尾」と雇われる側とは到底思えない暴言を飛ばしていた。

その度に「社長と呼べ」とか「給料減らすぞ」という無駄なやり取りをしていた。子供ながらにこの時間を有効活用したらいののと思っていたが、それが彼らなりの気合の入れ方だと気付くのに時間は掛からなかった。実際、父の「仕事に掛かれ」の合図で、一致団結して仕事に取り込んでいた。

林さんは父の仕事ぶりに、「普段からこういう忙しい時並みにやる気出してくれたらな」とぼやいていたが、「それはそれでずっと天才が傍に居るのも疲れてしまうな」と笑って聞いた。

あの林さんにそこまで言わせる父を子供ながらにすごいと思っていた。全ての期待に応えられ

るだけの父だった。

しかし、残念ながら父は天才ではあったが、ナンバーワンではなかった。私が中学生の時、父は一度だけ敗北をした。柏木由紀が父の会社を相手に詐欺を働いたのだ。金額は二千万。よくある儲け話だったらしい。

社員は反対派が多数だった。しかし、父の「大丈夫」の一言で全員が納得をしてしまった。父に対する尊敬が悪い方向に働いてしまったのだ。柏木由紀は会社のお金を持ってどこかに消えた。勿論、二千万は大金だ。明日明日を生きていた父の会社に十分ダメージを与えられる。しかし、社員が百万ずつ出し合えばどうにでもなる金額でもあった。

勿論、社員は怒った。しかし、それは柏木由紀という詐欺師に対してであり、父を責める人はいなかった。父の人を見る目は誰もが認めていた。そんな父が敗れたのだ。それはもう自然災害の様なものだったと。

軽口は叩かれていた。「儲け話に簡単に食いつくから」とか、「今頃もっと大きな工場で働いているはずだったのに」とか。

父も「お前らがもっと働けばすむ話だ」といつも通りの返しをしていたが、今思い返せば父は既に顔を曇らせていた。

数十年に一度の大不況が重なり、会社は瀕死の状態となったのだ。元気な時の二千万と弱っているときの二千万では意味が違う。

しかし、それでも最悪の状況ではなかった。周りが倒産していく中でも、障害を抱えたまま父

の会社は生き長らえていた。社員に恵まれていたのだ。皆が「元々安月給だから、給料半分になつたところで妻にはバレないですよ」とか適当な事を言いながら父をサポートしていた。

しかし、それに対する父の返事は、彼の人生最大の汚点であった。
自殺。

父の保険金で会社はある程度軌道に乗れた。勿論、林さんをはじめとする社員のお蔭だ。しかし、林さんや他の数人の社員は会社を守る為に走り回っており、お葬式に顔を出す事も出来なかった。

遺言書には家族だけで葬式を挙げるよう書いてあったが、母はそれに歯向かい色んな人をつ呼んだ。母が父の言つた事に逆らつたのを初めて見た気がする。母は「皆に勝手に失礼な事をしたせめてもの礼儀」だと言っていたが、母も私同様に父の全てを否定したくなる程に怒つていたのかもしれない。

だが、挙げて良かったと思える式だった。

会社は今安定している。しかし、昔の様に楽しい職場ではなくなった。どこにでもある普通の会社に成り下がってしまったのだ。

父の死後、何度か会社を訪れたが、その度に感傷的な気分になった。もう父の会社は思い出の中にしかなかったのだ。林さんも冗談の利かない人ではないが、やはり父と消去法の林さんでは違う。

しかし、一番悔しかったのは、私は一時期林さん以上に柏木由紀に懐いていたという事だ。

私の名前は私が産まれた病院で咲き誇る桜を見た父がその場で決めた。小学校で自分の名前の由来を調べる授業があり、私は自分の名前に恥ずかしいという感情を持つようになった。子供心も難しいもので、周りが一文字一文字に深い意味を付与してもらっている中、私の名前だけあまりにも安直ではないだろうかと感じたからだ。

しかし、柏木由紀に出会った。彼は「この町の近くの病院で珍しく雪が積もった日に生まれた。だから、男なのに『由紀』という女性の様な名前を付けられてしまった」と笑っていた。

私は彼が羨ましかったし、大人だと思った。自分の名前を好きだとも言っていたからだ。私はいつかそんな風に笑えたらいいと願ったし、彼のお蔭で自分の名前を少しずつ気に入っていった。

しかし、終わってみると、彼は詐欺師だった。おそらく偽名だろうし、目立たない方がいい名前だ。『由紀』は違和感がある。何か理由を考えると、警戒心の強い子供に気に入られる為の話作り。

もし、父が柏木由紀を信頼した要素に少しでも私が含まれるのであれば、あの頃の手まらない私を殺してしまいたい。

昔の事を思い出しながら歩いていると、もうバイト先のカフェが見える所に来た。そんなに色んな事を考えていたのだろうか。

カフェの従業員用の裏口に戻る。いつも通りの道に入った瞬間、前のめりにこけた。油断とは怖いものだ。手はついたが体が雪が付く。コートと薄い上着の下はバイトの制服なのだ。濡らすわけにはいかない。急いで立ち上がる。

そして、目の違和感から、コンタクトレンズを片方落とした事に気が付く。急いで探すか、黒くて目立つはずのカラコンがどうやっても見つからない。度は入っていない為バイトに支障は無いが、雪はまだ私から何かを奪うというのか。

流石に片目だけカラコンという奇抜な格好をするわけにはいかない。茶色の瞳は隠したいが、コンプレックスがあるという事はそれ以上に隠したい。理由をあげるとするなら、プライドだろう。

落ちたコンタクトは諦め、中に入る。

接客スペースに行くと、いつもと同じコーヒート木の香りで、お客の数も普段とさほど変わらなかった。しかし、窓の外は真っ白で、いつもと違う雰囲気ではあった。

ガラス張りの入口を見ると、二人の男女が服の雪を掃っていた。男の方は革靴の上にも雪が積もっている。敢えて誰も踏んでいない新雪の上を歩いてみたのだろう。三十路は過ぎている様だが、無邪気な人だ。少し、羨ましい。昔は何も無い朝でも、時々特別な気分になった。しかし、今となつては、大雪の今朝でもはしゃぐ事が出来ない。自分の成長の方向が少し悲しい。

二人が入って来る。目が合い、無意識に男の顔を注視していた事に気付く。特に変な所は無い男だが、違和感があった。

「お二人様ですね。お好きな席どうぞ」

このカフェはよくあるファミレス形式で、席に着いてから注文し、会計は最後だ。店長だけは

少し変わり者で、自分の事はマスターと呼ばせるし、飲食店なのに髭を伸ばしている。しかし、面白くていい人だ。少し自分に自信が無い所も愛嬌である。

「ご注文がお決まりになりましたら、お呼びください」

何百と口にしたセリフだったが、最後まではっきりと言えた自信は無かった。自分の声が遠くなったからだ。違和感の正体。こいつは私が最も憎んでいる男、柏木由紀ではないか。あれから十年程たって老けはしたが、間違いない。どんなに探しても見つからなかった男だが、不意に来られると誰だか気付かなかった。

「ホットコーヒーを二つ」と彼はメニューを見ずに注文をした。連れの女に確認も取らなかった。急いでいるのだろうか。

しかし、ここではコーヒーを五種類提供している。それも客に選んでもらわなければならない。彼には復讐する為にずっと会いたいと願っていた。しかし、急に来られると何をすればいいのか分からぬ。とりあえず、私が赤尾桜であると気づかれる前に、一度この場を離れたかった。もう少し真面目にコンタクトを探せば良かった。見つければ特徴的な瞳の色を隠せたし、もっと遅く店に入れば私が接客する事もなかった。

「コーヒーはこちらの五種類からお選びいただけます」とメニューを開いたが、彼は一秒も迷うことなくオリジナルコーヒーを選択した。これは常連が必ず頼む自慢の商品だ。これだけでこのお店が成り立っていると聞いても過言ではない。私が気付かないうちに、何度かこの店を訪れた事があるのだろうか。もし、そうであれば、今日を逃しても、また来るかもしれない。

別のバイトの子に注文を伝え、レジに入る。テーブルを拭きながら彼の様子を伺う。彼の視界には入っているだろうが、正面ではない。気付かれはしないだろう。

もう掃除は終わり、ありもしない汚れを落としているが、彼はずっと楽しそうに話している。どうも急いではいないらしい。何かを待っているのだろうか。

急に彼がこちらを向く。驚いた私は視界から逃れる為に無意識にしゃがんでしまった。不自然だっただろうか。だが、店員がレジの下に置いてある在庫を取るなんてのは普通の事だ。それが高またま視線をずらすタイミングと一致しただけ。

しかし、このまま隠れ続けるわけにもいかない。足りない在庫を考え、レシートの紙を交換する。その間、視線を感じる気がして彼の方を見る事が出来なかった。

観察は諦めてカウンターの方に戻る。これだけ精神を疲れさせたわりには、会話も聞こえなければ得る物も無かった。

十数年間、全く姿を見せなかった男だ。そう簡単に尻尾を掴めるとも考えていない。尾行すれば何かは分かるかもしれないが、そんな見えない穴に手を突っ込んでみるような勇氣は持ち合わせていなかった。それに、彼相手に私が上手くやれる自信も無い。

彼が席を立つ。もう一人のバイトの子よりもレジから遠い場所を陣取っている。彼女がレジ打ちに向かうはずだ。会計中に彼と近距離で顔を合わせ続けるのは避けたい。

しかし、彼はまっすぐ私の方に歩いてくる。別のバイトの子と私に大きな違いは無い。あるとすれば、詐欺の獲物の娘だったという程度だ。だが、それは私が復讐する理由であり、彼に危害

を加えられる道理など無い。

それに、父を騙した程の詐欺師だ。数多の詐欺の中の覚えるに足りない一件だったに違いない。カラコンを入れていないとはいえ、気付かれるはずがない。私に危険は無いはずだが、その理解出来ない状況に調理場の下がる一步が踏み出せない。

「淹れてくれたのは貴方でしたね。また来ます。気に入りました」

そう言って彼は微笑んだ。私達にあんな過去がなく、これが陳腐なドラマであれば、ここから恋が発展するのではないかと思わせる程の爽やかな笑顔だった。

「ありがとうございます」

出来る限り自然な笑顔と言葉を返す。彼の違和感しか無いセリフにはどんな意味があるのだろうか。私は「また来る」という言葉に安堵した。このまま戦って勝てるとも楽観していないが、完全に勝ち目が無いと思う程悲観してもいけない。長年恨んでいた相手が手を伸ばせば殺してしまえる距離にいるのだ。ただ帰したくはない。

だが、もし私の存在に気付いていて、油断させて逃げる為の作戦だったとしたら、今何かしないと手遅れになる。

考えを纏める前に彼が伝票を渡してきた。話していたので当然の結果だが、私がレジ打ちをする事になってしまった。

「では、こちらへどうぞ」

そう言った声が震えているのが分かった。気付かなければ良かったのだが、自分が動揺してい

る事を意識すると、緊張を抑えることは出来なくなった。息が苦しい。何百回とやったレジ打ちは出来たが、手汗で伝票が手にくっついたのは恥ずかしかった。こんなに憎んでいる相手に対しても恥という感情を得た事は意外であった。

しかし、そのお蔭で恐怖は上書きされた。よく考えれば私は成長している。少し老けた程度の大人の変化とは大きく違うのだ。

お釣りの確認も済ませ、次の作戦を考える。

「よく見るととても綺麗な瞳の色ですね。また会えるといいですね」

彼と連れの女が一緒に出て行く。こうして歩いているとただの夫婦のようにも見えるが、彼の過去を知っている私にはあんな人間が幸せな家庭を持っているなんて想像出来ない。

何も出来なかった。威嚇された様に感じた。緊張の糸が悪い方向に切れた。どうせ無意味だっただろうが、『通報』の二文字すら頭に浮かばなかったのだ。

大人しく彼がコーヒーを飲んでいた席を片付けに行く。もしかしたら、彼に繋がる何かが残っているかもしれない。それこそ奇跡に近い話ではあるが、何かのメモを落としている様な。彼から直接情報を奪うぐらいなら、まだゴミ漁りの様な行動の方がプライドを捨てるだけで経済的だ。カップは空だが、自慢のオリジナルコーヒーの苦い香りだけは残っている。嗅ぎ慣れた香りです。少し冷静さを取り戻す。もし窓から見られたとしても、私は当たり前前の片付けをしているだけだ。しかし、一般人でもしないだろう事を、あれだけの詐欺師がしでかしはしなかった。彼らが口

を拭いていた紙ナプキンを開いてみるも、そこに何か書いてある様な事は無かった。

あまり片付けに時間を掛けてもマスターに不思議がられるだけだ。もう諦めかけた時、足元に目が行った。黒いハンカチが落ちていた。見た記憶の無いブランドだ。もしかしたら、特定の地域にしか店舗が無い物かもしれない。神様の背中を見たと思った。

だが、後ろに人が立っている気配を感じ、即座に自分の愚かさを知る。畏に取り付けられたチーズにのこのこ群がる鼠の様だと思った。もし、鼠も捕まる時に同じ気分になっていたのだとしたら、次からはその光景を見る度に泣き出してしまおう。

背後に居るのはマスターであって欲しい。これから客の使った紙ナプキンを開いて遊んでいた怪しい女として働いていく覚悟は出来ている。柏木由紀でさえなければいい。ハンカチを拾って振り向く。そこに居たのは、彼と一緒に居た女だった。

「これを取りに戻られたんですね。お渡し出来て良かったです」

考える隙を与えない事にした。だが、そんな事は杞憂であったかの様に女は特に私を見る事も無く去って行った。しかし、あの柏木由紀でさえそんな天才的なオーラを見せない事や、その仲間である事を考えれば、安心は出来ない。

結果、私はその女が見えなくなるまで棒立ちする羽目になった。

バイトから帰り、化粧も落とさずに布団に入る。少し未来の自分が後悔する事になるだろうが、今はどうでも良かった。むしろ、自己嫌悪に浸ってしまいたい。

もう嫌だ。彼とは関わりたくない。しかし、ここで彼を見逃せば、無能だと罵った警察と同じだ。復讐はしなければならぬのだ。

だが、所詮凡人の私が天才に勝てる未来が見えなかった。気持ちで負けたら負けだと勝手な事を言っていた人を思い出した。自分の実力差も分からない人間に勝てるわけが無い。本当であれば死なない程度の力で死ぬまで殴りたい。しかし、そんな完封試合が出来るとは思えなかった。ひょっとすると、彼を縛って連れて来た所で、私は勝てないのではないだろうか。

殺すしか無いのかもしれない。同じ土俵に立った時点で私がどんなに有利な状況でも負ける。であれば、土俵の外から戦いに発展する前に終わらせるしかない。だが、私にそんな勇気があるとも思えないし、彼の為に私の人生を傷付ける事も避けたかった。

私にも父や柏木由紀の様に才能が有れば、どうにか出来ただろう。しかし、幼い頃から父の才能を見ていた私には、持っていない人間は持っている人間に一生勝てないという劣等感がトラウマの様に刻まれている。

だから、アニメや漫画は嫌いだった。実力で劣る主人公が気合や運だけで経験や余裕を持っている強敵を打ち負かしていく展開は、冷めた目でしか見る事が出来ない。

かといって、才能が無いからと逃げる事もしなかった。だから、努力では才能に勝てないという事も学んだ。才能というのは、初期値であり成長速度であり伸び代でもあった。先に走り出したアキレスに亀が追いつく事はない。

しかし、勝てないというだけで、成長はした。もし、凡人は努力をしても変わらないという事

であれば、むしろ諦められて楽だったのかもしれない。

そう考えると、父とはある意味生きる道が違ったのが救いだった。マラソンは外から眺めるから、すごいな程度の安易な感想を抱いていられるのだ。いぎ、父の横で選手として出ると言われていたら、父を尊敬どころか憎悪までしていたのかもしれない。スタートダッシュから置いて行かれ、残りの四十キロを泣きながら走るのだろう。

だが、私は父を超える化け物を倒さなければならぬのだ。倒すといっても、馬鹿真面目に隣で走る必要は無い。後ろから車で轢けばいいのだ。ただ、それが非常に難しいというだけだった。法や周りのその他大勢よりも、最後の最後柏木由紀がよっぽど手強い。未だに捕まっていないという事は、彼は法や警察組織にも勝っている。

ふと、時計を見る。寝返りをうったせいで布団の冷たい所に体が行く。だが、そのお蔭で一度頭のごたごたが消える。時刻は普段なら寝ている頃。体感よりうだうだ考えていた様だ。そして何の結論も出ていない。思春期かと思った。

仕方がない。今日は寝よう。そして、更に苦肉の策ではあるが、彼のまた来るとい言葉信じ、来なければ諦めよう。そもそも彼は勝てる土俵にしか上がらないし、上げないのだろう。そして、もしまたカフェに来れば、その時は凡人の執念を見せよう。

外で鳥が鳴いた。こんなに寒いのによく布団の外で元気なものだ。この部屋に籠って、世界から隔絶されようと目論んでいたが、鳥ごときに邪魔されてしまった。謎の敗北感を抱えたまま眠りに落ちる。

バイト先の窓の外には灰色に汚れた雪が残っていた。柏木由紀には来て欲しいような欲しくないような複雑な気分だった。しかし、そんな事はお構いなく彼は来なかった。それに、客もあまり来ない。

「赤尾さん。仕事も無いし、帰っても大丈夫だよ」

マスターがそう言ってくれた時、男が一人入って来た。雇い主の帰宅許可は得たが、まだ勤務時間だ。この客までは対応する。だが、その男こそ柏木由紀だった。当然女と来るものだと言断していた。

「じゃあ、今日は一人だしカウンターに座ろうかな」

そう言って、彼は勝手に宣言通りの席に座る。私が作業する所が全て見える席だ。もはや、嫌がらせを受けている様な気分だった。

「この前のコーヒーをお願いするよ。気に入っちゃったんだ」

コーヒーを淹れる機械は彼の席の目の前だ。もう来ないで欲しかった。私が好きな物を好きだと言われて、初めて嫌悪感を抱いた。

「今日は黒いコンタクトを入れているんだね」

お前の顔は覚えているぞと言われた気がした。動揺して機械の熱い所に触れてしまい、大げさに避けてしまった。不自然だっただろうが、彼は何も言っていない。

「普段はこうしています。昨日は雪で滑って落としてしまっ」

彼の名前と同じ「ゆき」と発音してしまった事を後悔した。おそらく彼は毎回違う名前で詐欺をしている。余計な事を連想させてしまったかもしれない。下手に嘘をつくより本当の事を話した方がいいと思ったが、それこそ余計な事だったかもしれない。

「君も僕を覚えてくれていたみたいで嬉しいよ」

何を意味しているのかよく分からなかった。だが、不快感はあった。何か忘れ物をしている様な気分だった。

とりあえず、カップをお皿に乗せコーヒーを注ぐ。

「だって、僕が飲んでいたコーヒーも昨日来たのも覚えていてくれただろう」

カウンター越しにコーヒーを出すという小学生でも失敗しない様な仕事だったが、手が震えカップとお皿がカチャカチャと音を立てた。もし、彼が私の正体に気付いていて、私が彼の正体に気付いているかを確かめに来ていたのだとしたら、私は初手で詰まされていた事になる。

しかし、またいつものコーヒーの香りが私を冷静にしてくれた。

「コンタクトが取れた日は昨日だけですし、昨日私はこのオリジナルコーヒー以外は出した記憶が無いので」

今回だけは勝ったと思った。勿論、オリジナルコーヒーだけが売れるわけではない。しかし、大体の常連はこのコーヒーだ。

「お客の事を覚えていないとはっきり言うなんて傷つくなあ」

全く傷ついていなさそうにコーヒーを飲んだ。そして、彼のセリフは私がやっと取った一勝に

傷をつけた。

「勿論覚えていますよ。また来てくれると言ってくれたので」

「さあ、どうだったかな」

彼がはぐらかした。それだけでまた勝った様な気がした。

もしかしたら、本当に勝てるかもしれない。父にはこんな風に勝てると感じる事はなかった。よく考えれば、人を信じる才能の父と人を騙す才能の彼では、単に相性が悪かっただけなのかもしれない。

こいつにはちゃんと復讐する。何ならすぐそこにある包丁で刺しても彼は死ぬのだ。だが、焦りはしない。十年以上待ったのだ。そんな下らない事はしない。

ゆっくりとコーヒーを飲む彼を見つめる。たまに目が合うが、もう恐怖は感じない。

「ところでコンビニは近くにあるかい？」

彼が私に聞く。色々考えたが、この言葉に何の裏も見つけられない。しかし、コンビニは道を挟んだ向こう側。この店に入る時、見えていたはずなのだ。なぜわざわざそんな事を聞いたのだろうか。

「お店に入ってくる時に気付きませんでしたか。道の反対側ですよ」

そうだったねと彼は笑った。このよく分からない所をむやみに警戒して怯えていたのだろうか。であれば、私はかなり滑稽であっただろう。父が負けた相手が化物ではなく枯れ尾花だった事が少し残念でさえある。

「お会計はここに置いていくよ」

彼がびったりのお金をカウンターに置く。そんなシステムは無いが、後で私がレジ打ちをすればいい。それより、気持ちよく帰ってもらって、手がかりを落としたりまた来てもらった方がいい。

「はい確かに。また来てくださいね」

「ありがとう。また会えるといいですね。桜ちゃん」

そう言って、彼は出て行った。頭が熱くなる。こいつは私の正体を知っていたのだ。そして、最初の罠で私が彼の正体に気付いているかを調べた。その上で、私に優越感を与え遊び、最後に名前を呼ぶ事で自分が常に高見にいたとアピールした。

彼はコンビニに行くと言っていた。乗ってやろう。今の私は玉砕してもいい程に腸が煮えくり返っている。

レジに乱暴にお金を入れ、マスターに挨拶を済ませる。彼がさっさと帰るはずはないが、ある程度急いで制服の上に服を羽織る。彼がどの程度の気まぐれを起しているのかは知る由もない。裏口から出て、コンビニに向かう。そんなに走ってもいないのだが息が切れる。白い息が後ろに流れる。

コンビニの中を覗く。柏木由紀はこの店長と楽しそうに話をしていた。その余裕たっぷりな態度に、腹が立つ。油断しているに越した事は無いが、私にもプライドぐらいはある。

中の店長とはお店での付き合いがある為顔見知りである。ここで会うのは気まずい。外で待つ。だが、ここに来てバイト先にコートを忘れるという失態を犯した事に気が付いた。寒いが彼から

目を離すわけにはいかない。コートは諦める。

寒さが私の体温と闘志を奪っていく。少し虚しい気分になる。

数分後、彼がおでんを片手にゆっくりお店から出て来た。

「待ちましたよ。柏木由紀」

精一杯の虚勢を張る。父の件だけの偽名かもしれない名前をフルネームで呼ぶ。自分の声が寒さで震えてなかった事に安心する。

「どちらさんだろう。こんなに可愛い子は普通忘れないだけだね」

数分前に私の名前を呼んだのはわざとだった。今はあえて恍けているのだ。挑発だろうか。乗らない方がいいとは分かっているが、段々と腹が立ってくる。良かった。体が温まる。

「可哀想に凍えてしまっ。おでんをあげるよ」

お前なんかから貰う物は無い。そう言おうとしたが、彼は受け取るしかない所でおでんのカップから手を放した。とっさの事で、思わずカップを握る。悔しいがカップの温かさが手に広がる。

「いらぬ。お前から何か貰うぐらゐなら、凍え死んだ方がいい」

柏木由紀は少し悲しそうな顔をした。まるで、私が加害者でもあるかの様な錯覚に陥ったが、そんな事は無い。自分に言い聞かせる。

「君のお父さんのお金で買った物だよ。お父さんの奢りだと思っ」

おでんのカップを振り上げ、彼に投げつけようとする。しかし、寸前の所で横に逸らしてしまっ。おでんが派手に地面に転がる。

私は人生を狂わされ、こんなに馬鹿にされても、その原因の男にすら火傷を負わせる事は躊躇ってしまふのだ。私は彼の様な犯罪者ではない。彼に投げつける事が出来ななかつたのが、悔しいとともに誇らしくもあつた。だが、私の急な動きを見ていても、かわす素振りすら見せなかつた彼には腹が立つ。

「場所を変えようか。ステージがおでんでは興が削がれるだろう」

ステージではなくリングだと思つた。だが、コンビニの店長と顔見知りである以上、確かにこの場に留まりたくはなかつた。ここまでが彼の計算ではないと信じ、私はのこのこと裏道について行く。

私は彼と話をした。通りの桜の木に雪が重く押し掛かっている。

彼は敗北宣言の後に思わぬことを口にした。「君はこの不幸が気に入っているんだよ。でも、僕を見たら倒すのが礼儀だからね。君は今の自分の世界を壊されそうで怖いんだ」と。

私を全て見通した様な言い方に腹を立てる事よりも、その言葉の意味を理解するのに必死だつた。恐らく、悪手だ。だが、これだけは考えなければならぬ気がした。

「努力では越えられない才能の壁がある。君が僕や赤尾社長に迫いつく事は無い。それは理解しているね。だから、今何も出来ない。十数年掛けても僕に復讐する絵が見えなかつたんだ」

敗北宣言を嘘だつたと堂々と言い放つた事はいいとして、その考え方は私の座右の銘と言つてもいい。私のどこから読み取つたのだろうか。彼の私を下に見ている発言に怒る余裕も無い。

「会社を手伝ったところで失敗する。自分に出来る事は何も無い。だから、せめて不幸でないから許してくれ。凡人の自分では他人を幸せには出来ないから関わらないでくれ。そう聞こえるんだよ。君はお父さんの会社で働くべきだ」

どこまで知っているのだろうかと思った。今までと違う反論の出来なさだった。ただ敗北を感じた。しかし、それを認めてしまえば、全てが崩れるのも事実だった。もう目を背ける事しか出来ない。

「君は宝箱に余計な物ばかりを詰め込んでいる。十年前の憎しみや痛みばかりだ。それを大切にしているわりには鍵も掛けない。中身を皆に見て欲しいからだ。それでお父さんの死の罪滅ぼしにでもなると思っているのか」

わざと例えを連用して私に意味を考えさせようとしている事は理解している。だが、それは自分にすら分からないようちゃんと鍵を掛けていた所だった。もはや、何を言っても反撃にはならない。

「本当の事を教えてください。貴方から見ても、父はどうでしたか」

やっと口から出た言葉は敗北宣言とも言える様な、自分でも予期せぬものだった。だが、どうせ審判など必要の無い状態なのだ。

「まあ、嘘なんだけど、天才だったよ。今まで会った中で一番。僕と彼は道が違うだけで本当によく似ていたんだ。この町にまた来る事になった時には、彼と会う事を最も警戒していたよ。だから最初に会社の事を調べた。彼の死は本当に残念だよ」

とても嘘を言っている様には見えなかった。それで私の色々を調べたといふのであれば納得がいく。しかし、嘘は彼の得意分野だ。

「父はなぜ自ら命を絶ったんですか」

嘘だろうと思いなながらも、聞かずにはいられたかった。

「君には教えられないな。ただ、彼も君に匹敵するぐらい負けず嫌いでね。彼の死は少なくとも逃げではなかったよ」

ヒントではなくほぼ答えのような気がしたが、よくよく考えるとそれだけで納得のいく話ではない。氷山の一角なのだろう。凡人には常に物事の一端しか見えない。

「それでは二度と会いませぬように」

彼はそう呟き、完全に自分のタイミングで去って行った。大きな背中が闇に消えていく。しかし、呼び止める事も出来なかった。

漠然と最後のセリフだけは本心だろうと思った。

私は寒さを忘れた事にして、夜の街を歩く。通りの電灯は色も高さもまばらで田舎を感じさせた。雪はとっく踏み固められて一つになっていると思っていたが、かろうじて生き残った結晶が光を乱反射させている。少しでも通りを離れると明かりはなくなってしまう。知らない道を通りたいが、選択肢は限られていた。

私はどうすればいいのだろうか。実際、柏木由紀に言われた事に反論は出来なかった。私は誰かを幸せに出来る程の才能もなければ、一緒に不幸になる強さもない。酸っぱい葡萄しか食べな

いし望まないから、凡人である事を許して欲しかった。

父の会社で働きたい。出来る事ならそうしたかった。だが、そこで役に立てる自信がなかった。父が死んであれだけ迷惑を掛けて、さらに私が失敗をするわけにはいかないのだ。

であれば、父の死で迷惑を掛けておいて、娘の私が逃げた先で幸せになるなんて虫が良過ぎるのではないか。何も出来ない人間が罪滅ぼしをするには地獄に行くしかないではないか。そう思っていた。

誰が望んでいるとかではない。そうしないと私が潰れそうだった。

だが、何より楽しい時代の会社を知っている事で、今の会社の雰囲気には耐えられない可能性が高かった。

私を助けてくれる父の様な存在がいれば、私は安心して働けたのに。結局は柏木由紀さえいなければという話に落ちてしまおう。今となっては、働いたら彼のアドバイスを受け入れたことになってしまおうというのも大きなマイナス要素だ。

そもそも彼の目的は何だったのか。今後纏わりつくかもしれないコバエが鬱陶しくて潰しに来たのだろうか。

気が付いたらバイト先のカフェが見えていた。知らない道を極力選んではずだが、蛾の様に明るい道だけ歩いていたらこんなにも早く戻ってきてしまった。自ら望んだ事だが、こんなに狭い世界で生きていたのだと思ひ知らされる。

ふと足元に目を落とすと、見た事のない木の実が落ちていた。冬に実をつけるとは珍しい。だ

が、美味しそうではなく、食べれば体に良くない影響がありそうだった。

毒。

不吉な言葉が頭に浮かんだ。そういえば、家の近くにとても危険な植物が植えられていると、父は言っていた。名は「キョウチクトウ」だったか。スマホを取り出し検索する。指が動かなくても文字は打てるのだなど、自分に感心する。

確かにあった。『夾竹桃』。人を死に至らしめる事が出来る程の毒性を持つが、当たり前のように小学生の通学路にも植えてあるらしい。写真を見てもピンとこないが、探せばあるのだろう。

彼との勝負には負けた。それは心が認めてしまっている。簡単に拭い去れるものではない。だが、全て諦めたら、私の過去は何だったのだろうか。確かに彼の言葉は響いた。しかし、それも流行の曲を聴いて、自分と重ねる万人と同じ様なものだったのかもしれない。

もしもの話だが、これで柏木由紀を殺してしまえば、父の力で復讐した事にはならないだろうか。父や私の敗北が無かった事になりはしないだろうか。皆喜んではくれないだろうか。

どこにでもある植物だ。そして、詐欺師なんて恨んでいる人も多い。たとえカフェで飲まされたとバレたとしても、他の客が混入させた可能性もある。物的証拠で私を特定するのは難しいはずだ。

それに、もし私が彼を発見した時点で通報していたら、彼が死んだ時点で容疑者になってしまふ。実行するのであれば、通報はしないで正解だった。

なんだか、彼を殺せば全てが上手くいく気がした。何より、大きな何かそう誘導している様

だった。神様が悪い人間に天罰を下せと言っているのかもしれない。勝つ未来が見えた。

スマホの画面が真っ暗になり、悪そうな顔の女が映り込んだ。スマホはおそらく五分間操作をしないと画面が消える設定にしていた。私はそんなに長い時間こんな顔をしたまま道に立っていたのか。

「赤尾さん」

急に名前を呼ばれ固まる。私を「赤尾」で呼ぶ人間は誰がいたか。

「窓から見えて。忘れ物でしょ。なんで入って来なかったの」

マスターが私のコートを持っていた。暖かい室内用の仕事着のまま寒そうだ。小刻みに体を揺らしている。服が乾いた音を立てる。

「この寒さで忘れたなんて恥ずかしくて。ありがとうございます」

悔しいが我ながら嘘をつくのが上手くなってしまったものだ。嘘の罰かコートは外気よりも冷たい。

マスターはやれやれといった顔だ。白い息が髭に絡みつく。

「私が最後に接客した昨日も来た男の人分かりますか」

何となく、柏木由紀の話題を振ってみた。マスターが手に顎を乗せて、少し悩む。

「赤尾さんが最後に接客した人なら覚えているよ。背が高くてかっこいい人だね。優しいような。最近よく来てくれているのか」

柏木由紀を褒めたのは気に食わないが、よほど人を見抜く天才ではない限りそうなのだろう。

「あいっだけは気を付けてくださいね」

言った後に気付くが、マスターに言ったところで意味は無い。それに、彼の事を意識させるのは今後の事を考えても悪い事しかない。私も疲れたのだろう。もしかしたら、ただ柏木由紀の評価を下げたかっただけかもしれない。

「まあ、分かったよ。赤尾さん、風邪をひかないようにね」

マスターに礼を言い。私も家に戻る。

私は風邪をひいた。一週間ぶりのバイトだ。特別私に非があるわけではないが、マスターに会うのは少し気まずい。

だが、そんなのは些細な事で、私はかつてない程緊張をしている。夾竹桃をコーヒーに混ぜられるように加工して持って来たからだ。

おそらく、柏木由紀はもう来ない。彼の話から予想するならば、天才の娘である私に不意に会うのを恐れて、品定めに来ていた。もう彼は私を警戒すべき程の人間ではないと悟ってしまったはずだ。

だからこそ持ってきた。こんな命に関わる結論を出せる私ではない。ほぼ百パーセント来ない。だが、万が一コーヒーを飲みに来たら、毒を入れるのだ。私だってこんな簡単に人を殺せる物を持ち歩くのは、怖い。正直言って、来ないで欲しい。こんな物使わずに終わりたい。命を狙う側でこれなのだ。狙われる側はどんな神経をしているのだろうか。

急に「顔色悪いよ」とバイトの子に声を掛けられて驚いた。咄嗟に「病み上がりだから」と誤魔化す。最近は誤魔化してばかりだ。

「そんな時に悪いんだけど、一番奥に座っている男性が桜ちゃんを指名して……。オリジナルコーヒーをお願い。無理そうなら断るけど。ここはキャバクラじゃないんだし」

「ううん。もう本当に平気だから。任せて」

好機なのか危機なのか分からなかった。だが、このカフェに来る男の知り合いなど一人。私を指名。柏木由紀ならやりそうだった。

既に淹れてあったブルーマウンテンを手取る。もし実行するならば、間違えた事にして別のコーヒーを持って行こうと決めていた。いくら味の濃いコーヒーでも、飲み慣れた物に毒が入っていれば味で気付くかもしれない。

カップからコーヒーが零れる。震える右手を左手で抑えるが、左も震えている為何の意味も無い。無能で酷く冷たい手だった。苦いブルーマウンテンの香りが広がる。

私は泣きそうになりながらコーヒーを運んでいる。まだ手は少し震えている。しかし、溢さずに済んでいるのは、いつものオリジナルコーヒーの香りが少しだけ落ち着かせてくれているお蔭だろう。

私は夾竹桃を入れる事が出来なかった。決して彼を許したわけではない。ただ、私には人を殺す才能も無かった。私は一人で土俵に上ろうとし、勝手に負けた。

コーヒーをテーブルの前まで運び、ようやく客の正体に気付く。林さんだった。普段だったらこんな事は無い。今回はコーヒーを溢さないようにする為には、盆を見続けるしかなかったのだ。「ありがとう。急にごめんね。場所はお母さんに聞いたよ」

急に涙が溢れて来た。自分でも理由が分からなかった。柏木由紀に復讐出来なかったからか、林さんに普段通りの仕事を見せられなくて悔しかったからか、柏木由紀ではなく林さんで安堵したからか。よく考えれば泣きたい事ばかりだ。

「私は何で泣いているんですか」

知るはずもない林さんに聞く。間が辛かった。

「悲しんでいる様には見えない。嬉しい事があったのかもしれない」

嬉しい事なんてあっただろうか。そういえば、人殺しにならなくて済んだ。おでんの件でも分かったが、私に人を傷つける度胸は無い。それなのに、林さんや皆は簡単に傷つけてしまったものだ。

「悲しい顔に変わってしまったな。コーヒー飲むかい」

客に出したコーヒーを飲むという大問題を起こしている。熱過ぎて味は分からないが、涙が引いていく。優しいものだ。私とは違う。

マスターがおどおどしながら近づいてくる。いきなり店員が泣き出しただけならまだしも、その店員が客のコーヒーを飲みだしたのだ。状況は理解出来まい。そんなマスターの顔に笑ってしまった。

そんな時、二人の警察官が入って来た。明らかにコーヒを飲みに来た顔ではない。私が彼を殺そうとしたからだろうか。しかし、実行してなく、バレるはずもない。何の用だ。いくら天才といっても私が殺そうとしている事に前もって気付き、通報なんて事は出来るはずがない。夾竹桃を取る時だって、心臓が痛くなる程周りを警戒した。それで風邪が悪化したと言っても過言ではない。

警察が私達のすぐ近くにいるマスターの所へやって来た。私は無意識に夾竹桃入りのポケットを抑えていたのに気付き、手をどける。

「この店長ですね。鈴木博紀という人物を知っていますか」

警察は挨拶も無しに問い掛けた。柏木由紀の事ではないだろうかと推測出来たが、警察の失礼な態度に話す気にならない。

「ああ、知っていますよ。最近コーヒをよく飲みに来てくれました。今日は来てないですよ」

マスターが当たり前のように答える。

「すいません。実は彼による詐欺事件が発生していて、その被害者がここによく来ていたのを見ていたものですから」

つまり、この警察官はマスターが共犯の可能性を考えてカマを掛けたということか。ますます気に食わない。どうせ、この事件の調査も解決するまでは行わないのだろう。私の過去を話せば本腰を入れてくれる可能性はあるが、解決の糸口にはならない。

「そんな人には見えなかったけどな。赤尾さんが気を付けて言っていたから、話し掛けてみたんだけど、本当に凄くいい人で」

急にマスターの顔色が変わる。私もこの話で正体が柏木由紀だと確信したが、それ以上の動揺だった。なぜ、話し掛けたのだろうか。

「それで十万円貸しちゃいました。でも、名刺も貰っていい」

マスターが慌てて裏に行く。心底呆れた。父とは状況が違う。私は警告していた。

状況から考えると、被害者は目の前のコンビニの店長だろう。そう考えると、色々と納得がい。あの女は詐欺の相棒か何かだろう。

「エプロンのポケットに入れたままだったんですが」

マスターが申し訳なさそうに帰って来た。だが、その表情の理由は名刺にあった。『柏木由紀 詐欺師』。

全員の時間が少し止まった。そして、笑いがこみ上げてくる。不謹慎極まり無いが、抑える事は出来なかった。腹を抱えて大笑いしているせいで床しか見えないうし、呼吸も辛い。涙で視界も霞む。私以外の人間は私に変な人物を見る様な目を向けているに違いない。

しかし、マスターを笑っているわけではないので許して欲しい。今までの人生を振り返って、自分の愚かさを笑っているのだ。

もう、彼程の天才を理解出来る気はしないが、こう思う事にする。『詐欺師』と入れたのは、マスターに名刺を確認する事すらさせない程自分を信用させる自信があったから。『柏木由紀』

の名を入れたのは私へのメッセージ。現に今回は別の偽名を使っていた。

私が警告したにも関わらず、マスターはたった一日で十万円をだまし取られ、阿保みたいな名刺も掴まされた。おそらく、マスターに「返さなくてもいい」とでも言わせる様な話でもしたのだろう。そして、半ば強制に名刺も渡した。

勝てないよ。柏木由紀。私はこんな男と戦おうとしていたのか。馬鹿だったな。何も見えていない。そして、負けた後にまで性懲りもなく復讐しようといっていたのか。学習能力も無い。

だが、勝てない事が分かってむしろすっきりした気がする。これで安心して諦める事が出来る。一生掛かってもどうにも出来ない相手に人生を掛ける意味が無い。

マスターが私の名前を呼んだ。自分の事を馬鹿にしているのかと恐れているような聞き方の様に感じた。

「いえ、しつこく変な口説き方をされていたので気を付けて欲しいと言ったんですが、その詐欺師を最近かっこいいと思い始めていた自分が馬鹿らしくて」

適当に誤魔化す。無意味な調査に協力させられても面倒だ。マスターが安堵の表情を浮かべているが、お金が帰って来ないという事には気付いているのだろうか。

「あと、バイトを辞めさせてください」

マスター達には雇い主が詐欺にあつた直後に辞める非情な女だと思われたかもしれない。もしかしたらマスターの事だ。詐欺にあつたようなマスターの所ではバイト出来ないを取ったかもしれない。

だが、辞めるのだ。どうでもいい。私にはやりたい事が出来た。

この世界には凡人ばかりだ。凡人は凡人なりに自分の才能の範囲でやりたい事をするしかない。林さんを見る。神妙な顔をしていた。そういえば、林さんも名刺を見て何も感じないはずがない。私に合わせて黙ってくれているのだ。そろそろ林さんを安心させてあげないといけない。

数日後、私は父の会社の朝礼で林さんの隣に立っていた。初めてここに立つが、窓から敷地に植えられた桜がはっきりと見えた。雪は消え、蕾もついていた。久々の春が近い様だ。早く桜が咲く季節に追いつきたい。

林さんは事前はこの話をしていなかったらしく、部屋に入った瞬間から、私の名前を呼ぶ声がちらほら聞こえた。自己紹介を済ませ、本題に入る。

「今日から私もここで働かせていただきます。なので、もう元社長の子供という扱いではありません。下の名前で呼ぶのは禁止です」

歓声が上がった。男しかおらず、平均年齢も高い為、普通では聞かない驚く程低い歓声だった。少し面白い。思わず顔が緩む。だが、ここはビシッと決めたいので、我慢をする。横を見ると林さんは泣きそうな顔をしていた。申し訳ない。彼には心配を掛けた。

「新入りですが、秘書をさせていただきます。社長のサポートとその他の事務作業もさせていただきます。なので、ボーナス等も私が決定します」

ここで言葉を切り、少し様子を見る。

「そんな事許されるか。バカ尾」「バカ尾」「桜ちゃん可愛いよ」

予想していなかった野次が含まれていたが、安心した。彼らも変わっていないかった。そして、あんな事をした父の私を受け入れてくれた。父の死後に新しく入った人だけがキョトンとしている。

実は次のセリフまで考えていたのだ。だから、ここまで順調に運んだ事が嬉しい。既に流れ始めた涙を堪える。隣はもう見ない。つられてしまう。最後まででは言うのだ。

「秘書と呼んでください。給料減らしますよ」

再び歓声が上がった。

(工学部機械システム工学科四年)

アジサイの日

木乃 一孝

母からの電話は決まって長くなる。GW前最後の講義が終わり、加奈子の部屋で旅行の計画を立てている時だった。

「ごめん、母親からだ……。なるべく早く早く済ませるから」

僕はテレビの電源を消しながら言った。

「耕平とお母さんの電話、本当に長いもんね！気にしないでいいよー。その間にいくつか場所、しばっておくね」

加奈子はスマホと観光本を交互に見比べながら言った。

「もしもし、どうした？」

と、聞きはしたが、母の話す内容はだいたい決まっている。パート先の愚痴か、連休は帰省するかの確認のどちらかである。いずれにしても、僕はなるべく早く電話を切り、旅行先の選定に戻りたかった。

「お、なかなか出ないからバイト中かと思ったよ。あんた、GWは帰ってくるの？」
ほらきた、僕はそう思い、心の中であらかじめ用意しておいた内容をそのまま読み上げた。

「いや、今年は帰らない。友達と旅行に行くんだ。バイトも少し入らないといけなみたいで、今回は時間がなさそう」

加奈子と付き合い始めて一年と半年程になるが、まだそのことを母には言っていない。彼女ができたことを母に知られると、早く会わせろ、どんな子なの、誰に似てるのと徹底的に追及される。僕はそれがトラウマになっていて、なるべく彼女の存在を隠しておきたかった。

「あら、そう……。意外とあんたも忙しいのね。でもね、今年だけはあんたに帰って来てほしいの」

母がこんなことを言ったことはこれまで一度もなかった。弟も今年から社会人になり、子供が二人とも巣立ったことで寂しくなったのだろうか。

「どうしたんだよ、そんなこと言うなんて珍しいね」

「それがね……驚かないで欲しいんだけど……もう長くないんだって。癌、らしいの」

僕は言葉を失った。あまりに話が唐突で頭がついて行かなかった。それでも僕は、声を振り絞って聞いた。

「嘘でしょ……？そんなに元気なのに、仕事だってまだ続けてるんでしょ？」

「私じゃないの」

母は一瞬間をあけて、言った。

「お父さん。大腸に大きいのが。もう、だいぶ進んでるって……」

母の言葉を聞いて、僕は安心した。よかった、すぐにそう思った。

「どうしてそんな面倒くさい言い方したんだよ。でも、よかったよ、家族じゃなくて」

母は返事に困っていた。母がそうなることもわかっていたため、僕は続けて言った。

「母さんはちゃんと、身体には気をつけるんだよ？もう若くないんだからね。それじゃあ、今回は帰らないけど夏休みに一度帰るかも。その時はまた、こっちから連絡するよ」

僕は母の返事を待たずに、電話をきった。

「お母さんに嘘ついたでしょ！どうして彼女と旅行に行くって正直に言わないのよー」

わざとらしく頬を膨らませている加奈子には適当に謝り、僕は旅行先を決める作業に戻ろうとした。

「あとさ、ご家族になにかあったの？耕平、途中すぐく不安そうにしてたし、ちょっと気になって」

「ああ、知り合いの調子がだいぶ悪いらしくてさ。最初母さんが病気なのかと思って驚いたよ」

「そうかーでもその知り合いの人も大変だね……。お見舞い行かなくていいの？」

「いいよ、行かなくて」

「どうして？そんなに近い知り合いでもないんだ？」

「知り合いは知り合いだよ！どうでもいい知り合いなんだ」

僕は早くこの話題を終わらせたかった。気になったことは納得するまで聞いてくる加奈子の性格は、時折僕を腹立たせる。今はまた「別の」感情の要素が加わって、僕は機嫌が悪かった。「どうしたの……？そんなに怖い顔して」

加奈子の目は怯えていた。このままでは旅行どころではなくなる。僕は母から聞いたことを正直に言うことにした。

「あの人に、癌が見つかったらしい。しかもなかなか進んで、もうあんまり長くないって言った」

「あの人……って？」

加奈子は僕に聞いたが、押し黙り、答えようとしないう僕を見て、察しがついたようだった。

加奈子には、僕と父とのことを言っていた。今後も長く一緒にいるのであれば、伝えておかなければならないと感じたからだ。今思うと学生にも関わらず、あまりに時期尚早だとも思ったが、当時の僕は僕なりに真剣に考えたのだろう。

確かその日加奈子は、僕の話聞いて泣いていた気がする。

僕は未だに、その理由がわからない。

父がいわゆる「普通」の父親とは少し違うと感じ始めたのは、僕が小学五年生の時の、クリスマスの日だった。その日の我が家では定番のクリスマスソングが家中に響き渡り、クリスマスツリーはまぶしいほど光っていて、テーブルにはごちそうが並んでいた。いつもと違う雰囲気僕

と弟は興奮していた。それぞれの席に着き、僕と弟は、まだ食べてはいけぬのかと何度も母に訴えかけた。母親はもうちょっとだから、と僕らをその度注意したが、その表情はどこか幸せそうに見えた。

飲み物もつぎ終わり、母がそれを皆に回そうとした時だった。弟が我慢できずに、唐揚げをつまんで食べてしまったのだ。僕は直感で、弟は母に怒られると思った。しかしその予想に反して、母はあまり怒らなかつた。

「もう、弘樹ダメでしょー。ちゃんといただきますしからよ？わかつた？」

家中に溢れる幸せな雰囲気をつぶさないたくなかつたのだろう。幼いながらに僕はそう思った。

弟がもぐもぐと唐揚げを食べながら、ごめんなさいと謝つた時だった。

「弘樹、どうして食べたんだ。あれほどお母さんが言っていたのに、どうして待てなかつた」

いつもはあまり、息子を叱ることがない父親にしては珍しかった。弟もその珍しさに戸惑つたのだろう。だって、だって、と泣きべそをかきながら繰り返すだけだった。

「お腹空いてたんだよね？今度から気をつけようね」

母がそう言いながら、もういいじゃないと言いたげに、父に向かって首を振っていた。

「ダメだ！どうして食べたんだ？弘樹、言うんだ！そして謝れ！いつもいつもお母さんに迷惑をかけて、謝るんだ！」

弟は父がこんなにも怒る姿を初めて見て、泣いていた。母ははじめ驚いていたようだったが、すぐに父に向かって言った。

「そんなに怒る必要ないじゃない！特に今日はクリスマスだし、ちょっと陽気になり過ぎる気持ちも、わかるでしょう？」

「このままじゃいつになっても子供たちはわからない。だから俺が、父親がこうやってわからせてやらないといけないんだ。ほら、弘樹、理由を言いなさい！」

父はそう言っ、弟の胸ぐらを掴んだ。そして激しく弟の身体を揺らした。母は必死にそれを解こうとしたが、父はその手を放さなかった。

「こんな乱暴なやり方、父親のすることじゃないわ！父親失格よ、あなたは！」

母が泣きながらそう言い終わった瞬間、父は弟から手を放し、母を睨み付けながら立ち上がり、食事が並んだテーブルを蹴り上げ、自分の部屋に帰って行った。

弟の叫び声にも近い泣き声と陽気過ぎるクリスマスソングが鳴り響き、母の手料理は無残な姿で床に散らかっていた。僕はその状況にやっと思考が追いつき、数分前の幸せな気分と今の状況との差が悲しくなって、涙が溢れた。母は泣き叫ぶ弟を抱きしめ、僕と弟にごめんね、と何度も謝った。その時の母の瞳がやさしくて、そのやさしさがまた辛くなって、僕は更に大きな声で、泣いた。

その後、僕と弟はすぐに布団に入った。泣き疲れたのだろう。おかげで僕はすぐに眠りにつくことができたが、夜中の三時くらいだっただろうか、目を覚まし、トイレに行った。その帰りに父の部屋から声が出たため、少し覗いてみると、父と母が居た。

「ごめんな……本当にごめんな……」

父はうつむき、一点を見つめながらそう何度も繰り返していた。

「大丈夫、大丈夫」

母は父の隣に座り、まるで赤子をあやすように、彼の背中をさすりながらそう何度も言っていた。当時の僕には、その時の何かに怯えるような父と、弟を叱っていた父が同じ人物には思えなかった。

しばらくすると、母は不思議そうに見ている僕に気付いた。

「眠れないの？」

「トイレに行っただけ。また明日ね。おやすみ」

僕は何か見えてはいけないものを見てしまったような気がして、足早に自分の部屋に戻った。その夜は、父の縮こまった姿が忘れられず、しばらく眠ることができなかった。

翌日の朝、僕と弟は前日食べるはずだったケーキを食べた。

「こんなにたくさん、食べていいの？」

ケーキを口いっぱい頬張っている弟を横目に、僕は聞いた。

「いいのよ、お父さんはケーキいらなんて。だから、たくさん食べなさい」

母の笑顔は、どこことなくこちなかつた。

次の年のクリスマスには、食卓に父は居なかつた。

父が精神病であることを知ったのは、僕が中学に入学してすぐだった。母から、僕ももう大人だから知っておくべきだと言われ、父が中学生の頃から精神的な病気を患っていること。その病気が極端に気分が高揚することと落ち込むことがあること。僕たちが生まれてからしばらくは症状があまり出ていなかったこと。それが徐々に再発し始めていたこと。現在はそれほど重症ではないが、また症状が出て暴力を振るうといけないため、しばらくは入院治療を行うことを決めたこと。僕はたくさんの話を聞いた。

話を聞いて、もちろん父が精神の病を患っていたことを知り、驚き、戸惑いもしたが、母に大人だと認められたような気がして、少し嬉しい気持ちもした。それと同時に長男である自分が、父の代わりに母を支えていかなければならないと、強く思った。

初めのうちは、父に会えない寂しさはあったものの、以前の生活と大きな違いは感じずにいた。しかし月日を重ねるごとに、父親が家庭にいないということの重大さを痛感し始めた。母は父の代わりに必死に働き、その上家事もこなした。足の裏はボロボロで、マッサージをしてやると言っても、僕らにそれを見せまいと断った。僕も幼いなりに母を支えてやらねばと、友達との遊びを断ったり、好きなテレビ番組を我慢しながらできる限りの手伝いをした。

中学三年にもなると、周りの友人は携帯電話を持ち、塾に通いはじめた。もちろん、我が家にはそんな余裕はなかった。それは重々わかっていたつもりだった。しかしその頃の僕はいわゆる

「多感な時期」で、周りの友人たちとは異なる家庭環境に、そしてそのせいで我慢しなければならぬことが多いことに、嫌気がさしていた。それでも、父がいつか戻ってくることを期待して、我慢し続けた。

しかし時間が経てば経つほど、稼ぎ手がない家庭は苦しくなり、僕らは更に多くの我慢を強いられようになった。それだけではなく、僕の父が精神病で入院していることは少しづつ知られるようになり、「大変だね」と声をかけられることが多くなった。余計なお世話だとも思ったが、僕の前で父親の話をするのはタブーだと、やけに気を使ってくる人々にも、それはそれで腹が立った。

当時の僕と弟にとって、父の存在は完全にコンプレックスになっていた。もはや父の退院や回復は、僕らのゴールではなくなっていた。それどころか、自分たちにも辛い思いをさせてきた、憎い相手だという感情が芽生え始めてきた。一方で、父も好きで病気になったのではないのだから、理解してやらねばならないという気持ちもあった。そんな複雑な思いを抱きながら、僕は学生生活を過ごした。毎日不自由なく楽しそうに生活している周りの友人たちを見ると、どうしても自分の人生を恨むようになっていた。

父はそんな僕らの気持ちなど知らず、度々一時的な退院で嬉しそうに家に帰ってきた。

確かあの日は、六月のはじめ辺りだった気がする。僕は父と家で二人きりになった。父はテレビで取り上げられていた色とりどりのアジサイを見て言った。

「耕平、アジサイの花言葉って知ってるか」

僕は自分の部屋に戻ろうとするとところだったため、少しめんどくさそうに、知らないと言った。

「アジサイには二つ花言葉があるんだ。一つは家族の結びつき。そしてもう一つは、無情。極端でおもしろいだろ」

僕は父が単に雑学として話題を提供しているのか、それとも何か違う意味を含んで話し始めたのかわからなかった。

「この二つの花言葉、まるで我が家のようにだと思わないか」

後者だった。耕平は少し強い口調で聞いた。

「どういうこと？」

「お前も弘樹も母さんも、父さんが帰ってくるたびに、早く良くなって言ってくれるよな。

母さんだって忙しい中週に一回は必ず病院に来てくれる。看護師には良い家族をお持ちですね、なんてよく言われるよ。でも、父さんわかるんだ。本当はもう、俺が帰ってくるなんて望んでないんだろ？仕事もできない、家族に迷惑しかかかってない、存在価値のない奴だって、そう思ってるんだらう」

酷い言い方だった。ただ、すべてを否定することはできないと思った。むしろ、僕が決して本人には言えないことを、代わりに自分で言ってくれたようにすら感じた。しかしこれ以上父の精神を刺激するといけないと思い、僕は適当に話を終わらせて部屋に戻ろうとした。

「そうかな？自分たちじゃわかんないや」。

すると父は、待てと言わんばかりに大きな声で言った。

「母さんも、病院に来るといっても洗濯物を取りに来るだけだし、お前たちだってこうやってたまに帰って来ても、まるで話そうとしない。冷たいよな、ほんとに。こっちだって好きで病気になるわけじゃない。父親だなんてまるで思っていないんだよ、そうだろ？」

僕は自分で鼓動が早くなっていくのがわかった。頭が熱くなる。自然と歯を食いしばっている。これ以上、僕は我慢することができなかった。

「父さんは……父さんは僕たちに悪いって、そう思ったことはあるのか」

「悪い？」

「父さんは病气だ。苦しいんだ、だから僕たち家族と一緒にそれを乗り越えなくちゃいけない。始めはそう思ってたよ、僕も弘樹も。でもさ、あれから何年たったと思う？父さんが入院して、一緒に生活しなくなってから。七年だよ？七年間、父さんがいない間に本当に色々なことがあったんだ。お金のことでたくさん我慢したし、悔しい思いもした。他にも惨めな思いもたくさんしたよ。何度悔しくて泣いたかわからない。一番つらいのは母さんさ。父さんの分まで必死に働いて、家事もして、それで父さんの世話もして」

僕がそう言い終わると父は言った。

「申し訳ないと、思うよ」

「それでもまだ、冷たいだなんて言えるのか。どうして何も与えられてないどころか、迷惑ばかりかけてくる人に、何かを求められなくちゃいけないんだ」

すると父はソファーに腰かけ、テレビを眺めながら言った。

「仕方ないだろ……。病気なんだから。どうせお前たちには、父さんの苦しみなんてわからない。お前たちの何倍も悩んで苦しんで……。これ以上どうしろって言うんだ。そうさ、お前も一度、同じ病気になってみればいいんだ。わからないからそんな酷いこと言えるんだ」

気が付くと僕は、泣いていた。涙が止まらなかった。「同じ病気になってみればいい」。あまりに情けない言葉だった。そんな言葉を息子に平然と言う父を持つ自分が可哀想になって、虚しくて仕方なかった。

それ以上に、「病気」にも、それにより家族に苦勞させているという「現実」にも向き合おうとしていない父の姿が、何より惨めに思えた。

僕は父を一瞥もせず、自分の部屋に戻った。

それ以来僕は、父を明らかに避けるようになった。母と弟には経緯を説明して、これから僕は父とできるだけ関わらずに生きていきたいという旨を伝えた。弟は納得していた。むしろ、弟も同じ考えだった。母は悲しそうな表情をしていたが、何も言っていなかった。というよりも、何も言えなかったのかもしれない。父からはそれ以降何も連絡はなかった。僕にとっては好都合だった。

その日から僕は、父と縁を切った。

「さあ、早いところ行く場所を決めてしまおう。ただでさえ今から予約なんて遅いんだから」

僕は父のことで時間を使いたくなかった。一刻も早く加奈子との時間に戻りたかった。観光本のページを意味もなく往復し、適当に見つけた観光地を彼女に勧めようとした時だった。

「ねえ」

加奈子のその声は、明らかに何かしらの決意が込められたものだった。僕はこうなることを、恐れていた。

「なに？ここ、安いし景色もきれいだし……」

「お父さんに、会いに行こう。一緒に」

やっぱりか。僕は彼女の言葉に驚きはしなかった。彼女はいつも、僕が避けていた道に僕を連れ出そうとする。

「僕は前に、あの人との間に何があったか、君に話したはずだろ？あの人とはもう、なるべく関わらずに生きていたんだ」

「確かに耕平の気持ちもわかるよ？私が耕平と同じ境遇にいたとしたら、お父さんの言葉には失望して、腹が立って仕方ないと思う。でも、お父さん、もう長くないんだよ？このまま、他人のままお別れしていいの？それに、」

そう言いかけて彼女は一瞬俯き、再びしっかりと僕を見て言った。

「親違ってそんなに、もうこれから関係ないからって、忘れられるものなのかな？」

「少なくとも、僕はできてる」

「お父さんは、違うかもしれないじゃない！」

そういった加奈子の頬を涙がつつた。

「なに泣いてるんだよ……」

「ごめん。あのね、急で驚くかもしれないんだけど、実は私の両親、私が小学生の頃に離婚したの」

初めて耳にすることだった。加奈子の両親とは何度か会ったことがあるが、彼女からそんな話は聞いたことはなかった。

「じゃあ、今までお父さんだと言ってた人は……」

「うん、お母さん再婚したの。だから新しいお父さんだね。すごく優しいの。お母さんのことを愛してるのが一目で分かるし、私にもたくさん時間も愛情も、お金も注いでくれた。大好きよ。でもね……。やっぱり私、最初のお父さんのこと、未だに忘れられないの。再婚して子供ができなくて知った時、なぜか涙が止まらなかった。浮気が離婚の原因でさ、お金もパチンコですぐ無くすし、あんまり良い思い出ないんだけどね。何でこんな風に思うんだろうって考えてみたんだけど、明確な理由は見当たらないの。もし一つだけあるとしたら、私たちが親子だからってことしか、思い浮かばないの」

「そんな当然なこと……?」

「うん、私もそう思ったけど、でもこれがすべてだと思うの。やっぱり、いくら嫌な人でも遠く離れてても、お父さんはお父さんだって。会いたいな、話したいなって、そう思うの。新しい子供もいるらしいけど、きつとあっちもそう思ってくれてるって願ってる。もうそれを確かめ

ることもできないんだけどね」

「会いに行けばいいじゃないか」

「もう家庭があるのよ。私が行ったらお父さんがよくても、奥さんやお子さんが辛いに決まってる。だから、」

加奈子は僕の手をぎゅっと握りしめて言った。

「私の代わりに耕平に証明して欲しい。どんなに時間が経っても、距離が離れてても、親子は親子なんだって。あなたがそんなこと望んでないのはわかっている。でも今の中途半端な関係のままじゃきつと後悔する。一度会うことで改めてわかることがあると思うの。それが和解に向かうのか、それともその逆になるのかはわからないけど……。とにかく耕平には、もう私には選べない選択肢を、無駄にしてほしくない」

加奈子は微笑むように言った。笑おうと努めていた。だが彼女の頑張りを無視するように、一筋の涙が彼女の頬を伝った。

僕は彼女のこんなにも悲しそうな笑顔を見たことがなかった。必死に伝えようとしてくれたのだと、わかった。

僕は手を伸ばし、指先で彼女の涙をぬぐった。

「あら〜いらっしやい！狭いけど、どうぞぞ」

母は電話を取る時と人をうちに上げる時だけは必ず声が高くなる。今日はいつもより随分と高

かったから、かなり緊張しているのだろう。母にしては珍しかった。

僕は母に加奈子を紹介した。始めはかたい雰囲気であったが、元々おしゃべりな加奈子が上手く空気を作ってくれ、次第に母もいつもの調子を取り戻し始めた。その後二人は、互いの趣味や好きな芸能人、得意料理など、様々な話を二時間もの間話し続けていた。僕は女性陣のパワフルさに若干圧倒されながらも、将来のことを考えると、なんとなくうれしい気持ちになった。このまま、「彼女を母親に紹介した」、そんな平和なGWで終わってくれればいいと思った。

食事の後、母は加奈子に僕の幼少期のアルバムを見せ始めた。

「いや〜かわいいですね！耕平君。」

「昔はね〜。今や当時の人懐っこさのかけらも見当たらないわ」

僕の写真を見ていちいちコメントする二人を他所目に、僕は自分の作文集を見ていた。小学生とは思えないほど物事を斜めから見た文章に、思わず苦笑した。

作文を一通り読み終わり、入っていた箱に片づけようとしたときだった。一冊の古いノートが見えた。パラパラとめくってみると、字は幼かったが、僕のものではなく、弟の字でもなかった。

「母さん、これ誰の？随分と古いようだけど」

母は僕が差し出したノートを見て一瞬、言葉を詰まらせた。

「それは……お父さんが、子供の頃に書いた日記よ。確か、中学生くらいのものかしら。」

「日記、ですか？どうしてお父さんの日記がここに？」

加奈子は元々丸い目をさらに丸くして言う。

「耕平の父はね、小学生の頃から悩みやすい子だったらしくて、中学にあがったころには病気だと言われてたらしいの。加奈子ちゃんも知ってる通り、精神病よ。主な原因は人間関係でね。友達も作ることができなくて、それでふさぎこんでしまったらしくて……。それで医者から治療の一環として日記を書くことを勧められたらしいわ。私も何度か読んだことがあるけど、ここにあったのね。最近見当たらなかったから」

僕は幼い頃の父の日々そのものを目の前にしているようで、何となく居心地が悪くなった。

「私……読んでも良いですか？」

加奈子は母に聞いた。母に聞くと同時に僕にも確認を取っているかのように聞こえた。

「もちろんよ。耕平も、読んでみなさい」

僕は躊躇った。一度絶縁を決めた相手の過去など知る必要がないと思った。しかし、心のどこかで見てみたいと思う自分もいた。何より、加奈子の訴えるような眼差しに負けた。

「じゃあ……少しだけ読んでみようか」

僕と加奈子は、ページをめくった。

「八月二十日 晴れ 今日には運動会の練習だった。練習だったのに、母さんは友達と一緒に食べなさいとたくさん弁当を作ってくれた。それでも結局、また一人で食べて、残した。僕が謝ると、母さんは笑って許してくれた。だけどその笑顔は少し寂しそうに見えた。また僕は、母さんを悲しませてしまった。」

いつの間にか僕らの後ろにいた母が笑いながら言う。
「何とも切ない日記でしょ？悲しくなってくるもの」

僕は他のページにも目を通してみた。ただ書かれていることに大差はなかった。父は母が言ったように友達付き合いが上手いかず、一人で過ごすことが多かったらしい。日記にはその寂しさど、自分を責める言葉、どうすれば上手いくのかという葛藤、自分に期待してくれている両親への申し訳なさが綴られていた。

父が精神病であることは知っていたが、その苦しみを目の当たりにしたのは初めてだった。父があの日言った「苦しみがわかるか」という言葉が思い浮かんだ。

これ以上見ていると、情が湧いてしまいそうで、僕は日記を閉じようとした。すると加奈子がそれを止めるようにして言った。

「ちょっと待って！この日付のページ、すごく長い」

加奈子が言うように、その日付のものは他と比べて異様に長かった。

無意識に僕は、自分から進んで目を通していた。

「二月十八日 くもり 今日には両親の結婚記念日らしい。父が母に花を買っていた。父がこんなことをするのは珍しい。母も喜んでた。二人はどんな風に結婚に至ったのだろう。聞いてみたいが、なんだか恥ずかしいからやめておこう。幸せそうな二人を見て僕にもいつか、家族がで

るか不安になった。心から分かり合える人と出会って、心から愛しい子供ができて。そんな家族を持てる日が来るのだろうか。友達すらない僕には、少し贅沢な夢なのだろう。それでも、もし僕に家族ができたとしたら、そんな夢のようなことが実現したら、僕は嬉しくて嬉しくて、泣いてしまうだろう。

もしその夢が叶ったら、僕は次に、頼られる父親になりたい。かっこいい父親でいたい。必要とされる、人生を送りたい。子供に数学を教えてやりたい。ゴキブリをやっつけてやりたい。進路の相談にのってやりたい。今まですましくなかった分、必死に家族を愛して、働いて、過ごしてそうやって人に必要とされて、頼って、支えあう関係を築いてみたい。……なんて妄想を膨らませる前に病気という敵を倒さないといけない。明日は期末テストだ。寝る前にもう一周してから寝よう」

読み終わってしばらく黙っていた僕と加奈子を見て、「どう？」と母が聞いてきた。

「……驚いたよ、こんな風に思ってたなんて。でも、」

「でも？」

「ますますわからないよ。これだけ家族という存在に憧れて、良い父親になりたいって言うてるのに、実際に夢が叶うとまるで大事になんかしてないじゃないか」

「それは……」

加奈子が何か言いたげだったが、僕は遮るように言った。

「問題は病気じゃないんだよ。病気で働けないことはそんなに重要なことじゃない。もちろん働けなくて稼げないし、僕らも辛い思いをしたさ。でも一番の問題はその病気と向き合わないことで、僕らに苦勞させていることも向き合おうとしていないとき」

加奈子も母も黙っていた。

「これは、病気のせいじゃない。あの人自身の問題だ」

僕はそう言って、テレビの電源を付けた。この話もうやめようと、暗にそう言いたかった。

一休みした後、母が僕らを連れてきたのは、父が長く入院している精神病院だった。癌が大きく、すぐには手術はできないため、薬で小さくしながら様子を見ることになっていられるらしく、その間は慣れた環境に居たほうが精神的にいいということから、こちらに入院しているらしい。

エレベーターに乗りながら、僕は憂鬱な気分になっていた。過ぎた時間はあまりに長く、父と対面したときにどのように振舞えばいいのかわからなかった。

目的のフロアに着き、僕がため息を着いた時だった。エレベーターが開くと、お世辞にも上手いとは言えないカラオケが聞こえてきた。少し進むとその声の主はくたびれたパジャマを着た、恐らく僕くらい若者のようだった。僕たちを迎えてくれた看護師が、今日は月に一度のカラオケ大会であることを教えてくれた。大会といっても、誰も歌を聴いている様子はなく、ただ各々が歌いたい曲を歌うだけの催しものようだ。他にもただぼうっと窓から景色を眺めている人や、赤ん坊のようによだれを垂らしながらご飯をたべている人、看護師に連れられ用を足しに行こう

としている人など様々な人が居た。

ここに父がいるということが信じられなかった。僕が小学生の頃、何度か母に父の病院に連れて行って欲しいと頼んだことがある。その度母は「今はダメ」とだけ言った。当時は何の理由も言わずに拒む母を訝しむこともあったが、その理由がわかった気がした。

看護師に連れられるまま僕たちは面会室に着いた。扉を開けると、そこに父が居た。ただ、僕が父を父だと認識するのに、少し時間がかかった。顔はやつれ、背筋は曲がり、目は虚ろで、少ない髪の毛は乱れ、かつての中年男性の代表のような雰囲気からは程遠い姿になっていた。

母が始めに声をかけた。

「耕平が来てくれたわよ。そしてこちらが耕平とお付き合ひしてくださってる、加奈子さん」

父は母にそう言われても、返事をせず、お辞儀していた加奈子を見てもいなかった。ただそれは故意ではなく、認識できていないだけのように見えた。

「実は最近、あんまり頭もまわってないらしくてね……。昨日は調子よかったんだけど、今日は少し悪いみたい」

母が父の背中をさすりながら言った。

僕は正直助かったと、そう思った。父の姿に、そして父が生活しているこの環境に驚きを隠せないでいた。何か話せと言われても、恐らく何も言葉が思い浮かばなかっただろう。そもそも僕は、縁を切った相手が想像と異なる姿をしていたからといって、どうしてこんなにもショックを受けているのか。そんな自分に一番戸惑っていたのかもしれない。

「驚いたでしょう」

母が僕の表情を見て言った。

「やっぱり癌になってから、急に弱っちゃってね。薬で治療してるから、その副作用もあるし。それとお父さんの場合はね、今ひどく心が落ち込んでるの。例の病気でね。精神病ってね、生きたいっていう人間の根柢の感情がなくなっちゃうの。だから食欲も減って、ご飯も食べなくなる。そして体力もなくなる。身体に不具合が生まれる。あとね、自律神経の乱れが原因でお漏らしもよくするわ。そんな弱っていく自分を見て、惨めな自分を見てまた落ち込むの。典型的な悪循環でしょ？」

母はまるで精神科の医者のような口調でいった。いや、事実医者と遜色ないほど精神病について知っているのかもしれない。

「じゃあ、さっきここに来るまでに居た人たちも……」

「そうね、詳しくはわからないけど、お父さんと同じように心に病を持った人たちなんだろうね。彼らも様々なことで苦しんでいるんだと思う。精神病は、決して単に落ち込んだり興奮したりするだけの病気ではないの。どちらかというとそこから派生する日常生活への障害のほうが、本人も、周りの人も辛かったりするの」

母のその説明を聞いて、僕はいかに父の病について無知であったかを痛感した。ある程度は、知っているつもりだった。ただそれがある程度であることはなんとなく自覚していて、自分から知る方法や機会はいくらでもあったが、それを避けてきたのもまた事実だった。

母が話している間、父はずっと床の一点だけを見つめていた。やはり母が話したことは何も聞こえていないようだった。そんな父を見て、母は僕たちに言った。

「せっかく来てもらったのにごめんね。今日は本当に調子が悪いみたい。一度だけ、耕平に会ってあげて欲しかったから。それだけで、十分。ありがとうね」

加奈子にも申し訳なく思ったのだろう。病室に来てまだ数分しか経っていないが、僕たちは母の意図を汲んで帰ることにした。

「お父さん、頑張ってくださいね。病気に負けないでください。きっとよくなりますから」
帰り際に加奈子は父の手を握りながら言った。

その言葉は父に聞こえたようだった。父はその日初めて口を開いた。

「よくなっても、その先に何もいないだよ……誰も待ってくれてやしない」

父は依然として床の一点だけを見つながら続けた。

「生きていても、仕様がいないんだ」

その表情は悲哀に満ち溢れているものではなく、ただ当然のことを言っているというような、そんな風に見えた。だからこそ僕は苦しくなった。心なしか母は俯いているようだった。加奈子は涙をこらえるのに必死のようだった。

僕と加奈子は、父のつぶやきは聞こえなかったフリをして病室を後にした。これ以上その場にいることが、耐えられなかった。

エレベーターまでの道のりでは、まだカラオケ大会が行われていた。やはり、誰も歌を聞いて

るものはいなかった。

その日の夜はかつての僕の部屋に加奈子と寝ることになった。

翌日の予定を軽く決めると、僕たちはあまり言葉を交わすことなく布団に入った。

目を閉じると、頬がこけ、死んだ魚のような目をした父の顔が浮かんだ。衝撃的だった。僕が五年前、最後に見た父の姿とはあまりにも違った。

それに、父がこれまで暮らしてきた環境を見るのも初めてだった。あの場に流れていた空気は、幸福とは対極にあるもののように感じた。しかしそれを単純に不幸だとは形容し難く、ただ、空虚な世界が永遠に広がっているようだった。そこにいた人々の目は皆灰色がかっていて、将来やその先に微塵の希望も抱いていないように見えた。

僕はその感覚は、父の言葉で明確にされた。「生きていても、仕様がなない」。そう平然と、ただ事実を述べるように言う父親を思い出すと、虚しくなった。

僕が父のその姿に対してこれほどまでに戸惑いを隠せないのは、彼の過去の日記を見たことが大きかった。人とうまく交わることができず、病気を患った幼き頃の父。そんな父があれほどまでにひたむきに、純粹に求めた「理想」と、父の「現在」は、あまりにも隔たりがある。人は誰も夢を抱き、壁にぶつかり現実を知り、また違う理想への道を模索していくものである。しかし父のそれは、あまりにも残酷すぎる結末であるような気がした。現在の父の姿を幼い頃の彼が見たら、どう思うのだろう。僕はその父の哀れな現在に関わっていることを自覚しながらも、会っ

たことのない、これからも会うこともない少年に、同情した。

「起きてる？」

加奈子が目を覚ました。そもそも眠っていないなかったのかもしれない。

「うん、なんだか、眠れなくてね」

「私もね、何だか耕平のお父さんのこと考えると……」

加奈子は一瞬言葉を詰まらせたが、続けて言った。

「耕平、明日帰っちゃうの？お父さん、このままだと辛い思いしたまま……」

「僕も、かわいそうだと思うよ。あんなに将来に希望を抱いていた子の現実が、これだもんな。そりゃ誰だって思うさ。でも、これもあの人招いた結果だと思う」

僕がそう言っても、加奈子はいつもと違っ何も言い返してこなかった。何も言えない、という風にも見えた。

「何も僕らだって、理由なくあの人を避けてきたわけじゃない。それに何度も謝る機会は持てたはずさ。それでも、彼は何もアクションを起こさなかった。つまり、あれだけ僕に言われても変わろうと思えなかったんだよ。そんな人に、いくら可哀想だからって、僕から歩み寄れないよ」

加奈子はやはり、何も言い返してこなかった。沈黙は続いて、やがて僕らは互いに眠りについた。

起床し朝食を済ませ、少しゆっくりした後、僕らは荷物をまとめ帰る支度を整えていた。

「あら、もう帰るの？もう少しゆっくりしていけばいいのに」

よっぽど加奈子のが気に入ったのだろう。母は本当に寂しそうだっ

「少しこの辺をドライブしようかと思ったけど、天気が悪くなるみたいだし、バイト先からもしつこく電話がかかってきてね。テスト期間だいぶ休んだから、あんまり贅沢言えなくて」

僕はそれらしい嘘をついた。本当は、早く父のことを忘れたいだけだった。早く日常に戻って、父のことを考える余裕を作りたくなかった。

母は、なら仕方ないわねと言いつつ、それでもまだ悲しそうだった。しかしそれは僕たちと一緒に過ごせなくなるからではないようだった。

「耕平、やっぱりお父さんのこと、許してあげられない？」

僕は母の顔を見ないで、答えた。

「うん、ごめんね。でも、良くなるといいね。一度会えてよかったよ」

僕の返事を聞いて、加奈子は悲し気な表情をしていた。

荷物もまとめ終わり、玄関で靴を履こうとした時だった。

「耕平、ちょっと待って。最後だから、頼みがあるの」

母の声色は、明らかにいつもとは違った。母に言われるまま一分程待つと、母が一冊のノートを持ってきた。

「これの、付箋が付いてるところ、読んでほしいの」

「なに、これ」

「お父さんの日記。実はお父さん結婚してからも、去年までずっと、毎日日記を書き続けていたの」

「どうして、これを？」

「いいから、読んでみなさい。最後の、お願いだから」

母の目はいつになく真剣だった。

「加奈子ちゃんも、読んであげて」

母は困ったようにしている加奈子に言った。加奈子が返事をして、僕のほうに近寄る。僕は、ノートを開いた。

「六月六日 くもり 今日は一時退院の三日目だった。弘樹と洋子は外出していて、耕平と二人で家に居た。テレビにアジサイが映り、病院の本で見たアジサイの花言葉が頭に浮かんだ。本当は息子との話題が見つからず、きっかけを作ろうと思っただけだった。しかし耕平の味気ない返事を聞いて、思わず普段感していることを言ってしまった。失言だった。寂しいのは事実だった。それでも、自分にはこんなことを言う資格がないのは重々わかってはいるはずだった。当然、息子は怒った。もっともな指摘をされ、自分は同じ過ちを繰り返した。自分の無力さに不甲斐なさに、毎日苦しんできた。死にたくなる日もあった。それを改めて息子に言葉にして突きつけられ、自分は逃げ出したくなったのだ。だから、親として絶対に言ってはならない言葉を並べ、自分の尊

敵を守ろうとした。後悔している。今すぐ地に頭をつけて謝りたい。ただ、仮に彼が許してくれたとしても、自分は父親として彼に何もしてやることができないことに、変わりはない。そもそも存在意義のない父親には謝る資格すらない。自分にできることは、遠くから彼らの幸福を、ただ祈り続けることだけなのかもしれない」

僕は言葉が出なかった。父は既にあの時、十分に悩み、考え、苦しんでいた。自分を行き過ぎるほどに追い込んでいた。一方で当時の僕は、自分の苦しみでいっぱいになり、思慮の足りていない言葉を父に無慈悲に浴びせた。僕が父に放ったそれは、彼のあまりに重い苦しみを何倍にも助長させるには十分だった。

僕は思わず、他の日記にも目を通した。

「十月二十日 雨 今日はやけに寒い日だった。ついに秋がやってくるようだ。みんな薄着で寝ていないだろうか。特に耕平は小さい頃、この季節になると毎年決まって風邪を引いていた。飯をたくさん食べて、なるべく風呂に浸かって寝て欲しい。無力な父は、こうして願うことしかできない」

「三月一日 晴れ 今日は耕平の高校の卒業式だったらしい。耕平は随分成長した。心も体も、立派になった。その息子の成長にこれっぽちも関わっていないのがもどかしいが、嬉しいものは、嬉しい。いよいよ大学生か。洋子は、お金の工面、大変そうだった。耕平も奨学金をたくさん借りさせることになって、本当に申し訳ない。息子の新生活での幸せを、ただ祈ることしかできない」

「四月二十四日 くもり 耕平が一人暮らしを始めて約一ヶ月経った。洗濯はできてきているのだから。料理はできているのか。耕平は昔から不器用なところがあった。僕に似たらしい。そういえばあいつは、自分が作るチャーハンだけは洋子のよりもうまいと言ってくれた。本当はコツを教えてやりたい。来年成人したら、酒の飲み方も教えてやりたい。叶わないこと、なんだろうが……。今日も、家族の、息子の幸せを祈る」

「どう？読んでみて」

いつのまにか椅子に腰かけていた母が僕に聞いた。僕と加奈子は毎日綴られている日記を、長い時間かけて読んでいた。その内容は日々違えど、どの日記にも家族への愛と謝罪の言葉が綴られていた。元気が、風邪は引いてないか、辛くないか。家族だけが生きがいであり、彼のすべてであることを物語っていた。

「こんなに日記を書いていたなんて、知らなかったよ」

「そうでしょうね。でも、お父さんにとってはここで家族や息子への思いを書くことだけが、自分に家族がいることを実感するための方法だったのかもしれない。でもね、」

そう言って母は別のノートを持ってきて、あるページを開いた。

「お父さんは、日記を書くことをやめたの」

「どうして？」

「それを、読んでみなさい」

「三月二日 晴れ 今日が耕平の二十歳の誕生日だった。寝つきが悪く、親をよく困らせた赤ん坊が、本当に立派に育った。おめでとう、耕平。父さんは、嬉しいよ。」

今日一日改めて考えてみて、自分は耕平の二十年間の成長に少しも関わっていないことに気がついた。何より自分は彼を息子だと思っても、彼は自分をそう思っていないだろう。当然だ。自分は彼に、何もしてやれていないどころか、辛い思いばかりさせてきた。そこで思った。自分は、彼の父親だと思ふ資格すら持つべきではない。こうやって、家族のことを、息子のことをわが物のように書き連ねることも、すべきではないと。先生に言うと考え過ぎだとか、消極的過ぎるなどと言われた。症状が出てると思われたかもしれない。でも、決してそうじゃない。辛い思いをしながら必死にここまで育てた妻や、色々な葛藤に負けず立派に育った息子に対し、申し訳ない気持ちになる。それに、ここに家族のことを書くと、どうしても彼らに、たまらなく会いたくなる。話をしたくなる。もう一度一緒に暮らせると、未だにそんな希望を抱いてしまう。

家族以外の事を書けばと言われた。だが僕に、家族以外に、書くことなどない。僕にとって、家族の毎日が幸せになるよう願うことだけが、そんなことに思いを馳せながら日記を書くことだけが、生きがいであった。

家族が、僕のすべてだった。

しかし自分が家族の幸福を願ひ日記を書くことは、きっと自分の不甲斐なさから目を背ける為の、自己満足にしかなくていかなかったのだ。己の無力さに苦しみ続けることだけが、自分にでき

る唯一の贖罪なのかもしれない。

最後に一度だけ許してください。どうか風邪を引かずご飯はしっかりと食べ、良いお嫁さんをお願い、幸せになってください」

僕は思わず、天を仰いだ。隣にいる加奈子は泣いていた。確かに僕は、縁を切ることを決めた。父と関わっていきたくない、そう思ったからだ。しかし僕のこの決断がここまで彼を苦しませていたとは思わなかった。何より、父は十分に自分の不甲斐なさを悔いて、苦しんでいた。幼い頃から求め続けてきたものを失ってでも、自分の不甲斐なさを悔い、また家族の幸せを想っていた。

「生きていても仕様ががない」という、病院での父の一言が思い浮かんだ。

僕は母に一度頭を整理したいと言って、やはりその日のうちに帰った。あのままの状態で父と再会しても、きっとまた何も話せず終わってしまう気がしたからだ。

その後のGWはバイトをしたり友人と遊んで過ごした。加奈子にも会った。講義が始まって、以前と何ら変わらない生活を送った。

ただ一つ、明らかに変わったことがあった。毎日の些細な事に「父」を感じるが多くなった。幼い頃父によく言われたことや、怒られたことは身体に染みついている、無意識に僕の行動を形成していた。行動だけではなく、身体も性格も、ふと似てると感じるが多くなった。

不思議な感覚だった。こんなにも「父」の存在を実感するのは久しぶりだった。幼い頃、父に抱いていた気持ちを思い出した。

僕はこの気持ちを、父と会うきっかけをくれた加奈子に今すぐ伝えたかった。部屋に戻ると、加奈子が笑顔で迎えてくれた。

「おかえり！なーに、話したいことって」

「あの人のことなんだ」

「お父さんのこと……？」

「うん。実家で日記を読んで、病院で彼を見て僕は正直頭が混乱したよ。これまで縁を切りたいと思っていた人が、あんなにも自分の病気と葛藤していて、苦しんでいた。今まで僕が憎んでいた彼とはまるで違っていて、戸惑った。だから、しばらくはこれまでと変わらない生活をして、落ち着いてから考えようと思ってたんだ。でも、」

加奈子はじっと僕の目を見つめていた。僕の言葉を、一言も聞き漏らさないようにしようという意志が、はっきりと伝わった。

「どうしても、毎日の生活の中にあの人の存在を感じてしまうんだ。自転車のブレーキをかけるときは必ず左からかけてしまうし、金持ちの有名球団はあんまり好きになれないし、目玉焼きは醤油じゃないと許せない」

加奈子は笑って聞いている。

「それに背筋が曲がってるのも、足がめっちゃめっちゃ小さいのも、眉毛が変な形してるのだからってそっくりだ」

「うんうん」

「その癖、あの不必要なほど綺麗な二重は受け継げなかった」

「耕平、きれいな一重だもんね」

「一番重要なところなのになさ……。」

「おかしいよね」

「僕も思わず笑ってしまう。」

「生活していて気づいたんだ。僕の仕草や、身体や考え方は、嫌でもあの人の影響を受けて、形成されてるってことに」

「うん」

「僕は、そんな自分が、嫌いじゃない」

「うん」

笑っていた加奈子の目には光るものが見えた。

「僕は、やっぱり、あの人の息子なんだって、実感したんだ。だから、」

気が付くと僕も泣いていた。無意識だった。

「もう一度、幼い頃の夢を叶えさせてやりたい。家族の愛情を十分に感じながら、旅立ってもらいたい」

「あんなに、嫌っていたのに？」

加奈子が意地悪そうに言う。

「やっと気付いたんだ。確かに普通の父親のようなことはあまりしてもらった記憶はないし、不器用で弱気で、これっぽちもかっこいいところなんてないんだけど、仕方ないよ」

僕は涙を必死に拭って、言った。

「あんな人でも父親だから。僕のたった一人の、父親だから」

土曜日だったが、バスの中は比較的空いていた。GWが明けてまだあまり日が経っていないからだろう。母に電話で父の見舞に行くと言うと、驚いていたが少し嬉しそうだった。加奈子が来たら更に喜んでくれていただろうが、彼女は僕一人で行くべきだと言って送り出してくれた。

父に会ったら何を話そう。きっと、僕がいきなりやって来ても、戸惑うだろう。この前みたいに、僕だと認識することすらできないかもしれない。それでも僕だとわかってくれるまで、何度でも話しかけよう。唐揚げを作れるようになったことを話そうか。それとも来月時給が上がることを話そうか。身長が未だに伸び続けていることを言ったら驚くだろうな。そういえば呼び方はどうしよう。やっぱり親父だろうか、それとも父さんだろうか。いや、そんなことはどうでもいい。

親子の失われた時間はあまりにも長過ぎた。父に残された時間は、もうあまり長くないのかも

しれないが、ずいぶんと空いた僕らの隙間を、互いに不器用な僕たちなりに、二人で埋めていこう。

発進したバスの窓からは、きれいに咲き誇る色とりどりのアジサイが見えた。そうか、もうそんな季節か。僕はふと気づく。

雨が過ぎ去れば、次は夏の季節がやってくる。長袖ではもう暑い。僕は羽織っていた、上着を脱いだ。

(法学部法学科三年)

若狭と鉄炮

野良犬

天文十二（一五四三）年八月二十五日、南国種子島にある、西ノ村という半農半漁の小さな村のできごと。

朝から海辺へ出てきた村人が、磯に漂着している戎克船（ジャンク船）を発見した。船は大型で、村人が漁に出る際に使うものとは比べ物にならない規模である。

しばらく様子を窺っていると、船からわらわらと人間が上陸してきた。皆が皆、見たこともない奇怪な服装をしており、中には髪の色や目鼻立ちが全く日本人離れた異人の姿もあった。

遭難者の一人が訳の分からない言語を喋りながら近づいてきたので、身の危険を感じた村人は逃げ出した。

「なに、異人船とな」

異人船来着の報を受けた領主、種子島時堯は顔色を変えた。

「はっ。なんでも、南蛮人の商船だという話だそうで」

側近の篠川小四郎が報告を続ける。南蛮人の商船、という情報は西ノ村の地頭、西村織部丞から得たものである。

異人に行くわして驚いた村人は、武士であり学のある織部丞なら通訳ができるかもと引っ張って行ったらしい。織部丞は学があるといっても漢文が多少できる程度だったが、乗船者の中に五峯という中国人がいたのが幸いした。

織部丞と五峯は杖で砂浜に字を書いて筆談し、船に乗っている異人は南蛮の商人であること、船は西昆那（アユタヤ）から双嶼（中国の貿易港）に向かっていたものであることなどが判明したのだ。

「南蛮の商人、か」

時堯がアゴをさすりながらつぶやく。種子島氏は豊かな土地を有しているわけではなく、薩摩の島津氏から庇護を得て島を保っている小領主である。

しかし種子島は琉球貿易の中継地として利用されており、貿易は種子島氏の貴重な財源であった。その領主である時堯は、貿易がもたらす富と情報の重要性をよく知っていた。

南蛮に関しては唐土よりもさらに遠くにある国ということしか知らなかったが、その商人とコネを作り、貿易を開始するのは悪くないことだと考えた。

「小四郎、その南蛮商人と会いたい」

「はっ」

時堯の要望に、小四郎がうなづく。

「うむ……」

「……」

しばしの沈黙。やがて何かを察した小四郎が口を開く。

「あの、御館様」

「なんじゃ」

「会いたいの言われましても、今すぐは無理ですよ。船は座礁し、乗っていた者の中には衰弱している者もあり、西ノ村で手当てを受けているとか」

「むっ」

時堯は種子島氏の当主だが、まだ家督を継いだばかりの弱冠十六歳という若殿である。思い立ったことをすぐ実行に移せる行動力はあるが、慎重さに欠ける思慮が浅い部分もあった。

小四郎に今すぐの面会はできないと諭された時堯は、またアゴをさすって少し悩んだあと、家中の者もできる限り救助に協力するように、とだけ命じた。

数日後、種子島家の協力もあり、船は浅瀬からの脱出に成功する。船は島で一番大きい港、赤尾木の港に廻航された。赤尾木は種子島氏の居城、赤尾木城が鎮座する島の中心地である。

そしていよいよ、時堯たっての希望で南蛮商人との面会が行われた。赤尾木城に連れて来られたのは、五峯と南蛮人がふたり、計三名であった。通訳に関しては、城下に住む住乗院なる僧侶が漢文に詳しいということ、そちらに頼むこととなった。

時堯は板の間に通された南蛮人たちをまじまじと観察した。ふたりとも幅広の帽子を被り、や

たら大きな襟が付いたごてごてしい服を着ている。そして背中には、金属でできた棒のようなモノを背負っていた。

やがて筆を介して会談が始まった。南蛮人は名前を「牟良叔舎（ふらんしすこ）」「喜立志多佗孟太（きりしただもった）」といい、南蛮の「葡萄牙（ぼるとがる）」なる国から商売をしに来たのだという。

種子島との貿易に関しては、取引先が増えるのは南蛮人側も願ったり叶ったりのように、トン拍子に話が進んだ。結論として年一回、種子島に葡萄牙からの商船が立ち寄るといふ話にとまった。

時堯は望みどおりに商談が運んで喜色満面な様子。ご機嫌ついでに、時堯は南蛮人の服装について訊ねた。

「ときにおぬしらは奇怪な格好をしているが、その背中に背負った鉄の棒は何じゃ？ どのような意味合いを持って、鉄の棒を背負っておるのじゃ」

この言葉を住乗院が伝えたところ、五峯は目を見開いて驚いたような顔をした。さらに、本当に知らないのか、とそのまま問い返してきたのである。

時堯が首を横に振ると、五峯はニヤリと笑った。五峯はしばらく待ってくれ、と住乗院に伝え、南蛮人たちと何やらヒソヒソ相談し始めた。

「……なんぞ内証話をしておるのか」

やや不機嫌になった時堯が問うものの、南蛮の言葉で話しているため、住乗院にはどうしよう

もない。幾ばくもないうちに内証話は終わり、五峯は広い場所と、何かマトになる物はないかと聞いてきた。

「的？ 弓術用の大的ならあるじゃろう」

何のために、と時堯が問うたが、五峯はとにかく見ていて欲しいと答えるだけであった。

五峯たちに従い、城の中庭に弓術で使う的が引き出されてきた。例の鉄棒を持った南蛮人が、そこから十五間（約三十メートル）ほど離れたところに立つ。

「あの棒から矢でも飛び出るってんですかね」

場所の設営に駆り出された小四郎が、やや不機嫌そうにぼやく。だが小四郎とは対照的に、時堯は熱のこもった視線を南蛮人へ向けていた。今から何が起ころのだろうという好奇心もあるが、熱視線の理由はそれだけではない。

わざわざ的を用意させるということは、あの棒は弓矢のような遠距離武器なのだろう、そこまでは時堯にも容易に想像できたが、具体的にどんな攻撃方法なのかは皆目見当がつかない。小四郎は矢でも出るのかと冗談めかして言ったが、それにしては筒が細すぎる。またじっくり観察すると、棒の持ち手のような部分から細煙が出ていることに気が付いた。

南蛮人が鉄棒におもむろに何かを押し込み始めた。さらに細い棒を使い、筒の奥へと詰め込んでいく。それも終わると、いよいよ鉄棒を的に向けて構えた。

「お、やっとはじま——」

小四郎の声は、目前に雷が落ちたかのような轟音にかき消された。

鉄の棒の先から、煙と共に閃光が迸った。同時に的が吹っ飛ばされ、バラバラの破片と化する。城中に響き渡った轟音により、木々からは一斉に鳥が飛び立ち、近くにいた馬は棹立ちになってどうと倒れた。

種子島家の人間たちは、皆一様に腰を抜かしていた。時堯も例外ではない。むしろ何が起きるのを見極めようと集中していたため、余計に魂消る思いをするはめになった。

「い、今のは……」

頭を手で押さえ、ひどい耳鳴りに耐えながら小四郎が呟く。呆然とした様子だが、当然と言えば当然である。種子島家の人々には、南蛮人があの鉄棒を使って稲妻を生み出し、的を破壊する妖術使いであるように思えた。

得意げな表情をして、五峯と南蛮人たちが時堯の方へ向き直る。家臣の何人が「ひっ」と情けない声を漏らす。時堯は己を奮い立たせ、震える膝を抑えながら立ち上がった。

「その、武器について、詳しく教えて、欲しい」

声を詰まらせながら、時堯が訊ねる。しかし異人たちには通じていないようで、しきりに首をひねるばかり。ふと足元を見ると、住乗院が耳を塞いで地面に臥せていた。よほど恐ろしかったのか、ナンミョーホーレンゲキョーと題目を唱えている。

通訳は使い物にならなくなったが、漢字ならば自分でも読める。そう思い立った時堯は、鉄棒を指さしたあと、地面に足で「名」と書いた。合点がいったのか、五峯が杖を使って地面に文字を記していく。

五峯の杖の動きが止まる。そこにはこう書かれていた。

「鉄炮」——。日本の戦国時代に革新をもたらす新兵器が伝来した瞬間であった。

「なに、異人船ン？」

異人船来着の噂を聞いた種子島の刀鍛冶、八板金兵衛は顔色を変えた。

「ええ、なんでも珍しい南蛮人の商船だとか」

朝餉の菜っ葉のおひたしをつまみながら、娘の若狭が続ける。金兵衛には二人の家族がいた。十六歳の娘若狭と、八歳の息子賀太郎である。

異人船の話は、数日も経たないうちに島中へ伝播した。金兵衛たちが住む職人街、黒山尻でも噂はすっかり広まっていた。

「あと、稲妻を自在に操る恐ろしい妖術使いが乗ってるって噂だよ」

「へえ、そりゃ恐ろしいね」

微塵も恐ろしくなさげに金兵衛が言う。彼にとってそんなことは重要ではない。

「こりゃしばらく忙しくなるな。砂鉄が高くなる前に仕入れとかねえと」

そうぼやいてから、金兵衛は玄米をかき込んだ。

「そんなおっかない人が来るの？」

賀太郎が、口から米粒を飛ばしながら聞いた。若狭が「食べながら喋らない」と軽く注意しながら口の周りを拭いてやった。

「そうだな。お前らを攫って食っちまうかもな。ガオーッ」

金兵衛が軽く脅かしたところ、みるみるうちに賀太郎の顔が曇り、わっと泣き出してしまった。「父ちゃん！」

すかさず若狭から怒声が飛ぶ。

「あー、父ちゃんが悪かったよ。大丈夫、父ちゃんの打った刀の方が強いさ」

種子島は良質な砂鉄の産地であった。そのため鍛冶屋が多く集まり、当時の黒山尻には約六十もの鍛冶屋が軒を連ねていたという。中でも刀鍛冶の本場、濃州は関の出身である金兵衛は腕が良いと評判で、今や島一番の刀鍛冶と呼ばれていた。

特産の刃物が売れるのは日本の内だけではない、琉球貿易での主要な輸出品であった。金兵衛が異人船の話聞いて張り切りだしたのは、絶好の商売時であるが故だ。

「でも父ちゃん、稲妻を操る南蛮人に刀なんて売れるかね。売れなかったらどうするの」

空いた膳を片付けつつ、若狭が疑問を呈した。相手の素性が分からないのに商品を大量に作るの、それだけの在庫を抱えてしまう危険がある。刀など、手入れが必須な繊細な刃物は、在庫として残しておくのは難しいのだ。

「安心しろ、八板金兵衛尉清定の刃物とくれば、九州からもわざわざ買い付けがあんだよ。万が一、それが異人相手に通じなければ、俺あ鎚を捨てるね」

金兵衛は南蛮人相手に商売をしたことはなかったが、自身の打つ刀や鋏には自信があった。相手が南蛮人であろうと自分の刃物は売れる、と信じていた。

「今に見てな、南蛮商人がウチの戸板を叩いて、アンタの刀を売ってくれ、って頼みに来るようになるからな」

するとどうだろう、自信満々で言い放った金兵衛の言葉に応えるように、八板家の戸を叩く者がある。

「八板金兵衛殿、金兵衛殿はおられるか。貴殿に仕事を頼みたい」

金兵衛は「そらきた」と小声で漏らすと、若狭の方を見てにんまり笑った。それを無視して若狭が戸を開ける。

そこに立っていたのは、噂の南蛮商人、であるはずもなく、上品そうな武家の男だった。供を一人連れていることから、種子島家の侍の中でもそここの地位にある者だろう。

「はい、父ならおりますが……えっと」

金兵衛は仕事柄、武家からの依頼を受けることも多かったが、依頼本人がわざわざ出向いてくることはまれであった。若狭が対応に苦慮していると、奥から金兵衛が顔を出した。予想に反してお供連れの武士がいたのでぎょっとした様子である。

「わ、私が八板金兵衛でございます」

たどたどしい敬語で金兵衛が答えると、侍が一礼して言った。

「某は種子島家家臣、篠川小四郎と申します。金兵衛殿にとあることを依頼したく、えっと、詳しい話をしたいので上がってもよろしいか」

小四郎にそう問われ、こくこくと頷く金兵衛。若狭はお膳と賀太郎をまとめて奥の間へ突っ込

み、どこからか座布団を引っ張り出してきた。

「早速ですが」

座布団に座るなり、小四郎が話を切り出した。後ろに控えているお供から何やら細長い包みを受け取る。仕事の前金としてゴボウでもくれるのか、と金兵衛は考えた。

「金兵衛殿には、これの複製をお願いしたい。御館様の御意向でもあるので、是非とも請けてもらいたい。無論、タダでは申しません。種子島家ができうる限りの褒美を取らせましょう」

小四郎が包みを開くと、中から何やら細長いモノが出てきた。大部分は金属でできているようで、当然ゴボウではない。

「こりゃあ、何ですか」

それを手に取りながら金兵衛が訊ねる。長さは三尺（約一メートル）ほど、ずっしりとした重みがあり、鉄製品独特のひんやりとした感触があった。

「鉄炮、というらしい」

「はあ、てっぽう」

「先日異人船が西ノ村に漂着したことはご存知ですか」

「へえ、私も今しがた聞いたところで」

「その船に乗っていた南蛮人が持っていた武器なのです。御館様が試射をご覧になり、威力に驚かれましたな」

「ほおー、これの、ねえ」

金兵衛は鉄炮をあちこち弄りながら、どこか不満げに漏らす。刀鍛冶としては、得体の知れない鉄の筒が強いと言われても、いまひとつピンと来ないものである。

「御館様は鉄炮を一挺千両で買い取られました」

金兵衛は鉄炮を取り落としそうになった。

千両という金は、現在の価値換算だと数億円にも上る大金であった。種子島家も貿易をしているとはいえ、特段裕福なわけではない。むしろ最近では、屋久島の領有権をめぐる瀬寝氏との抗争が激化しており、それに伴う戦費の増加で懐事情は厳しくなりつつあった。

種子島家がそのような状況下に置かれる中、時堯が鉄炮という未知の武器に大金を支払ったのは大変な冒険であった。

「せ、せ、千両？」

金兵衛は改めて鉄炮を観察したが、所々意匠が施されてはいるものの使い古しな上、鉄もそれほど良い質ではなく、とても千両の価値があるとは思えない。千両の価値がある武器とはどれほどの威力なのか、金兵衛は眩暈を覚えた。

「はい。二挺買ったので、しめて二千両」

大真面目な顔をして小四郎が付け加えた。どうやら嘘を言っているわけではないらしい。

「まったくいつもいつも御館様はその場の勢いで無茶を仰る……」

今度は仏頂面をして小四郎が呟いた。放っておくと小四郎は延々愚痴を言い続けそうな口ぶりである。金兵衛は話題を本筋の仕事に戻すことにした。

「複製っても、どんな武器なのか仕組みを教えてくださいねえとどうしようもねえですが」

「南蛮人から聞いた話では、そこまで難しい仕組みではないらしいです」

小四郎は鉄炮について、南蛮人から聞きうる限り聞いた情報を伝えた。

鉄炮は、端的に説明すると火薬の爆発力で鉛の玉を飛ばす武器である。まず筒の中に火薬と鉛玉を詰め、着火装置を使って火縄に種火を点ける。引き金を引くと種火が火皿へ押し付けられ、筒の中の火薬に引火、弾丸を発射、という流れである。

「そこまで難しい仕組みではない、とは？」

一通り説明を聞いてから、金兵衛は目が点になった。火薬で鉛玉を飛ばすなど、聞けば聞くほど刀鍛冶の自分とは縁遠い話に思える。強いて接点を挙げるならば、部品に鉄を使うというだけである。

「私にゃあ鋼を鍛えることはできても、火薬を扱うなんぞ土台無理ってモンです」

金兵衛の抗議に対し、小四郎は大丈夫ですと頭を振った。

「火薬の作成に関しては、御館様は某に研究を命じられましたので。金兵衛殿は『ガワ』だけ作っていただければ」

「ってえと、篠川様が火薬を作るんで？」

「左様」

「ちなみに火薬の知識なんかは」

「無い！」

やけくそ気味に小四郎が叫んだ。先ほどから小四郎の話聞くに、なるほど、時堯公はよほど破天荒なお人らしい。むしろ鉄を使うから刀鍛冶に依頼するという考えは、時堯公なりに気を遣っているのかもしれない、と金兵衛は思った。

「しかし鉄炮は今までにない強力な武器です。独自に製造できるようになれば、戦場での優位は間違いありません」

百聞は一見に如かず、明日にでも試射をさせましょう、と小四郎は告げた。

翌日、例の南蛮人による鉄炮の実演が、人里離れた野原で行われた。わざわざそんな場所で行われたのは、無関係な人間を驚かせないための配慮である。

これを見学した金兵衛は、先日の時堯以下と同様に度肝を抜かれることとなった。鉄炮は一発撃つごとに三十秒ほどの装填時間にかかるものの、射程は弓矢と比べ遜色なく、威力に関しては遙かに凌駕していた。

当時の火縄銃の威力は、現代の銃と比肩しても馬鹿にはできない。弾丸の初速は毎秒約四百八十メートルと現代銃のそれ（拳銃で毎秒百五十メートル）よりも速く、弾の直径は一般的な二匁半玉で約十二ミリメートルもある。現代銃より大きく重い弾がかなりの速度で飛んでくるのであり、当然それなりの破壊力が発生する。

さらに弾丸は鉛を丸めただけのものである。鉛は金属としては柔らかい部類に入り、着弾時に変形するため、被害面積と衝撃は大きくなる。火縄銃は遠距離での命中率こそ現代銃に劣るが、

百メートル以内の銃撃では、散弾銃のスラッグ弾並みの威力を持ちえたのである。言うには及ばず、当時の鎧は易々と貫通したのであろう。

金兵衛は震えた。鎧の防御など歯牙にもかけない鉄炮の威力、弾薬を詰めて引き金を引くだけの簡単な操作性、そして射撃時の轟音。どれも戦場の風景を一変させる可能性を秘めていた。

「どうじゃ、凄まじいじゃろう。鉄炮は種子島家の家宝じゃ」

いつの間にか見学に加わっていた時堯が、周囲へ無邪気に言いふらしている。小四郎曰く、時堯はすっかり鉄炮に魅了されているのだという。

「篠川様」

しばらく黙っていた金兵衛が、改まって言った。

「鉄炮の件、謹んでお請け致します」

小四郎は寸の間驚いた顔をしたが、すぐ満面の笑みに変わった。そして金兵衛の手を取り、礼を述べた。

「いやありがたい。種子島には金兵衛殿以上の鍛冶はおりませぬから」

普段の金兵衛なら、この言葉に気をよくして軽口の一つや二つ叩いているところであろう。しかし今の金兵衛は違った。鉄炮という新兵器の衝撃は、金兵衛の心に火を点けていた。

「では、早速私は仕事に取り掛かりますゆえ」

挨拶もそこそこに立ち去ろうとする金兵衛。頭の中には、鉄炮のことがいっぱい詰まっていた。小四郎が何か声を掛けたが、金兵衛の耳には入らなかった。

金兵衛は帰宅してすぐ作業に取り掛かった。鉄炮は一挺千両もするシロモノなので分解はできなかったが、金兵衛はその外観を穴が開くほど観察した。初めこそ未知の技術に戸惑いはしたが、小四郎の説明通り、理屈が分かってしまえばそう難しいものではなかった。早速、金兵衛は炉に火を入れた。

「父ちゃん、こんな時間まで何やってるの」

工房に若狭が顔を出した。金兵衛は真っ赤に燃える炉から目を逸らさないまま聞き返す。

「どうした、なんかあったか」

「どうしたもこうしたも、もう夜四つよ」

そう言われて金兵衛が顔を上げると、既に辺りは真っ暗闇になっていた。夢中になって作業していたので、日が暮れたのにも気が付かなかったのだ。

「ああ、もうこんな刻限か。済まねえな、もう少しやったらキリのいいトコで終わらせるから。」

賀太郎は寝たか」

「もう寝かした。父ちゃんの分の夕餉は冷めちゃったよ」

若狭が口を尖らせて言った。そして訝しげに金兵衛の手元を覗き込む。

「それ、例の鉄炮？」

「おうよ」

「刀鍛冶の父ちゃんがそこまで入れ込むなんてね」

鎚が鋼を叩く甲高い音が響く。やがて金兵衛は危ないから出ていけ、と若狭を促した。

昼間、試射を見学してから、金兵衛は鉄炮に憑り付かれていた。

金兵衛は刀鍛冶として優秀な腕前ではあったが、長船や村正など古の大業物のように歴史に名を残すほどではなかった。金兵衛はそのような歴史上の刀匠に憧れこそすれ、自身の力量ではそれが不可能なのは分かっていた。それなりの技術があるからこそ自覚できる限界があった。

（俺はこの島で、刀や鉄を作り続けて一生を終えるものだと思っていた）

金兵衛一家が種子島へ移住して以来、妻が病で死別したことを除き、島の鍛冶屋としては万事順調に進んでいた。己の刃物が売れ、立派な工房と幾人かの弟子を抱えるようになった。

そこへ南蛮人が鉄炮を抱えて島に飛び込んできた。金兵衛にとって、人生最大にして、おそらく最初で最後の機会であった。刀や鉄しか打ってこなかった己の鎗が、国を動かすほどの兵器を生み出すようになるのだ。

過去の刀匠が誰も成しえなかった領域に踏み込んでいるのを、金兵衛は自覚していた。

数日間、金兵衛は狂ったように鎗を振るい続けた。金兵衛の腕前を以てすれば、鉄炮の形を模倣するのは造作もないことであった。国産鉄炮の試作品、その第一号が完成したのである。

金兵衛は試作品を抱え、小四郎の屋敷へ足を運んだ。黒山尻から城下の武家屋敷まではそう遠くない。

「やりましたな、金兵衛殿」

出迎えた小四郎は実に嬉しそうであった。

「火薬の方も何とかかなりそうです」

曰く、種子島に立ち寄っていた堺の商人が火薬を取り扱ってくれるそうだ。

瀬戸内海の水軍は、炮烙火矢という火薬兵器を用いて戦う。彼らとの取引のため、堺の商人は火薬を仕入れていたのだ。種子島が貿易中継地であることが、思わぬところで利益をもたらした。火薬は硫黄と硝石を混合したものであるが、従来の火薬兵器から混合の割合を変えれば、鉄炮の火薬にも応用できるといふ。

「火薬の取り扱いに関して、詳しい者を派遣してくれるそうです」

その代わり、と小四郎は付け加える。

「鉄炮完成の暁には、一挺譲り受けたい、と」

小四郎が少しだけ顔を曇らせる。一挺千両の価値を持つ鉄炮を譲る、というのは大きな損失であった。さらに堺で鉄炮が複製され、種子島家の軍事・経済での優位性が崩れる恐れもあった。

しかし鉄炮は火薬あってこそその兵器である。その調査を手伝うと言われれば、火薬について素人の小四郎は、提案を飲まざるを得なかった。

とりあえず鉄炮と火薬の用途は立った。

「いやはや、一時は金兵衛殿と揃って腹を切ることになるかと思いました」

物騒なことを小四郎が言う。だがもし鉄炮も火薬づくりも頓挫していれば、そのような事態もあり得ただろう。

「そんなことより、早う試し撃ちをやってみましょう」

金兵衛には雑談に興じる気はなく、小四郎の話を遮った。鉄炮の見た目だけ複製しても、弾が

撃てねば話にならない。きちんと鉄炮が機能するかどうか、一刻も早く確認したかった。

二人は篠川家の郎党と共に、先日試射を行った野原へ向かった。

「ウチの郎党に鉄炮の扱いを仕込みましてね」

道中、小四郎が語りかけた。

「島での世話代がわりとして、南蛮人と唐人に教えを請いまして。二、三日教わったところ一通り使えるようになりました」

小四郎はさらりと言ったが、二、三日の練習で一通り使える遠隔武器というのは大変な革新であった。当時の主な遠隔武器といえば弓矢だが、これをまともに使えるようになるまで、かなりの熟練を必要とする。初心者が数日練習したところで、矢を前方に飛ばせるかどうかだろう。

鉄炮は弾薬を詰め、後は引き金を引くだけでよい。そこまで力が必要ではなく、狙いを付けるのも常に弓を引き続けなければならない弓矢より簡単だった。足軽や百姓を集めて鉄炮を一通り教えれば、制圧射撃が可能な即席部隊の出来上がりである。同じ規模、制圧力の部隊を弓兵だけで組もうとすれば、どれだけの手間がかかるやら分かったものではない。そのような強力な軍隊を作れるようになるかどうか、金兵衛の腕に掛かっているのだ。

野原に到着し、そそくさと準備を始める面々。金兵衛が、試作品の鉄炮を篠川家の郎党に手渡す。金兵衛の試作品は南蛮人の鉄炮に比べ細かい意匠は省かれていたが、それ以外は完全に複製しているように見えた。

「……さすがの出来ですな」

小四郎が感嘆の声を漏らす。とても数日でこしらえた急造品とは思えぬ、と郎党が続いて褒めた。しかし、金兵衛は黙ったままである。

試作品を受け取った郎党が、火繩に着火し弾薬を詰め込む。まだ手慣れぬ様子であるが、特に問題もなく手順が進められる。目標は適当に、野原に一本生えていた松の木と決めた。郎党が鉄砲を構え、松の木に向ける。

あとは引き金を引くだけ、という段階になったことを確認してから、小四郎が短く命じた。

「撃てっ」

一瞬の煌めきとともに、爆発音が辺り一带に轟く。小四郎は思わず目を閉じた。鉄砲の試射には数回立ち会ったが、この光と音には未だに慣れていない。

反響する音が消えてから、小四郎は目を開けた。松の木には、傷一つ付いていなかった。

「うあッ」

郎党が悲鳴をあげて鉄砲を放り投げる。鉄砲は地面に落ちるなり、ぼろりとその形を崩した。発砲の衝撃に、銃身が耐えられなかったのだ。

試作品は失敗に終わった。

「まずい」

金兵衛たちが郎党に駆け寄る。しかし辛い、腕に軽い火傷を負っただけで済んだようだ。

「まあ、試作ですからな。仕方がない仕方がない」

小四郎たちはそう言って一笑に付したが、金兵衛にとっては大問題であった。失敗作を掴ませ

てしまった挙句、それが原因で負傷させてしまったのだ。特に火薬を使う鉄炮の暴発は、一步間違えば大事故に繋がる。悪い意味で金兵衛の名が歴史に刻まれるやもしれない。

金兵衛は小四郎たちに謝り倒したのち、すぐ工房へ取返して返した。暴発の原因は分かっていた。発砲の瞬間、銃底から部品が吹き飛んだのを見たのだ。

鉄炮の底部は尾栓といい、火薬の爆発をまともに受けるために最も強度が求められる部位である。金兵衛は尾栓に鋌を打ち込み、鎚で叩いて鋌の頭を潰すことで固定していた。しかし、それだけでは強度が足りなかったのである。

金兵衛と鉄炮の長い格闘が始まった。

ただ火薬の爆発に耐えうる構造に作りたいのならば、そもそも部品を分けず筒を袋小路に作ればいいが、尾栓は取り外し可能でなければならなかった。

鉄炮は長く使い続けていると、火薬の燃えカスが底に溜まってくる。これを放置しておくとも暴発の危険が高まるため、定期的に尾栓を外して掃除する必要がある。つまり爆発に耐える強靱さを持ちながら、必要な時に取り外せる機構が求められたのである。

金兵衛は寝食を忘れ、刀や鋌の仕事も投げ打って、ひたすら鉄炮の開発に没頭した。

一年後。

赤尾木の港に再び南蛮船が来航した。今回は遭難したのではなく、交易のための寄港である。時堯と南蛮商人の会談で決まった年一回の貿易船、その第一便であった。

「金兵衛殿、金兵衛殿」

そう呼びかけながら八板家の戸を叩いているのは小四郎である。今回の南蛮船に鑿鏡（マカオ）で鉄砲鍛冶をしている者が乗っており、それを伝えに来たのだ。

しばらくして、ゆっくりと戸が開いた。そこに立っていたのは娘の若狭である。部屋の中から賀太郎が覗いていたが、すぐ引っ込んでしまった。

「あ、篠川様、どうも」

若狭の口調は歯切れが悪く、表情もどこか沈んでいる。

「金兵衛殿はどちらに？」

「父は……」

若狭が家に隣接している工房へ目を向ける。察した小四郎は、次に工房の戸を叩いた。

「金兵衛殿、金兵衛殿」

返事は無い。しかし工房にいるのは確かなので、小四郎はお構いなしに戸を開けた。

金兵衛は、火の消えた炉の前で力なく座り込んでいた。かなりやつれており、頬は痩け眼の周りは落ち窪んでいる。

一年間に及ぶ鉄砲開発は、まったく蹉跎してしまっていた。

問題なのはやはり尾栓の部分である。もちろん、金兵衛は思いつく限り様々な手を尽くした。鋌の大きさや形を変えたり、はめ込み式にしたり、叩いて鍛接したり、思い余って糊や漆で固めたりもした。しかし全て上手くいかない。金兵衛がどう足掻こうと、銃底は強度が足りずに吹き

飛んでしまうのだ。

しばらく種子島に滞在していた五峯らに構造を訊ねたが、「自分たちは商人であって職人ではないので、内部の構造までは分からない」とにべもない返事が返ってくるのみであった。

鉄炮の分解も願い出たが、それも許可されなかった。時堯は買い上げた二挺の鉄炮のうち、一挺を宝物として島津家に献上しており、種子島家に残されたのは金兵衛が手本としている一挺だけである。貴重な一挺を分解しても必ず複製が成功する保証は無いので、時堯は分解を許す訳にはいかなかった。

こうして金兵衛の鉄炮開発は、完全な手詰まりに陥ってしまったのである。

金兵衛は身体を動かさず、目玉だけぎょろりと小四郎の方へ向けた。

「篠川様、どうしました」

微かに口が動き、くぐもった声が聞こえた。自信に溢れ、熱意に満ちていた島一番の刀鍛冶の面影は無い。

(これは、重症だな)

小四郎は定期的に金兵衛を訪っていたが、今日は一段と調子が悪そうに見えた。少しでも金兵衛を元気づけようと、赤尾木で仕入れた情報を披露する。

「南蛮船が赤尾木に来ました。しかもですね、鉄炮職人が一人乗っています」

一瞬、金兵衛の眼に光が差したように見えた。しかしそれもすぐ濁ってしまう。

「……だからどうしたってんです」

「そ、それは、鉄炮の製法を教えてくれるやもしれませんし」「一挺千両もする、鉄炮の製法を教える？ ばかばかしい！」
金兵衛はそう叫んで、地面を拳で殴った。慰めになればと思つてした話が、裏目に出てしまつたらしい。

「鉄炮職人が来たんなら、そいつに作らせたらどうです。私にイチから作らせるよっか早いでしょ。いったい何両取られるか分かつたモンじゃねえですが」

そう言われて小四郎は言葉に詰まつた。種子島家は決して裕福ではないのである。そもそも最初に払つた二千両で、種子島家は火の車であつた。南蛮人の鉄炮職人を雇うどころの話ではない。

答えに窮した小四郎に対し、堰を切つたように金兵衛の口から恨み言が飛び出す。

「俺あねえ、この一年間ずっと鉄炮に打ち込んできた、でも、マトモに一発撃てる鉄炮すら作れねえ。何が島一番の鍛冶屋だよ、結局お山の大将じゃあねえか。俺にゃあ一つ千両もする武器なんて作れっこねえんだ、刀と鉞を売って食いつなぐしかねえんだ」

金兵衛の心は完膚なきまでに叩き折られていた。己の鎚で国を変える武器を作るのだという思い上がりに。どれだけ試行錯誤しても正解にたどり着けないその構造に。そして、たかが一挺の鉄炮も作れない己の不甲斐無さに。火薬の調合が軌道に乗り、そもそも職人ではない小四郎には想像もつかない挫折であつた。

小四郎はどう声をかけてよいか分からず、金兵衛もそれ以上自嘲する気にはなれなかつた。二

人の間に静寂が流れる。やがて金兵衛がぼつりと言った。

「かくなる上は、責を負って腹を搔っ切るしか」

「いけませんっ」

問髪入れず小四郎が怒鳴る。

「金兵衛殿が腹を切っても、何も解決しないことが分からないのですか。金兵衛殿以上の鍛冶はこの島にはいないのですぞ、今貴方を失えば、それこそ今までの努力と御館様のご意向が全て水泡に帰すことになります。早まってはなりません」

小四郎は金兵衛の肩を掴んで、揺さぶりながらまくし立てた。その剣幕に庄されたか、金兵衛は手を顔の前でひらひらさせながら笑顔を取り繕う。

「冗談ですよ、じょーだん。嫁入り前の娘と幼い息子を遺して死ぬようなマネはしやせんて……」
小四郎には、その言葉が本心なのか否か測りかねた。今の金兵衛を放っておくと、衝動的に身投げでもするのではと気が気でなかった。

数日後、何の味も感じない朝餉を食べ終えてから、工房にも行かず金兵衛は物思いに耽っていた。鉄炮の改良案を練っているわけではない。とっくの昔に、金兵衛の発想は枯れ果ててしまっている。

では何を考えているのかといえは、小四郎がもたらした一つの情報についてである。南蛮人の鉄炮職人が来ている、と小四郎は言った。先日は頭に血が上って気にも留めなかったが、落ち着

いてから考え直すと、行き詰った現状を唯一打開する糸口ではないかと思えてきた。

しかし南蛮人がおいそれと鉄炮の技術を教えるだろうか。南蛮人はたった二挺の鉄炮に、二千両もの大金を吹っ掛けた。その鉄炮を作る技術となると、文字通り値千金、ということになるだろう。技術を教わるにしても、相応の見返りが必要になるのではないかと金兵衛は考えた。

(千両、か)

金兵衛は刀鍛冶として仕事には困らなかったのも、貧乏というわけではない。しかし所詮は一介の鍛冶屋に過ぎず、千両などという大金は持っているはずがなかった。では千両の代わりになるような家宝はあるかとも考えたが、これにも全く心当たりがない。用意できるのは刃物だけだが、何百振りの刀を打てば千両の価値になるのか、金兵衛には考えが及ばなかった。

「どうしようもねえ」

力なく金兵衛が呟く。もはや鎚を握る気力すら、金兵衛には残っていないかった。

「なにか、手助けできない？」

声を掛けたのは若狭であった。若狭はこの一年間、金兵衛が朝から晩まで工房にこもり、そして憔悴していく様を間近で見ている。これ以上、父親の消耗する姿に耐えられなかったのだ。

「お前に手助けできることなんて無えよ」

「南蛮の鉄炮職人が来てるらしいって聞いたけど」

金兵衛は少し驚いた顔をした。鉄炮職人の話題は、先日工房で小四郎としかしていないのだが。

「お前、どうしてそれを」

「工房で篠川様に怒鳴ってたの、丸聞こえだった」

金兵衛はそうか、とだけ答えた。あの話が若狭に聞こえていたところで、何かが変わるわけでもない。親として見苦しい一面を見せたかもしれないが、それも今さらである。

「鉄炮と釣り合う物があればいいんでしょう」

「ああ」

気の抜けた返事をする金兵衛に対し、若狭は両手で小袖の裾をぎゅっと握り、口元を固く結んで押し黙った。何かを逡巡しているかのようであった。

「父ちゃん」

何かを決意したように、若狭が口を開く。金兵衛はやや面倒に感じながらも、今度は何だ、と問い返した。

「鉄炮の代わりに、あたしを身売りして」

声を震わせながら、しかしはっきりと、若狭はそう言った。

瞬間、金兵衛の思考は停止した。鉄炮の試射を初めて見学したとき以上の衝撃が、金兵衛の脳髓を駆け巡った。

身売り。文字通り、人間を奴隷として売買することをいう。戦国の世では、捕虜や戦争難民が売り飛ばされることは珍しくない。種子島にも、そのように売り飛ばされ、下男や下女として働いている者はいる。

だが自分の家族、しかも相手は得体の知れない南蛮人ともなれば話は別である。そこまで考え

て金兵衛は我に返った。

「な、あ、莫迦を抜かすんじゃないかねえ！　そもそも、人買いに売ったところで安く買い叩かれるのがオチだ」

「でも、相手は船で長旅をしている連中ですよ。南蛮人に直接売り込めば、女は喜ばれるはず」
若狭の指摘は、残酷だが的を射ていた。だがそれは、彼女自身が慰み者にされる可能性を示唆している。十七歳の娘にそこまでの覚悟をさせたのか、と金兵衛は口惜しく思った。

「とにかく、お前を売るなんてしないからな。俺が鉄炮を作れないばかりに娘を売ったなんて、死んだ母ちゃんに顔向けできねえ」

金兵衛はそう突っぱねたが、若狭も引き下がらない。

「じゃあ身売りじゃなくて、南蛮人に嫁ぐ。結納金代わりに鉄炮のことを聞けば」

「いい加減にしろ！」

金兵衛の怒気を含んだ口調に、若狭はびくりとして固まった。

「いいか、鉄炮のことは全部俺の責任だ。お前らが身代わりになる必要なんてない、分かったな」
「……じゃあ、父ちゃんが一人で責を負って切腹するの？」

金兵衛は先日の発言を激しく後悔した。金兵衛が自嘲気味に言った切腹するという話まで、若狭に聞かれていたのだ。無論、金兵衛はまだ自害するつもりなどない。あの発言は、頭に血が上った勢いで飛び出した放言であった。

「あのな、あん時の俺はカッとなってたんだ。まだ公儀から腹を切れて言われたわけじゃねえ

し」

「でも、今のままで……」

若狭はそれ以上言わなかったが、何が言いたいかを想像するのは容易であった。時堯からの命を果たせなかつた金兵衛は切腹、身寄りのなくなつた若狭と賀太郎は路頭に迷う。このまま鉄炮複製に打開策が生まれなければ、いつかは訪れるであろう未来。自分が南蛮人に嫁入りすればそれを回避できる、と若狭は言いたいのである。

確かに金兵衛にとつても、家族のことは気がかりであつた。鉄炮を作れずに自害する、そんなれば非常に無念ではあるが、自身の思い上がりで技術不足のせいであるとまだ割り切れる。しかし、罪のない若狭と賀太郎が孤児になつてしまうのは何とも心苦しい。

それに、金兵衛は鉄炮を諦めきつたわけではない。現状打てる手がなくなつただけであり、どんな手を使つても鉄炮を完成させたいという熱意の欠片は残つていた。問題がその対価に娘を差し出さなければならぬということだ。

しばしの沈黙の後、金兵衛が口を開いた。

「そもそも、相手は言葉も通じねえ南蛮人だ、どんな苦勞をする羽目になるか分からん。そしてもし嫁入りしたといて、必ず鉄炮の技術を教えてくれるとは限らねえ。それでもまだ嫁入りするって言えるか？」

若狭は黙つたまま、こくりと一つ頷く。

「すまねえっ」

金兵衛は自分の娘に、這いつくばって頭を下げた。

「父ちゃん、あたしは家族のためになるなら何だってやるつもりだった。死んだ母ちゃんの代わりに、あたしが家を守るんだって。だから父ちゃんが頭下げることはないんだよ」

「すまねえっ、すまねえっ」

若狭に慰めともとれる言葉を掛けられるが、それでもなお、幾度も、幾度も金兵衛は頭を地面に叩きつけた。突然、勢いよく玄関の戸が開かれる。強張った表情をした小四郎が、家の中に飛び込んできた。

「金兵衛殿、早まっては……あれ？」

呆けた顔をする小四郎。彼は昨日の今日で金兵衛が自殺しかねないと、八板家まで様子を窺いに来たのである。するとどうだろう、家の中からは金兵衛が泣きながら何か詫げる声が聞こえる。すわ一家心中かと、小四郎は早合点したのであった。実際には、土下座する金兵衛とそれを宥める若狭がいたのだが。

「篠川様、丁度よかった」

金兵衛が土下座の体勢からがばりと起き上がり、小四郎に掴みかからんばかりの勢いで訊ねた。

「南蛮の鉄炮職人は、まだ赤尾木にいますか」

その勢いに小四郎は気圧されたのか、やや吃りながら答える。

「い、いや、どうでしょう。取引が済んだらすぐ罫鏡に戻らしいので、今日にでももう帰るやもしれません」

「なんと。行くぞ若狭！」

「は、はい！ 賀太郎、姉ちゃんがなくても、しっかり父ちゃんの言うこと聞くんだよ！」
唾然とする小四郎と賀太郎を残し、二人は家から飛び出して行った。

二人は黒山尻から走り続け、幾ばくもしないうちに赤尾木の港に到着した。港には嫌でも目立つキャラック船が停泊している。

船の周りは、恐らく野次馬であろう者たちで人だかりとなっていた。二人は南蛮人を探そうとしたが、その必要すらなかった。今まさに船へ乗り込もうとしている、幅広帽子にごてごての服を着た異人の姿を認めたのだ。その異人が目的の鉄炮職人であるかは分からないが、金兵衛たちに猶予は無かった。

「しばし、しばし待ったあーっ」

人を押しのけ、叫びながら金兵衛が船へ駆け寄った。南蛮人を含め、周囲にいる者が足を止めて金兵衛に注目する。息も絶え絶えになりながら、二人は南蛮人のそばに倒れ込んだ。

「へらーしゃ、ぼせえすたべいん」

南蛮人が、何やら言いながら金兵衛を助け起こした。南蛮人以外の周りにいる者は、やや遠巻きにそれを眺めている。どうやら、辺りには通訳ができそうな者がいないらしい。出港直前であるならば仕方ないことである。

言葉が通じないのなら拝み倒すまで。金兵衛は南蛮人の足元に縋りつき、必死の形相で訴えか

けた。

「お願いします、お願いします、私の娘を嫁に出すので、代わりに鉄炮の作り方を教えてください。お願いします、お願いします……」

精一杯の身振り手振りも交え、金兵衛は何度も繰り返して頼み込んだ。若狭も金兵衛に倅い、懇願しながら何度も頭を下げた。

南蛮人は初めたじろいていたが、やがて二人の動きに注視しだした。言葉は理解できなくとも、二人が何かを嘆願していることには気づいたのである。

「なうん、えんでんどべん」

南蛮人がまた何かを喋った。どうやら、金兵衛が何を頼んでいるのか、もっと詳しく伝えてほしい様子である。金兵衛は拝み倒すのをやめ、身振りでの意思疎通に専念することにした。

まず鉄炮を構える仕草を見せる。南蛮人は頷いた。次に金兵衛は鎚を振るい、鉄炮を作る動作を見せる。また南蛮人は頷いた。最後に金兵衛は若狭を指さし、差し出す仕草をする。南蛮人はしばらく考えたあと、「えいら？」と訊ねた。金兵衛にはその意味は分からなかったが、とにかく大きく首を縦に振った。

金兵衛と南蛮人は、その意図を確認しあうように何度かそれらの動作を繰り返した。

やがて船の上から、呼びかけるような声が聞こえてきた。南蛮人はそれに答えると、ぱっと若狭の手を取った。

「あっ」

金兵衛が何か声を掛けようとしたが、言葉が出る前に、南蛮人と若狭は渡し板を渡ってしまった。二人が船へ上がると、すぐ板は外された。

悲劇的な父娘の別れにしては、余りにもあっさりとしたものであった。

船に錨が引き上げられ、三本の太い帆柱には帆が張られる。じきに船は風を受け、西の海へ滑り出した。水平線の向こうへ消えていく船影を、金兵衛は日が暮れるまで眺めていた。

西の空は晴れ渡っていた。

それから金兵衛は慎ましく暮らした。生活に困らない程度に、刃物を売って賀太郎の食い扶持を稼いだ。娘を南蛮人に差し出したことについて、とやかく言う者もいた。しかし金兵衛は、そのような者に対して反論もせず押し黙っていた。

とは言っても、金兵衛は以前のようにやさぐれていたのではない。一年後、南蛮人が鉄炮の技術を携えてやって来るのを、じっと待っていたのだ。

もちろん金兵衛の思い通りにことが運ぶとは限らない。そもそも金兵衛の意図が南蛮人に伝わったのかすら、確認のしようがないのだ。次の南蛮船が来るまで、金兵衛には祈ることしかできなかった。しかし娘まで差し出したのだから、何と少しでも鉄炮を完成させなければならぬ。次の機会をモノにできなければ、金兵衛は息子と心中する覚悟であった。

「金兵衛殿、金兵衛殿」

若狭が南蛮人に連れて行かれてから、およそ一年が経ったある日のこと。いつぞやのように、

八板家の戸を叩く者がある。言わずもがな篠川小四郎である。鉄炮に関わって此の方、小四郎はすっかり八板家の常連となっていた。

「へえへえ、聞こえますよ」

ややあって、金兵衛が戸を開けた。一時期に比べ、痩せこけていた顔は幾分か肥えていた。そのまま慣れた様子で小四郎を家上げる。

「こんにちは！」

賀太郎が元氣よく挨拶をした。はい、こんにちは、と小四郎が微笑みかける。両者のこのやり取りも、彼らにとってはすっかりお馴染みものになっていた。

「まま、粗茶くらいしか出ませんがゆっくりして下せえ」

「待たれよ金兵衛殿」

土間へ向かおうとする金兵衛を、小四郎は呼び止めた。

「先ほど、南蛮船が赤尾木に到着した」

小四郎がそう言い終わるや否や、金兵衛は急須をうちやり家から飛び出して行った。驚いた賀太郎が、ひょえー、と素っ頓狂な声を上げる。

「またか」

いつぞやの如く取り残された小四郎は、金兵衛が帰ってくるまで賀太郎の面倒を見る羽目になるのだった。

赤尾木の港は、既に商売人や野次馬など多くの人で賑わっていた。人だかりの奥にはキャラック船の帆柱が聳え立っている。金兵衛は乱れた呼吸を整えながら、帆柱を目印に歩を進めた。

船の周りでは、大勢の人や物が行きかっていた。ちらほらと南蛮人らしき姿も見える。金兵衛は去年会った南蛮人を血眼になって探した。この一年間、ひたすらに待ち続けた機会である。目当ての南蛮人はすぐに見つかった。

「おい」

そう呼びかけたところで、金兵衛は南蛮人の傍にもう一人、見覚えのある者がいることに気が付いた。片時も金兵衛の頭から離れることのなかった、愛しい娘の姿である。

「若狭！」

服装はすっかり変わっていたが、その声は一年前から変わっていない。南蛮人に連れられていたのは、紛れもなく若狭であった。

「父ちゃん！」

満面の笑顔で飛び込んできた若狭を、金兵衛は受け止めた。

「よく帰って来れたなあ」

そういって若狭の手を取った金兵衛は、違和感を覚えた。昔の若狭は女性らしく華奢な手をしていたが、今は少し武骨になり、金兵衛のそれに近付いているように感じただ。怪訝な顔をして金兵衛は問い質した。

「若狭お前……何を仕込まれたんだ」

「鉄炮！」

金兵衛は己が耳を疑った。きつと周囲の喧騒によって聞き違えたのだろう。

「よく聞こえなかった。もう一遍言つて」

「てっぽう！」

金兵衛の聞き違いではない。若狭ははっきりと「鉄炮を仕込まれた」と言ったのだ。

すると例の南蛮人が顔を綻ばせながら、一言二言、何か話しかけてきた。若狭は南蛮人に頭を下げてから返事をした。

「むいちっしーも、おぶりがーだ。あぐらでーそ、ぼるせう、あばいお」

突然、理解不能な言語で喋りだした若狭に、金兵衛は目を見張った。この一年の間に、若狭はある程度の葡萄牙語を習得していたのだ。

言葉を失う金兵衛に、若狭は事の次第を説明した。

一年前、金兵衛が行った必死の懇願は、思わぬ結果をもたらした。金兵衛の言わんとするところは「娘と引き換えに鉄炮の作り方を教えて欲しい」であった。それを南蛮人は「娘に鉄炮の作り方を教えて欲しい」と解釈したのだ。この単なる勘違いが若狭の運命を変えた。

罫鏡に連れて行かれた若狭は、そこで鉄砲鍛冶の技術を一年間みっちり仕込まれた。若狭が一年で技術を会得できたのは、他ならぬ金兵衛の血を引いていたからであろう。兎にも角にも、若狭は一端の鉄砲鍛冶となって種子島に帰って来たのである。

「そりゃあ、なんと礼を述べればいいのか」

金兵衛は鉄炮の技術には莫大な対価を支払わなければならないと思いついでいた。しかしこの南蛮人は、気前よく娘を引き取って鉄砲鍛冶の指南を施したのである。

金兵衛がただただ恐縮していると、南蛮人は何か言いながら手を差し伸べてきた。

「い、今のは何と？」

若狭はクスリと笑い、南蛮人の言葉を伝えた。

「娘さんによれば、あなたは大層優れた刀鍛冶だそうですね。鉄炮の代わりに、あなたの打った刀を一振り譲り受けたい、だって」

日本の刀鍛冶と、葡萄牙の鉄砲鍛冶は、がっちりと固い握手を結んだ。

その後、金兵衛は若狭と協力して鉄砲開発を再開する。散々に苦勞させられていた銃底の強度不足の問題は、若狭が伝えた「ネジ」によって解決した。当時の日本には、ネジの技術どころかその概念すら存在していなかったのだ。鉄炮の伝来は、同時にネジの伝来でもあったと言える。

若狭はネジの切り出し方を金兵衛に教え、それによって鉄炮は十分な強度を得ることができたのである。

天文十四（一五四五）年、八板金兵衛は伝来から足掛け二年の歳月を経て、鉄炮の国産化に成功した。

その製法は堺などを経て日本中へ広まり、以降の戦場を一変させることとなる。鉄炮は従来の武器と並んで合戦の主役となり、戦国時代末期には数十万挺もの鉄炮が国内で保有されるまでになった。まさに鉄炮は、国の形を変えた武器となったのである。

種子島時堯は鉄炮の有用性に着目した慧眼を評価され、鉄炮を複製した八板金兵衛清定、火薬を調合した篠川小四郎秀重の両名も、後の歴史書に名を残している。

若狭については確実な資料や記録が残っておらず、様々な伝承、逸話として現在までその名が伝わっているのみである。

(文学部歴史学科四年)

臨時運行レトロトレイン

藤崎 銀杏

折り畳みキャディラック

「まだしばらくは半袖ポロシャツ一枚でいいな。」

もう十月なのに今朝もテレビの天気予報では真夏日になると伝えていた。

石野誠人は、遠近両用コンタクトレンズをつけた両眼の乾燥を防ぐためにゴーグルを掛けると、サドルを目一杯高くした愛車キャディラックのペダルを踏み込んで一日を軽やかにスタートさせた。そう、アメリカの高級自動車ブランド『キャディラック』とは言っても、ブランド名を冠した小さな折り畳み自転車のことだ。

家を出て最寄りの駅に向かって最初の信号を右折する。ゆるい下り坂でペダルを止め、そのまま流しながら風を受けていると、どこからか金木犀の甘い香りが漂ってきた。姿は見えなくても、あの濃い緑の葉と小さな金色の粒々のコントラストが目には浮かぶ。『金木犀』というその木の名前を、石野は四十年前、通っていた小学校のグラウンドに植えてあったその木の香りと一緒に覚

えた。石野はスウィットと深呼吸した。大好きな香りだ。電車が来るまでまだ少し時間がある。慌てる必要はない。

石野は毎朝、熊本市内に向かうために電車を使う。あと半年足らずで五十歳を迎えるが、勤続二十八年目にして働き慣れた職場を離れて、今年の四月から大学院で学ぶことになり、自宅から車なら片道一時間と少しかかる熊本市内に通うことになったのだ。自家用車を持っていない訳ではない。何度か運転して通ってみたこともある。郊外を走るときは車の流れは概ね悪くはない。ところが、国道三号線に入ったところで一転、上下それぞれ二車線の道路は、長蛇の行列で身動きできなくなる。出発時にナビが一時間だと示していた道のりが、一時間半でも着かない。脇道もなく、前後を阻まれているので、行列から離脱することさえできない。このときに催したりすれば地獄なのである。そのおぞましさときたら、文章に描写するのが憚られるほどであるから、そのときの石野の悶絶の様子は想像にお任せする。

そうした訳で石野は毎朝、自宅からキャディラックを漕いで最寄りの駅まで向かうのだ。自宅から最寄りの駅までは十分弱ほど漕ぐ。そこにキャディラックを停めてJRに乗り換え、各駅停車で三十分ほど揺られたあと、上熊本駅に着く。最後に、駅の駐輪場に置いてもう一台の自転車です十五分ほど走らせて大学に到着する。通ってみると、所要時間は車の場合より短いくらいなのだった。キャディラックのフレームはアルミ製で軽く、折り畳んで輪行バッグに入れてから電車に持ち込むこともできるのだが、さすがに毎朝の通勤通学列車に同行させるのは他の乗客の

迷惑というものだろう。

駅に到着した石野は、ゴーグルを外して荷物にしまい、駐輪場のフェンスにキャディラックをワイヤーロックでつないでから改札口へと向かった。

鹿兒島本線下り電車

「おはようございます。」

SUGOCAを駅入り口でピ！と言わせるだけの便利な世の中になったけれども、昭和生まれの石野は努めて駅の嘱託員と挨拶を交わすようにしている。小さい頃、祖母に教わった『挨拶の大切さ』は理屈ではなく身に染み付いているのだ。

ワンマンバスを降りるとき、祖母は運転手さんに、

「ありがとうございます。」

とお礼を言うことを教えてくれた。それから今まで石野はできるだけ欠かさずことなく続けてきた。「行ってらっしゃい。」

ここは無人駅なのだけれど、朝から夕方までは市に雇われた嘱託員が駅員室にいてくれる。そしてたまにキュービロープの可愛い包みを手のひらに置いてくれる。

「お。ありがとうございます。行ってきます。」

改札を抜け、駅のホームでは、ここでの電車を待つための立ち位置にちょっとした工夫がいる。下車する上熊本駅での出口の階段に近い車両に乗るためには、前の方か後の方がいい。ただし、二両編成の電車は満員でやってくるから、途中で降りる高校生や大学生が乗っている車両に乗る方が座れる確率が高い。石野のような中途半端な年齢では、誰も席を譲ってはくれないから。遅くとも五分前には定位置に立って列車を待たなければならない。

定刻に着いた電車からこの駅で降りる客は今日もいなかった。石野はそっとため息をついた。「今日も座れないか。俺が中高生の頃は席を譲る相手を見定めるのが面倒だから、大人が乗ってきたら座席を立つようにしていたがなあ。」

石野はこっそりぼやいた。

目の前の座席で、サッカーの練習着を着て足を投げ出し、両足の間の床の上に大きなスポーツバッグを置いてスマホでゲームに興じている高校生を見ると、蹴っ飛ばしてやりたくなった。そう思った瞬間、

「！！」

左足に軽い痛みを感じたのは石野のほうだった。誰かに蹴っ飛ばされたのだ。石野は反射的に左を見たのだが、加害者は特定できない。

「他人にぶつかっておいて謝りもしないのか。」

腹が立ったが、相手が誰かわからないので、怒りの持って行き先がない。石野は小さく舌打ちをして、仕方なくFACEBOOKで愚痴った。

「電車の中で足を投げ出して座る高校生。年寄りに席を譲ろうともしない。サッカー部員のカッコしているけどスポーツマンにあるまじきだらし無さ。」

するとほどなく、若い『友達』が

『悲しいね』

のボタンとともに反応を寄こした。次のメッセージとともに。

「その高校生も徹夜で勉強をしていて疲れているのかもしれないよ。」

そんなことはわかっている。石野は返事を書いた。

「そうだね。でも、立っている大人も徹夜で仕事をしていて疲れているかもしれないよ。年寄りの方が体力はないよね。」

年寄りの猫が杖をついているスタンプを送ると、数秒後には、

『いいね』

が付けられた。

「若者がこぞって朝から疲れ果てている世の中だって？そんなのおかしいじゃないか。」

石野が電車の中を見回すと、座っている人たちは老若男女問わず、無言で手元のディスプレイに見入り、ときどき人差し指を動かしているだけだ。ときどきディスプレイを見ながらニヤついている、リュックを背負った黒縁眼鏡の男以外は誰も表情さえも伺えない。お互いに相手の存在

を無視することで、見知らぬ他人との近すぎる物理的距離によって高められる緊張を緩和しているというけれど、目の前の座席でだらしなく腰を突き出して座り、大腿開きでスマホを握りしめ、イヤホンで音楽を聴いているらしい男はなんだ。冷たい視線をこのジーンズにオレンジ色のスニーカーの、三十過ぎの男に向けていた石野は、今度は右上からじっと見つめる視線を感じて顔を上げた。吊り広告の中のローラがスマホを構えたポーズで鹿児島へと誘っていた。

ふと、石野は子どもの頃、鹿児島へ家族旅行に連れて行ってもらった帰りに国鉄の車両に弟と一緒に座っていた場面を思い出した。座席は今乗っているような車両の両側に一列ずつで車窓に背を向けるタイプでも、ときどき乗り合わせるみんな行儀よく進行方向を向いているようなタイプでもなく、座席の下にヒーターが仕込まれている青色の硬い椅子で、四人が向き合っているタイプだ。小学生に上がるくらいだったろう。弟と二人で隣同士に座って、目の前の座席には乗り合わせたおじさんが焼酎かビールかの匂いをプンプンさせていた。

たぶん両親はあいにく座れなくて近くに立っていたか、幼い子どもたちとは別れて、どこか空いた座席に座っていたのだろう。おじさんは石野少年と弟の二人に話しかけてきた。子ども二人だけの旅だと思ったのかもしれない。

「ボクたちはどこまで行くかね？」

「鹿児島から熊本の家に戻るところです。」

堅苦しい言葉遣いと思うかもしれないが、当時の子どもたちは他人と話すときにはこんな言葉

遣いだっただものだ。

「そうか。ほら、食べなっせ。」

おじさんは自分が食べているスルメの袋を兄弟に向けてくれた。弟が兄の顔を見る。石野少年が弟に小さく、

「ダメ。」

と言うと、おじさんは、

「なーん、毒なんか入っとらんけん、遠慮せんでよか。ほら。」

と、自分でも食べてみせた。兄弟はその一言で表情が和らぎ、おじさんの好意を受け取って話し相手を続けたのだ。そのときのおじさんの顔、そしてアルコールとスルメの匂いが懐かしい。

そんな列車の中でふれあいは過去のものになったのか。まあ、石野もLINEとFACE BOOKとメールの未読処理が朝の日課なのだから、目の前の無言のネットワーカたちと同じ穴のムジナであるのだが。石野は手元のスマホに届いている通販サイトからの未読のダイレクトメールをまとめて削除しながらそう思った。

次の駅でも、乗ってくる乗客ばかりで、さらにまた車両内の人口密度が高まった。

「ふーッ。」

石野はちょっとばかり長いため息をついた。後ろの兄ちゃんは大きなリュックを背負ったまま吊革につかまっているし、左に立っている会社員は手提げ鞆を右肩にぶら下げているので、電車

が揺れるたびに石野は前にと押されてしまう。しかし本人たちは、自分たちの荷物が隣の乗客の体を押ししていることに気付いている様子は全くない。リュックや鞆は体の前に保持するか、せめて混雑しているときくらい網棚に上げてもらいたいものだ。

多くの場合、石野は席に座れぬまま上熊本に到着する。今日もそうだった。元は池田駅と名付けられていた、夏目金之助が降り立ったというJR上熊本駅のレトロな駅舎は、その表側の部分だけ剥がされたようにして、隣にある熊本市電の上熊本駅の一部移築された。そしてJR上熊本駅は高架化されてホームが二階に移ったばかりである。到着した列車の開いたドアから降り立つホームにある、出口に向かう階段は、ほんの数分の間ではあるがちょっととした混雑状態となる。この駅にはホームへの上りエスカレーターはあるが、降りはない。階段が辛い利用客には小さなエレベーターはあるのだが、乗れて五名がやっとだろう。新しい駅舎なのに、どうしてこんな設計にしたのだろう。十年もすればきっと高齢化社会に対応するために設備を刷新しなければならなくなるだろう。

改札口ではSUGOCAの改札機は一台しかないので、通勤時間にはタッチのために行列ができる。さらに、上手にタッチしないと、

「キンコン！」

と警告音が鳴らされて、改札機から、

「もう一度タッチしてください」

と注意されてしまう。その度に行列の流れが止められて、後ろの人たちは一瞬しかめっ面になるのだ。熊本では大きい方の駅だとはいえ、所詮は九州の田舎の駅の一つだということなのか、ここ上熊本駅では、ハイテクでスマートに見えるICカード派ではなく、駅員さんに切符を渡すか定期を見せてすり抜けて行くアナログ派の勝ちである。

「矛盾しているよなあ。」

世の中は誰かが頭の中でデザインしたようにはいかないのだ。

『熊本地震』

石野は上熊本駅の自転車置き場に置いていた電動アシスト付き自転車に乗り換え、比較的平坦コースである県立体育館前通りを選んで、電動アシストのボタンを押さずにペダルを踏み込んだ。一目でわかるほどグニャグニャと波打った道路を進み、復旧工事が未だに手付かずの熊本城の石垣を横目で見ながら、やはり石野は半年前の地震のときのことを思い出さないわけにはいかなかった。最大震度七を体験した熊本では、直後から高速道路が通行止めとなり、新幹線も在来線も運休した。一般道路はあちこちで波打ったり段差ができたりしてはいたが辛うじて通れた。それでも、被災地支援に向かう車の流れと、郊外に救援物資を求める車の流れで上下線とも渋滞が続いて、しばらく県内の交通網は麻痺状態に陥ったのだ。渋滞を歓迎する人など一人もいなかったは

ずだが、仕方のないことだった。そうした車の列の中に、岡山県など他県からの給水車や、神奈川県警のパトカー、京都府の救急車が支援に来てくれていたのを見つけたとき、石野は感謝こそしても、渋滞に文句を言うことなど思いもしなかった。

まだ一週間しか通っていなかった大学院も五月の連休明けまで全学休講となり、石野も一週間ほど出身小中学校区でのボランティアを行ったりしたが、全く組織的ではない、個人として動くボランティアの役割は果たしたと判断した後は自分の院生室に毎日車で出かけて勉強していた。その間、交通インフラを支える人たちの必死の努力によって驚くほどの早さで公共交通網は復旧されていった。鹿児島本線を徐行しながら試験運転している二両編成の列車を、並行する道路の渋滞の車列の中から見た時、石野はとても頼もしく感じ、胸が熱くなったものだ。

このとき、直接であろうと間接であろうと地震の被害を受けた人々は、当たり前前の日常を送れることの有難さが身に染みたまはずだ。震源から離れた石野の自宅でさえ震度六弱の激しい揺れがあったが、ライフラインへの影響はなかった。だからこそボランティアができたのだけれど、もし通常の勤務状態だったらそれはできなかった。

『働かないアリに意義がある』という題名の本の主張の通りだ。」

と石野は思った。東日本大震災の時には、ボランティアに行って現地で支援活動をしたと思うたものの、勤めのある身としては募金や物資支援しかできなかったのだから。

自分の今置かれている立場でできることをしよう、石野はそう思ってボランティアにも勉強にも取り組んだ。きつと震災の影響があったあちこちで、同じように思った人がいたことだろう。

同じ院生室にいる若いストリートマスターが、アルバイトがない日にボランティア活動に出かけたそうだし、県内の被害が少なかった高校や中学校で生徒会が被災地支援の募金活動を行ったニュースはいくつも聞いた。危機に晒されると、人々の心の中に自然と優しい助け合いの心が戻ってくるのだろう。あれからもう半年、しかし、まだ半年だ。

浄行寺交差点の横断歩道で信号待ちをしながら、石野は『熊本地震』という名称に未だに違和感を感じていた。震災直後にFACEBOOKに投稿されていた、

「『熊本地震』という名称は、地震の被害を小さく見せてしまう。二回の震度七で起きた被害の大きさと、繰り返される熊本、大分、鹿児島、福岡、宮崎、長崎、そして佐賀まで及ぶ広域の揺れは『九州大震災』と名付けるべきである」

という誰かの主張に、石野は、

『超いいね!』

のスタンプを送った。これに対しての他の誰かの、

「呼び方一つで便利なものだ。川内や玄海、伊方原発を止めないための政治や行政の小手先の工夫か。復興支援の規模も小さくできるわけだし。」

というコメントには、石野は、

『ひどいね』

のスタンプにしておいたのだった。

石野は最近、通勤路の途中で、震災から半年を過ぎた今になって撤去や修繕が始まった建物をいくつも見る。外から見た目では被害などないように見えていた家屋やオフィスビルが取り壊され、更地になったところもある。被害のとくにひどかった益城町や西原村などへの対応が最優先事項で、緊急性が乏しい建物は後回しになっていたこともあるだろうし、撤去費用の目処がようやくついたのかもしれない。いずれにしても、昨日まで話していた知り合いが急に亡くなったような、突然の変化へのちょっととした驚きと戸惑いを感じている当事者としては、この一連の事態を『熊本地震』という短い名詞の複合語で済ますのは軽すぎるように感じるのだった。

石野は電動アシスト付き自転車を大学の校舎に寄せて停め、ダブルロックをすると、教室に入っていた。今日の授業が始まる。

夜の電動アシスト付き自転車

この日一日、授業と課題、そして自分の研究を終えて、帰路に着いた石野は暗くなった道を電動アシスト付き自転車で上熊本駅に向かった。もともと電動アシスト付きに乗るつもりだったわけではなかった。実家の父親が以前乗っていた車体があって、もう十年も放置されていたが、捨てるのはもったいないからと、放電してしまっていたバッテリーの中身だけ新品に交換して乗っ

てみたのだ。乗ってみるとこれがすこぶる快適なのであった。石野はすぐに気に入った。運転免許はいらないし、ヘルメット着用の義務もないのでスクーターより手軽だ。

昨日の帰りには壺溪塾から熊本地裁の前を上っていく急な観音坂にチャレンジしたが、立ち漕ぎせずともグングン上っていて汗もかかなかった。この便利な乗り物は、もう手放せそうになり。おかげで石野の体重とお腹の脂肪は減らないだろうけれど。

「よし、今日は新しいルートを開拓するぞ」

次の電車までちょっと時間が空いていたので、今日は更に初めてのコースに挑戦した。濟々巒の正門前から西へ進み、必由館高校の前の熊本電鉄の線路を横切って、長く真っ直ぐな瀬戸坂を一気に上った。さすが電動アシストである。前を立ち漕ぎしていた男子高校生を悠々と追い越してから、石野は熊大附中と京陵中の間の道路を通り抜け、たった十二分で上熊本駅に到着してしまっただ。

「電動アシストを使って信号にかからなきゃ、こんなに早く着くのか。」

最短記録である。随分と早く着いてしまった。ただし、帰りの上熊本駅の上りエスカレーターに乗って到着するのは、一日の中で最悪の無法地帯だ。上熊本駅利用者のマナーの悪さはどうにかならないものか。今日のように電車が来るまで二十分程もある暑い日は、ホームにある待合室でクーラーに当たっておきたいのだが、石野はそうせずに電車を立って待つ。どうせ待合室は満員で、そこでも立たされてしまうのだから。

ホームにある乗車場所の足元には、『二列でお並びください』と書いてあるのだが、団子状態

の人の塊になっているか、もしくは一列になっている。石野はしかたなく長い一列の最後尾に並ぶ。そして、電車が到着すると、一般市民の姿をした極悪人がどこからともなくやってきて、堂々と一番前に割り込むのだ！

先週割り込もうとしたのは気弱そうなサラリーマンだったから、石野がチラと見たところ、どうぞ、とばかりに引き下がったけれど、昨日割り込んできたのは石野と同年代の事務員らしき女性で、石野は眼力で負けてしまったのだった。

上熊本駅の駅員さんは数名常駐しているようだが、ホームにいた試しはない。なぜだろう。無秩序な利用客たちに、

「二列でお並びください。割り込みはなさないでください。」と指導してくれたらいいのに。都会では、利用客による駅員さんへの暴力が問題になっているようだから、そんなトラブルに巻き込まれないように乗客との接触を避けているのだろうか。それならせめて、構内放送でもマナー向上を呼びかけてくれたら少しは効果があるかもしれないに。

臨時列車

「ガガガ……さんばんせんにく……ガガ……はいりますれっしゃはあく……ガガガ……ごじゅう

はちじい〜…ガガガガガ…ななじゅうにふんはつ〜…ガッ…りんじれつしやでえ〜す。
きいろいせんのおうちがわでえ〜…ギギ…おまちくださあ〜い。…ギギギ…」

不快なノイズが時折入り、ホームのアナウンスがとも妙なトーンで響き渡った。石野はヘンテコな方言のようなイントネーションに吹き出しそうになって周りの利用客を見回したが、みんな澄ましていて変わった様子はなかった。そもそも、『三番線』と聞こえたが、上熊本駅には一番線と二番線しかないはずだ。到着時刻もメチャクチャに聞こえたような気がする。

「まだ新しい駅なのに、放送設備が壊れたのかな？」

ほどなく列車はホームに入ってきた。ただし、臨時列車だけあって普段とは違うタイプの車両の三両編成である。

「うわぁ、懐かしい！」

先頭車両こそ電化されている『電車』だが、二両目と三両目はディーゼル列車だ。石野が朝の下り列車の車内で思い出していたあの車両である。ドアが開き、降りる乗客が終わるのを待って、石野は二両目の車両に乗り込んだ。内装も昔のままだ。シートは例の四人が向き合う、硬い青のタイプ。天井には扇風機がついていて、生ぬるい空気を掻き回している。今時珍しく、冷房車ではないらしい。昔はそうだった。さすがに窓は全開にしてある。

「まだこの車両が走っていたのか。」

石野は窓が開けられる車両にはもうお目にかかることはないと思っていた。

「そうそう、窓の両側は金具を指で挟んで動かすんだったよね。」

そう思って、石野は珍しく空いているシートに座った。ふと横の人に目をやると、その髪型やファッションまでなんとなくレトロに見える。他の乗客もそうだった。

「まるで三十数年前にタイムスリップしたみたいだ。」

石野にはこのレトロな臨時列車がJRの粋なサービスに感じられ、懐かしさに耽った。

ところが、次の駅で乗り込んできた高校生の一団が、また石野の心を乱したのだった。二人の男子生徒と二人の女子生徒の四人組は、満員ではないのに座席に向かわず、ドア付近に溜まったのだ。それだけならまだしも、あろうことか、そのうちの男子生徒一人は床にあぐらを組んで座り込んだではないか。

石野がその無作法な男子生徒の顔を睨んだときだった。

「アッ！」

石野は絶句した。

そのテクノカットを意識した髪型の、銀縁の眼鏡をかけた男子生徒は、紛れもなく、高校生時代の石野であったからである。学生服の腕の白い一本線にも、黒の革の学生鞆にも見覚えがある。そして、横にいる丸顔の男子生徒は、中学校からの同級生、山中だった。さらに、通称『チャンピオンベルト』と呼ばれる大きな校章のバックルのベルトを巻いた制服を着た女子たちも、同級の桃子と八重だった。四人は石野が見ていることに気づく様子はなかった。

桃子が床に座り込んだテクノカットに声をかけた。

「イシノ、やめなよ。立っとらんといかんよ。」

八重も呆れたように言った。

「ほんとう。立っているべきだわ。」

山中も、

「恥ずかしい。やめやめ！」

と腕を引っぱり上げている。それでもイシノは、床に偉そうにあらをかいている。まるで、それが自分に与えられた権利のように。

石野はこの光景を思い出した。そして、全てを了解した。自分が毎日の通勤で不愉快に感じていた行為はことごとく、自分自身がこれまでやったことのある行為だったのだ。

お年寄りに席を譲らなかったこともある。人にぶつかって謝らなかったこともある。荷物を床に置いていたことも、背負っていたままだったこともある。座席の座り方だってそうだ。それらの自分の行為を棚に上げて、他人を批判ばかりしているのは歳だけ取った傲慢なオッサンの戯言ではないか…。

「他人の行動についてアレコレ言っている資格は、俺にはないんだ…。」

石野は打ちのめされたようにうな垂れ、しばらく目をつぶっていたが、

「違う…。いや、違うぞ。」

石野は何かを思い出したように座席を立て、イシノたちの方に静かに近づいた。そして座り込んでいるイシノの腕を優しく取って低い声で論じた。

「君、床に座り込むものじゃない。みっともないよ。立ちなさい。鞆が重いのなら網棚に上げて。」

とにかく吊革に掴まって立っておくんのだ。」

石野は三十年ちょっと前に国鉄の列車の中で自分に掛けられた言葉をそのまま高校生石野に伝えた。わかったのだ。今朝の電車で石野の左足を蹴ったのは石野なのだ。そしてやはり今朝、ローラの辺りから見下ろしていたのも石野自身だったのだ。

イシノは、石野を驚いたように見上げたが、「はい。すみません。」

と、素直に従い立ち上がって吊革に掴まった。周りの同級生たちも石野に軽く会釈をした。

そうだ。今日の昼間の大学院の授業で教わった。一九八〇年頃、外国の新聞に日本の子どもたちの状況について、『社会的ルールを身につけていない』、『子どもらしい謙虚さがない』、『欲まみれ』であり、『日本の子どもは世界で一番醜い』と書かれていたのだそうだ。石野が生まれたのは一九六七年だから、石野もまた、『世界で一番醜い子ども』の一人であったのだ。

「自分にはそれを注意する資格はない」と引き下がり、目の前で行われる不道徳な行為を正すことを諦めてしまうことは簡単だ。しかしそれでは、次の世代の醜い子どもが育ってしまうだけだ。ネットで非難しても目の前で起きている行為は変わらない。上から目線で叱ればいいのでもなからう。教えればいいのだ。

臨時列車が次の駅に着くと、車掌が近づいてきて、石野に声をかけた。

「お客様、到着です。お降りください。すぐに次の列車が参ります。」

石野は降車を促す車掌などという妙な存在をなぜか疑うこともなく、開いたドアからホームに降りた。ここで降りたのは石野一人だった。開いている窓から、

「ほーら、もうすんなよ！」

「今の人、イシノに似とらんだった？」

「あたしもそう思ったー！」

「えー？そうかー？」

という会話が聞こえてきた。ドアが閉まり、振り返って見送った臨時列車の中の高校生集団が、四人とも吊革に掴まってこちらを見送ってくれていた。石野は軽く手を上げて呟いた。

「さよなら、ありがとう。」

鹿児島本線上り電車

三十秒も待たないで後続の列車が到着し、石野は乗り込んだ。いつもの混雑した列車だった。石野はこの電車でも座ることはできなかったが、不満なく吊革につかまって立った。すると、右の方にかなり年老いたおばあさんが、吊革に本当にぶら下がるようにして立っている。隣の吊革につかまっていた女子高生が気を配り、

「おばあちゃん、大丈夫ですか？」

と、優しく声をかけた。このおばあさんは、

「大丈夫、大丈夫。若い人たちは一日働いて疲れていらっしやるからね。私も頑張ります。ありがとう。」

そう答えたのだが、列車が揺れるたびにおばあさんはよろめいてしまう。その女子高生も石野も、このおばあさんのことが気になってしょうがない。すると、次の駅で左前方に一人分の座席が空いたので、石野は右手を伸ばしておばあさんの肩を叩き、空いた席を知らせた。しかし、その空席には、すぐ傍に立っていた三十代くらいの女性がサッと座ってしまった。

「あら。」

石野とおばあさんと女子高生の三人は顔を見合わせた。

「いいんですよ、若い人たちは今日一日中働いていらっしやるんですからね。」

おばあさんは、またそう言ったが、石野は何か申し訳ない気持ちになった。

さらに次の大きな駅でたくさんの乗客が降りた。石野は目の前の席が空いたので、そこに誰も座らないように守りながら、おばあさんに座席を勧めた。おばあさんは、

「あたしが座っていいのかしら。」

そう言うてすぐには座ろうとしなかった。

「当然です、お座りください。」

石野がそう言うとおばあさんはようやく座り、その隣に空いた席を石野に勧めた。

「お兄ちゃんも座り。あたし一人じゃ座りづらいから。座って。」

そう言って袖を引かれ、石野はおばあさんの右隣に腰掛けた。女子高生もほっとした様子で参考書に目を落とした。

石野もいつもの習慣でスマホを取り出したが、そのままおばあさんの耳元で話しかけた。

「若い人たちが年配の人に席を譲るとい文化はなくなってしまいましたかね。」
すると、おばあさんも小さな声で答えた。

「そうですね。優しい気持ちがかちょっとだけないのかもしれないです。でもね、さっき、あのお嬢さんも、お兄ちゃんも声をかけてくださったでしょう、あれで元気が出たのよ。ありがとうね。」

そんな、礼を言われるようなことはしていない、石野は心からそう思った。自分だって『優しくない』一人なのだ。自分が立っていたからおばあさんに気づいたが、もし座っていたのなら、いつものようにスマホの未読処理にかまけて、おばあさんに席を譲るところか、その存在に気づくこともなかっただろう。

「みんな機械を見ているものね。でもね、若い人たちは機械を使わないと世渡りできないでしょう。私の娘も孫もみんな持っていますよ。私はね、今年は八十八になりますかね、週に一回はこうして自分の足で歩いて電車に乗って習い事に行っているんです。動けるうちは、できるだけ外に出ようと思ってますね。この習い事は、孫がスマホで見つけてくれたんですよ。今の世の中、便利ですね。」

石野は手に握っていたスマホを鞆に戻した。今はこのおばあさんと話す時間の方がずっと大切

なはずだと思った。

そんな会話をしていると、駅に到着したのでもないのに、おばあさんの座っている席の二つ隣の優先席に座っていた疲れた表情の六十年配の女性が不意に立ち上がったかと思うと、目の前の若い健康そうな女性に声をかけ席を譲った。その若い女性は、一瞬遠慮したが、年配の女性に礼を言っただけで席を入れ替わった。近くに座っていた若い男性や、周りに立って学校の話に楽しく花を咲かせていた女子高生たちも何が起きたかわからず、一様に驚いた様子だった。石野はもう一度この若い女性をよく見て理解した。若い女性は、大きくなっているお腹を手荷物で隠して目立たないようにし、座りたいのを我慢していたのだった。

すると、優先席の隣の若い男性がすぐさま立ち上がり、年配の女性に席を譲った。最初、この年配の女性は断ろうとした。

「せっかく座っていらっしゃるのに、申し訳ありません。私がこの方と代わったために。」

若い男性は、耳からイヤホンを外しながら言った。

「いや、座ってください。僕が譲るべきだったとに、スマホ見とって気づかんだんです。すんません。」

そう言ったあと、彼はイヤホンを耳に戻して、吊革に掴まったままスマホに目を落とし、女子高生たちもまた、もとの話題の続きを始めたのだった。

石野は、

「優しい気持ちは、見えないだけでしたね。」

と、そっとおばあさんに言った。おばあさんはにっこりとして微笑んだ。

石野はおばあさんに別れの挨拶をして、いつもの駅で降りた。もう辺りはすっかり暗くなっており、主人を待つキャディラックが、どこからか漂ってくる甘い香りに包まれていた。姿は見えなかったが、確かに金木犀の香りがしていた。

（大学院教育学研究科教科教育実践専攻修士課程一年）

縁者欠格

三杉 望海

——最低な人間なのです。そもそも家族を知らないのに、家族が出来るはずもありませんでした。所詮真似事だったのです。結局あなたを傷つけただけだったのですから。

あなたは気づいていたように思うのです。あなたはきっと許さないでしょう。最後まで聞く勇気もありませんでしたが、だからこそあなたの時々する目が怖かったです。

陽子が照幸と初めて出会ったのは両親の葬式だった。

居眠りでもしたのかたまたま地面が脆かったのか、はたまた他の要因か、陽子の両親は山の中で車ごと谷底へ落ちて亡くなった。それで一人娘である陽子は突然喪主を務める羽目になった。まだ二十一歳の身に喪主という役割は正直重い。

陽子は四歳になる直前で父方の祖父母に預けられて育った。だから陽子には両親の記憶などほとんどない。なぜ両親が彼女を育てなかったのか、陽子自身も知らない。小さい頃一度陽子はそ

の理由を祖父母に訊いてみたことがある。すると祖父はあいつらは不孝者じゃと吐き捨てるように言い、祖母はごめんなさいねと泣いた。それ以来彼女は両親の話はしないようにして生きてきた。

両親の記憶などほとんどないのに涙に濡れた顔で手を握りしめられ、本当に残念だったわ、いい人たちだったのと言われても陽子はただただ困惑するばかりだった。

——血縁としては一番近いはずの私、それも喪主がきつとこの中で一番悲しんでいない。肉親の死に涙の一滴も流さない私は冷たい人間なのだろうか。

周りは右も左も嘆き悲しむ人たちがばかりで、どうにも陽子は自分だけが場違いな存在な気がしてならなかった。と、ぼつんと所在なさげに立っている人がふと目に入った。

小柄な人影はじつと棺の方を眺めていたかと思うと、くるりと踵を返して静かに会場を後にした。これ幸いとこの居心地の悪さから少しでも抜け出すべく、陽子はその後を追うようにして外に出た。葬式の準備や打ち合わせ等々は遠い親戚たちが進めてくれたから、少しくらい喪主が席を外しても問題はないはずだった。

自動ドアをくぐると外は灰色に霞んでいた。さあさあと雨の音がする。背後でドアが閉まると会場の澱んだ線香臭い空気も途端に消えた。陽子は思わずほと息を吐き出した。なんとなく辺りを見渡すと、右側の少し離れたところに先程の人影の主がいた。

まだ高校生くらいだろうか、顔立ちにわずかにあどけなさが残る中性的な少年だ。ぶかぶかとした喪服に着られているかのような印象を受けるほど細身で、女性の平均身長くらいの背丈であ

る陽子より僅かに高いくらい小柄だった。今日は雨とはいえ夏特有のじっとりとした暑さがあるのに白い布の手袋を嵌めている。茶色がかかった髪は癖があるのか巻毛に近い。はっとするほど肌が白く、どことなく浮世離れたような印象を受ける。彼の色素の薄いぱちりとした大きな瞳がどうにも引くかかる。——彼と私はどこかで会ったことでもあったのだろうか。

ここに居るのが申し訳なざげな様子で控えめに立っていたから親近感が湧いたのだろう。陽子はとりあえずそう結論づけた。正直今は人と話すような気分ではなかったが、彼のことは気になった。陽子が彼の方に少し近づくと、彼は宙に向けていた視線をこちらに向けた。

「この度は……」

少年は雨の音に紛れるくらい小さい声でそう言った後、口ごもり丁寧に会釈をした。見た目の印象にしては低い声だった。歳の割には礼儀正しく落ち着いている子だ、と陽子は思った。

「おいで頂きありがとうございます。親戚の方でしょうか、ご挨拶が遅れてしまって御免なさいね」

陽子がそう言うと、少年は少しの間じいっとこちらを見て再び頭を下げた。

「いえ、あの、はい。親戚……です。こちらこそすみません」

彼が発する親戚、という言葉の響きは何故か不思議な違和感があった。まるで子供が言葉の意味を知らずに口にするかのようにだった。

「謝らなくてもいいんですよ。私も喪主なのに全然親戚の皆さんを存じ上げなくて」

「僕も知らない人ばかりだなあって。……だから何というか、申し訳ないです」

少年はゆっくりとした口調のまま慌てたように両手を振った。陽子も頭を振る。やめ時を見失ったのか、二人とも間抜けのように同じ動作を繰り返した。こんな時なのになんとなくおかしさがこみ上げてきて顔を見合わせて小さく笑う。そして不謹慎を恥じるかのように二人は俯いた。

申し訳ない、という言葉がすとんと陽子の心に降りてきた。この違和感の正体に名前がついた。悲しいというより申し訳なかったのだ。——祖父や祖母が亡くなった時の方が正直悲しかったなあと思ってしまうのだ。その罪悪感が余計に陽子をあの場に居づらくしていた。

横で自動ドアが開き、

「藤崎くん」

と声がした。知っている声だったので振り返るとはたる園の園長先生が立っていた。

「あっ、先生」

声が重なり、陽子と少年は互いを驚いたように見た。

陽子は幼い頃から祖父父母の教育方針で幾つか習い事をさせられており、そのうちの一つにピアノがあった。陽子のピアノの先生とはたる園の園長先生は仲が良いらしく、ピアノ教室の生徒みんなで年に一、二回ほどはたる園へ慰問に訪れていた。だから小さい頃から陽子は園長先生と面識があるのだ。

患者、とりわけ病気で親元を離れて暮らしている子供たちに向けて演奏することは嫌いではない。——もっとも最近は就職活動や卒業論文の執筆に追われて足が遠のいていたが。

「お焼香をあげてきたよ。——ちょうどよかった、もう二人とも顔を合わせていたんだね。陽子

さん、今日はあなたにお話がありました」

少年は陽子と園長先生を交互に見た後顔を伏せた。どこかゆっくりお話できる場所はありませんか、と訊かれたので陽子は親族用の控え室として割り当てられていた和室に彼らを案内するのことにした。

和室に入り座布団を勧めると、園長先生は静かに、少年は遠慮がちに座った。お茶を出した時、少年が園長先生の方を助けを求めるような目で見、園長先生は少年の肩を優しく叩いたのを陽子は見逃さなかった。

席に着くと、園長先生は先程陽子がテーブルの傍に置いたお盆と急須を取り上げて陽子の分のお茶をいれた。陽子が慌てて頭を下げると園長先生は長くなるので、と笑った。

「この度は本当にご愁傷様でした。ご両親の急死で気持ちの整理もついでにないとは思いますが、大切な話があるので」

少年は先程からずっと俯いたままで、陽子は話が見えないまま、少年から園長先生へ視線を戻した。唐突な流れに自分だけ取り残されたかのような感覚がまた戻ってくる。

「この子はほたる園の入所者で、藤崎照幸くんといえます」

照幸です、と少年は呟いて頭を下げた。名前に込められた意味を確かめるような言い方だった。陽子も釣られるように会釈を返し頭を上げると、園長先生は彼女の顔を、次に照幸という少年

の顔をじっと見つめた。そして陽子に視線を戻した。

「照幸くんはあなたの実の弟です。そしてあなたは今、彼の唯一の保護者でもあります。——この度照幸くんは退所することになりましたが、彼は十七歳でまだ未成年だ。よって陽子さん、私はあなたに彼を引き取ってほしいと思っています」

「……聞いて、おりませんわ」

なんとか陽子は言葉を絞り出した。寝耳に水のようなことが多すぎる、とぼんやり思う。一体あと何度自分が何も知らずに生きてきたことを思い知らされることになるのだろう。何故誰も教えてくれなかったのだろう。一昨年亡くなった祖父を陽子は少し恨んだ。

「ほたる園は白斑病の患者が入所し、暮らしている療養所であることはご存知ですね。——ほんの四十年ほど前まで、白斑病患者は巷で『まだら』と呼ばれて差別されていたこともご存知ですか」

ああ、と陽子は声を洩らしたきり黙り込んだ。数年間療養所を訪問してきたのだ、少しは知っている。——白斑病というのは細胞が徐々に壊死していく病気で、皮膚に白いまだら模様ができ広がっていくのだ。その様がんとも気味が悪いからか、不治の感染病だと思われていたからか、患者は療養所にほとんど強制的に入れられていたらしい。そんなことをピアノの先生が少し説明してくれた気がする。療養所の片隅にある小さな資料館でもそんなことが説明してあった気がする。

だが正直なところ、陽子にとってそれは自分の生まれる遥か前の話だった。確かにほたる園の

入所者たちの中には瞼が垂れ下がっている人、顔や腕に白い斑点が模様を痛々しく描いている人、爪が欠けている人、手や足に包帯を巻いている人など様々な人達がいた。とはいえ幼い頃から彼らとそれなりに接しているからか、彼らを可哀想だと思うことはあっても忌み嫌ったことなどないのである。

「白斑病は不治の感染症ではないと国が正式に認めてからたったまだ四十年しか経っていないのです、当然まだ白斑病について誤った考えをもっている人もいます。……お祖父様は陽子さんの将来のことも考えたのでしよう、照幸くんが存在を認めようとはされませんでした」

社会が向ける偏見の目からあなたを守るため、ご両親もお祖父様やお祖母様もこれが最善だと思われたのでしよう、という言葉に呆然と頷きを返しながら陽子の頭の中で小さく声が出た。

——じゃあ私が両親に捨てられたのはこの弟のせいなんだ。

陽子は声を振り払おうと頭を振った。園長先生の話の通りならば、弟であるらしいこの少年は今まできつと辛い思いをしてきたはずだ。なのに彼の心配よりも真っ先に自分のこと、それもこんな酷いことを思ってしまった。なんて嫌な人間なんだろうと陽子は己を恥じた。

「ですが私はまだ学生の身です。しかも奨学金と祖父母の少しばかりの遺産のみで学費と生活費をやりくりしております。……照幸くんに満足のいく暮らしをさせてあげられるとはとても思えません」

「療養所は共同生活ですから自分の事は自分でできます。白斑病に関しては月に二回診察を受けに来てもらうことになっていますが、付き添い等は特に必要ないですよ」

陽子はとっさに口を開いたが、何も言葉が出てこないことに気づいた。もう一度自分の弟であるらしい照幸の方を見る。肌に白い斑点があるわけでもないのに一見では病人と分らない。それでもはっと目を惹く透き通るほど肌が白いのも、太陽の光を浴びたら消えてしまいそうなほど儂い雰囲気を纏っているのも、病人であるならば納得がいく。

伏せたままの顔が僅かに上げられ、薄茶色をした大きな瞳と視線が合う。見透かされているような気がして陽子は思わず唾を飲み込んだ。

「やっぱりご迷惑ですよね」

察しの良い子なのだろう。世間では高校生の歳なのだからまだまだ自分の事だけ考えていても許される時期のはずなのだ。十代が浮かべるにはどう考えても早すぎる、どこか悟ったような照幸の表情に陽子の胸は締めつけられた。きっと己の存在に何の価値も感じていないのだろうとわかる顔だった。

勢いに負けて受け入れてしまった。天涯孤独の存在ではなくなったにもかかわらず手放して喜べない。感情がまだうまくついていけないまま、一体このような場合普通の家族というものはどういう反応をしてあげるのが適当なのだろうと陽子はぼんやり考えていた。

「御免なさい、最近はどうにも忙しくって……」

いつになったらこちらに引っ越してくるんだい、と眉をひそめた婚約者に陽子はなんとか笑み

を浮かべてごまかしてみせた。

陽子の婚約者である健一は医者の一息子であった。陽子より四つばかり年上である彼は父親の病院に勤めている。祖父の紹介で彼とはほとんど見合いのような形で知り合ったのだが、相手の家が何故か陽子のことを気に入ったらしく結婚前提で交際を始めてから四年が経とうとしていた。

照幸と暮らし始めたこと、そもそも自分に弟がいたことを何故か陽子は健一に話せずにいる。照幸と暮らし始めて二ヶ月経ったのに、健一どころか未だに誰にもこのことを話せていないのだ。どうして話せないのか陽子は自分でもわからなかった。特に隠すようなことではないはずなのだ。陽子と健一は一週間に一度、代わりばんこに互いの家を訪れて夕食を一緒に食べるようにしていた。だが照幸と住むようになってから陽子は卒業論文の執筆と就職活動を口実に、健一に頼み込んでその頻度を二週間に一度にしようとした——照幸を一人家に残していくのが心苦しかったからである。

家に帰り、居間に入ると奥の襖が開いて照幸がお帰りなさいと微笑んだ。お茶をいれますね、と台所に立つ姿にちくりと胸が痛む。照幸はお世辞にも器用な性格とはいえないようだったが、色々なことに気を回そうとするのだ。随分と出来た弟だと思う。——なのになぜ私はこの子を誰にも紹介できないままにいるのだろうか。

「随分と早く帰ってきたんですね。僕に気を遣わなくてもいいのに」
緑茶は丁寧にいれてある味がした。外は少し風が冷たかったので身体が内側から温まる。陽子

は一口飲んだ後、湯呑みで手を温めながら言った。

「照幸くんこそ気を遣わないで。うちの中は狭くて退屈でしょう、外に遊びに行っていいいのよ」

「ううん、人混みは苦手なんです。大丈夫」

卓袱台の向かい側で照幸は礼儀正しく正座をしたまま小さく手を振った。照幸は控えめな性格なのか、自分のもの以外の家のものに必要最小限にしか触ろうとしない。陽子が照幸の分のお茶をいれると軽く会釈をして受け取った。

照幸がここに引越してきて以来、あなたの家なのだから好きにしていいいのよ、楽にしてと何度も言っているのだが丁寧な態度も口調もほとんど崩れないままだった。きっと元々の性分なのだろうと思つて半ば諦めてはいるが、気を遣わせている己が不甲斐なくて仕方なかった。私たちは家族なんだから気遣いはなしよ、という己の声はどことなく空虚に響いた。

遙か遠くでどん、どんと地を鳴らすような音が聞こえ、照幸はいつもどこを見ているかわからないような瞳を外に向けた。陽子もつられて外を見る。

「ああ、河原の花火大会だわ。この辺りは秋に花火をするのよ」

へえ、と照幸は声を漏らすと首を伸ばして窓の向こうに目を凝らそうとした。やっと子供らしい素振りを見たように思い、陽子はほっと笑った。

「うちからはちょうど山の裾に隠れて見えないのよ。御免なさいね」

いえ、と慌てて照幸は手を振ったが、目に見えてしょんぼりと萎れていた。何時になくわかりやすいその仕草に心がぼっと温かくなる。少し考えて陽子は照幸に縁側に出るよう言った。

納屋を少し漁ると、思った通り幼い頃に祖父母と遊んだ手持ち花火の残りが出てきた。十年程前の代物だが、湿気ていないのでまだ使えるだろう。ついでに仏壇からマッチと蠟燭を持ち出し、陽子は縁側に出た。

照幸は山の裾野の向こうの空が音とともにわずかに黄だの桃だのと色を変えるのを一心に眺めていた。陽子はマッチを擦り、蠟燭の下を炙って庭の石に固定した。蠟燭に火をつけ、照幸に手持ち花火を差し出す。照幸は首を傾げた。

「折角だから私たちも花火をしましょう。線香花火しか残っていないけど、勘弁してね」

線香花火に火をつけるとめらめらと炎が花火を舐め、赤銅色の飛沫を散らした。照幸はわあ、すごいと小さく声をあげて自分も花火に火をつけた。

しゅうしゅうと音を鳴らして松葉のような紋様を浮かべたかと思えばぼたりぼたりと火花を落とす。照幸の花火の玉が落ち、彼はああと残念そうな声をあげた。

「長持ちさせるにはこつがあるの。あまり揺らさないことよ」

「すごいなあ。僕より前に火をつけたのにまだ綺麗……」

火花が菊の花を描くのを照幸はじっと見つめて感慨深げに言った。透き通った瞳は金色を湛えてちろちろと揺れている。年相応の無邪気な姿を愛おしく思った。

「照幸くん、そんなに火花が好きだったの。それなら来年は河原に観に行きましょうね」

照幸は火をつけた二本目の花火を真剣に見つめていたが、陽子の声にぼっと顔を上げた。一瞬顔が輝いたが、次の瞬間俯いてしまった。玉がまたしても菊模様を描く前にぼとりと落ちる。

「……来年かあ」

先のことなんて考えたこともなかったなあ、と照幸は独り言のような調子で呟いた。陽子は胸に何か熱いものが一度に溢れるのを感じ、彼の整った横顔を眺めた。ふわふわとした巻き毛の頭を撫でてあげたい。なるほどこれが世間一般の姉の気持ちなのかと思った。

「約束するわ。来年は連れて行ってあげる」

うん、頑張ります、と照幸は微笑んだ。いわゆる天然なのか時々表れる世間ずれしたような彼の言動が可笑しくて陽子は笑った。照幸も笑った。初めて家族のようなことができた気がして嬉しくて、二人は二時間ひたすら線香花火で遊んでいた。山の向こうの音はいつの間にか止んでいた。

大学から帰り着き玄関でたたいま、と言っても珍しく物音がしなかった。怪訝に思い居間に入っても誰もいない。

「照幸くん、照幸くん」

呼んでも反応がない。照幸は元々の性分なのか、ぼんやりとしてることが多い。現に名前を呼んでも反応しない時があるのだ。まるで自分の名前を覚えていないかのように。

と、ピアノの音が響いた。——曲はよく知っているものだ。陽子が今まさに練習している曲だ。だがこの音は知らない。心の臓の奥を直接打つような深みのある音。一つ一つの音の運びは早

いのに、その響きは胸をかきむしりたくなるような悲痛さを秘めていた。これは作曲家の故郷が戦争で失われた時の曲なのだ。何度ピアノの先生に指摘されても陽子は弾き切るのに精一杯で音に感情の色を出せずにいた。

日頃練習に使用しているアップライトピアノはここまで豊かに鳴るものなのかと、ピアノのある洋間の前で陽子は立ち尽くした。

——照幸くんにこんな才能があったなんて。私より遥かに上手いわ、どうして今まで言ってくれなかったのかしら。

陽子は忙しきにかまけて週に二、三度しか鍵盤に触れていないせいで上達は遅い。本来ならば毎日練習しなければ腕はすぐに鈍ってしまうものだから当然といえば当然である。

照幸に裏切られたような気分がした。彼は陽子が練習しているときは決して部屋に入ってこようとしなかった。嗤っていたのだろうか。幼い頃から習っているくせにその程度かと内心馬鹿にしていたのだろうか。照幸の性格上そんなことはないとわかっているくせに一度心に巢食った黒い霧は取れなかった。

突然ぶつりと演奏が途切れる。次いで、ああ、という絞り出すような声が聞こえた。洋間のドアを音を立てないようにわずかに開けてみると、照幸はピアノ椅子に腰かけて己の両手を見つめていた。そしてそのまま頭を抱えて駄目だ、と掠れた声で言ったきり動かなくなった。

「ピアノ、弾けたのね」

ドアを開けて部屋に入ると、照幸の肩がびくりと跳ね上がった。弾かれたように彼は椅子から

立ち上がった。

「あ、あの、いえ、えっと、御免なさい」

途切れ途切れに謝罪の言葉を述べ、照幸は側にあつたクロスを掴み上げた。鍵盤を拭きながら御免なさい、御免なさいと繰り返す。こちらの顔色を伺うようにしていた茶色の大きな目が伏せられる。

「別に謝らなくていいわ、この家のものは好きにしていっていつも言っているでしょう」

普段より随分と冷たい声が己から出たことに驚いている自分がいる。照幸の顔色がさっと変わった。

「いえ、僕が触ると汚れて……嫌な思いをさせてしまうかもしれないから。——このピアノは今日初めて触れました。本当です」

照幸曰く、陽子のものに勝手に触るのはよくないと思つたらしく今の曲は楽譜を読まずに陽子が弾いてあるのを聞いて覚えたらしい。その事自体が既に一つの技能である。天賦の才を授かっているのだろう——かつて陽子が喉から手が出るほど欲しがつた、そして己にはないとよくよく分かっている才能とセンスを少年はその身に宿していた。きちんとした先生に師事すれば直ぐに開花するだろう、化物と呼ばれるに相違ないと確信するほどだった。

陽子はピアノ椅子に座り、側にある小さな本棚からこの曲の楽譜を取り出した。腹立たしいことにまだ暗譜していないのである。左手の十六分音符の連続と右手の和音の移動の細かい音を覚えられないのだ。

この曲が作曲家の激しい感情をそのまま表していかつた。叩きつけるように無謀なスピードで陽子は指を走らせた。当然続かず程なくして指が止まる。下手くそでしよう、六つの時から習っているのにこのざまよと鼻を鳴らして振り返ると、思ったより照幸の顔が近くにあつて陽子は息を呑んだ。いいなあ、と蚊の鳴くような呟きが彼の唇から漏れた。

照幸の目はぎらぎらと食い入るように鍵盤を見ていた。睨んでいると言つてもいい、こんな表情を日頃おっとりとした彼が浮かべるなんて誰が想像できただろう。飢えた獣が獲物を狙わんとするときのような目だつた。餓えた目だつた。その目が陽子に向けられたとき、記憶の隅でちりつと音がした。——この目は知っている。

「……あなた、はたる園でいつも私の演奏を一番前で聴いていた子でしょう」

観客である入所者たちの顔をまじまじと見れるほど毎回陽子に余裕はなかつた。が、この視線は覚えてゐる。施設の一室で床に座り込み、膝を抱えてこちらを見ている観客たちの中でその目つきは異彩を放っていた。

「覚えていてくれたんですか」

照幸は目つきをふつと緩め、いつもの茫とした顔に戻つた。

「ええ。……照幸くんはピアノ、好きなの。誰か先生に習わないの」

照幸は乾いた笑い声をあげると、ぱちんと両手で口を覆つて目を伏せた。

「……何の役にも立ちやしないくせに、道楽にばかりかまけていいご身分だと言われていました」

頭から氷水をぶちまけられたような感覚がした。とっさに口を開いたが言葉が出てこない。照幸は例のその顔つきに似合わない悟ったような笑みを浮かべた。なんて顔をさせてしまったんだと陽子は思った。

「御免なさい、私はただ——」

「いいんです」

照幸は両手を目の高さを持ち上げ、開いたり閉じたりした。ぞっとするほど細い指だった。呼吸が止まりそうな思いで陽子はそれを見ていた。——そうだ、照幸は病人だった。思い知らされたような気がして陽子は照幸の細い顔の輪郭をぼうっと目でなぞった。照幸は首を傾げた後肩をすくめた。

「満足に指が動かないからもうピアノは諦めました。——思ったように身体が動かせないのは、駄目だ」

葉が効いて少しはましになったかもしれないと、ものの試しでつい弾いてしまいました。がやっぱり駄目でした。不愉快な思いをさせて御免なさいと照幸は頭を下げ、踵を返して己の部屋へ戻っていった。陽子は暫くの間その場を動けなかった。

最近、健一の様子がおかしい気がする。やたらと家を眺め回しては何か言いたげな疑り深い顔で陽子を見る。自分の家なのに監視されている心もちがして落ち着かない。相も変わらず陽子は

照幸のことを誰にも言えないままでいた。——花火を一緒にしてから少しは仲良くなったと思っただのに、ピアノの一件からどこか二人は他人行儀に戻ってしまった。

健一が来たところでこの家に流れる息苦しさが何か変わるわけでもなかった。むしろ罪悪感が募るばかりだった。健一は家の中を歩き回りながらあちらこちらに視線を走らせていた。陽子は気が気ではなかった。

まずはお茶でも飲みましょうよ、という陽子の言葉を途中で手を振って遮り、健一は腕を組んだ。

「陽子さん、きみは昔から自分の心を語ろうとしなかった。……そんなに僕のことを信用できないのかい」

陽子は条件反射のようにそんなことないわ、と言った。健一は片眉を上げた。陽子はため息をつきたいような思いだった。——人のこと言えないじゃない。あなただって私のこと信用してはいなくせに。

この家の雰囲気もどことなく変わったねと健一は呟いた。

「もうすぐ家族になるんだから隠し事はよそうじゃないか。君が富永の家名に傷が付くようなこととはしないと僕は信じているけれども」

健一は言葉を切った。そう、彼は家族を大切にすると人間なのだ。自分と家への評価、世間への体面を常に気にしている。——だからこそ照幸のことを言い出しづらいのもあるのだ。口ではなんとでも言えるが、婚約者であるとはいえ所詮陽子は他人扱いだった。

「陽子さん。僕は」

「只今帰りました。……少しお話が」

玄関の引き戸が開くからりという音がして二人とも後ろを振り返った。玄関に照幸が立っていた。なぜ今日に限って早く帰ってきたのだ。陽子は弟を恨まずにはおれなかった。照幸は目を見開くと言葉を切り、靴を脱いだ姿勢のまま固まった。

「健一さん、違うの、これは」

健一は眉間にしわを寄せ、照幸と陽子を交互に見た。

「なんだ、君は」

威圧的な言い方に照幸は怯えたように身を震わせた。陽子が止める間も無くずかずかと健一は彼の方に近づいていった。あの、えっと、と照幸は口を開いたまま言葉が出ない様子で目を伏せた。

「失礼だが、陽子とはどういう関係なんだ。——僕は彼女の婚約者だが、君のことは一切聞いていないぞ」

照幸はちらりと伏せた目で陽子に視線をやった。視線が重なる。そしてお互い逆の方向に俯いた。

「つまりどういうことなんだ？ 君たちはぐるになって僕を騙していたということか？」

健一は芝居がかった動作で腕を広げる。声が一段と大きくなっていく。健一はじろじろと照幸を頭のとっぺんからつま先まで眺めると、ふんと鼻を鳴らして振り返った。

「驚いたな。君はこんな年下がお好みだったとは」

陽子は竦んだ身から声を絞り出した。

「違うわ、この子は弟です」

「あの、違うんです、陽子さんは悪くないんです」

声が重なり二人は驚いたように互いを見た。健一は再び二人を交互に見るとまた鼻を鳴らした。

「弟だって？ ……君に家族はいないんじゃないのかい」

もう一度健一は照幸に近づいた。不躰といってもいいほど近くまで寄ると、健一は眉を顰めて随分と似ていないかと毒づいた。そうして踵を返そうとして健一は立ち止まった。

「待てよ……」

健一はゆっくりと照幸の周りを一周した。そして明らかに軽蔑の念が混じった声を上げた。

「ああ、わかったぞ。……君、『まだら』だろう」

健一さん、と陽子は責めるように声を上げたが健一はそれを手で遮った。

「僕の家は病院なんだ、消毒液の匂いは嗅ぎ慣れているんでね。まだ暑さが残っているのに長袖の服を着ていてその匂いを漂わせているやつは『まだら』なんだ。……なるほど、そりゃあ陽子も僕に君のことを隠すわけだな。恥ずかしくて世間様にとても言えないんだろう。可哀想に」

健一はさっと陽子の方へ戻った。照幸の表情は能面のように変わらなかったが、透けそうなほど色白な肌は今や青ざめていた。

「療養所で暮らしていればいいものを、何が目当てで今頃のこのこと現れたんだ？ —— 陽子の

家の遺産か？ 僕の両親の援助か？」

「そんな言い方しないで頂戴」

健一はこちらを振り返ると、両方の眉をぎゅっと釣り上げた。

「へえ。君はほとんど四年間一緒に過ごした僕よりも何処の馬の骨とも知れない弟を取るんだな。……君には失望したよ、陽子さん」

健一は身を起こし、足を踏み鳴らして居間に入り荷物を取った。そして雷に打たれたように固まっている二人を憎々しげに見た。

「きっと君たちはいずれ後悔するだろう」

健一はガラスの引き戸を乱暴に開けたかと思いきや、照幸の耳元に一言ずつ区切りながら聞こえよがしに囁いた。

「はっきり言うておく。君の存在は陽子にとって必ず迷惑になるだろう。……僕に紹介しなかったところを見ると、もうなっているようだけど」

照幸はその言葉に目立った反応を見せなかった。目は伏せられており何を思っているかは分からない。陽子は最後までどちらに声をかけることもできないまま間抜けのように突っ立っていた。ぴしゃりと引き戸が閉められた後、暫くして彼女は膝からその場に崩れ落ちた。

夜は部屋ではなく仏壇のある床の間で寝ることになっている。狭い家なもので布団を敷くと、物

が多いのでそれだけで部屋がいっぱいいっぱいになってしまふからだ。まんじりともできず、陽子は寝返りを打った。

部屋の反対側の襖のすぐ近くに照幸は布団を敷いている。隅で申し訳なさそうに身を丸めて寝ているのだ。今日はこちらを拒絶するかのように背を向けており、ぴくりとも動かない。

陽子は静かに身を起こし、照幸の枕元に近づいていった。顔を覗き込むと大きい瞳は閉じられており、長い睫毛が頬に陰を落としていた。頬に赤みはほとんどなく、わずかに聞こえる規則的な寝息がなければ死んでいると言われても信じてしまふかもしれない。

あの後、夜に富永家から正式に電話があり婚約と交際を破棄する旨を告げられた。健一のあの剣幕である、当然の結末だというのは分かっていた。結局家族のために家族を失ったのである。家族とは何だ。苛立たしげに陽子は指で畳を叩いた。その存在を知ってせいぜい三ヶ月の肉親に、四年間付き合ってきた未来の家族を奪われたも同然だった。それは陽子の将来を奪ったも同然だった。頭の中で小さく声が出た。——でも今日の健一さんを見る限りは結婚しても上手くいくとは思えないけど。あの人は昔から恵まれた育ちだったから私の気持ちをあまり分かってくれなかったじゃない。

陽子はその声の中で怒鳴った。じゃあ私、これからどうしたらいいの。健一さんと結婚する以外のことをちっとも考えていなかったのに！——奨学金も返さなくちゃいけない、祖父母や両親の遺産などほとんどあてにできない。学費や生活費を引いてしまえば一体いくら残る？ これから生きていけるの？ 病気の弟を抱えて。いいえ、この子がいる限り結婚なんかできやし

ないんだわ。じゃあ私が全部稼がなくなっちゃあいけない。だって照幸くんは働き口なんて見つからないでしょう、万一職場で倒れてご迷惑でもおかけしたら。

——いずれ後悔するだろう。……迷惑になるだろう。

——何の役にも立ちやしないくせに、道楽にばかりかまけていいご身分だな……

迷惑。ピアノの一件以来心の隅に絡みついたままの靄が反応した。だいたい、いきなり現れて弟だと言えば、病人だと言えば誰かの家にただで住ませてもらえるのだ。なんて羨ましい。なんて凶々しい。

そんな子ではなくなって分かってるでしょう、あの子の方がきっと私より苦勞してきたに違いなわ。健一さんの言ったようなことをきくと今までも言われてきたに違いはない。家族ならその悪意から守ってあげないと、と頭の声が呟いた。だが心の声の方がそれをかき消した。

——家族のために私の幸せを犠牲にしろって言うの。たった三ヶ月一緒に暮らしただけの他人じゃない！ 一生私は血縁というだけであの子に足を引きずられながら生きていけなければならぬの？ あの子が私に何をしてくれたっていうの？ あの子のためにこれからどんな犠牲を私が払うことになっても全て仕方ないっていうの？

そもそもやっぱり受け入れるべきじゃあなかっただわ。でもまあ言われれば誰だって断れないはず。そうよ、私は悪くない。私は努力したものの。いい家族、いい姉でいようと。これ以上どうしろっていうの？ 大体、いきなり家族になれなんて無理な話だったのよ。普通の家族がどうなんて私にはわからないのに！

黒い靄が身体中を暴れ回る。気づくと思わず両手は照幸の首の近くにあって、何を考えているのだ。己が怖くて仕方ない。——世間で白斑病を差別する人間は畜生の類で自分とは人種が違うと思っていた。ところがどうだ、私も畜生をその心に飼っているではないか。おぞましい。気持ち悪くて仕方ない。一気に吐き気が込み上げてくる。どこかを切ってこの冷血を全て出してしまいたい衝動に駆られる。

全てこの子のせいじゃない。全身に声が響く。この子さえいなければこんなこと気づきもせず済んだ。今頃何も考えずに富永家に住んで何不自由ない暮らしを手に入れることができた。この子さえいなければ！

日頃どこか影のある表情を浮かべた照幸は、眠っている時の顔はなんの気負いもなく年相応に見えた。今はそれすらも憎らしい。こんなに、こんなに私は悩んでいるのに！ とにかくこの弟を滅茶苦茶に傷つけてやりたいという衝動に支配され、陽子はわなわなと震えていた。

「あなたさえいなければ……」

耳元に口を近づけて呟く。その声があまりにも醜く嘎れていて陽子ははっと我にかえた。照幸は睫毛をわずかに震わせただけで起きることはなかった。——私は今、何を言ったのだ。肉親の死を願ったのか。祖父母が死んで天涯孤独の身となった時にあれほど一人ぼっちの心細さに震えたのに。一人ではなくなっただけなのに、家族が欲しいと思ったのに、支え合う人間が欲しいと思ったのに。

激情が治ったあとに残ったのは恐ろしいほどの寒気と罪の意識だった。照幸にあんな顔をさせ

ていた原因の一つは己にあるのだとまたしてもはっきり思い知らされた。陽子は両手で顔を覆った。手は冷たいのに頬は燃えるように熱かった。どくどくと血の流れが己の胸を叩いている。

金木犀の香りが完全に巷からなくなったころ、照幸は亡くなった。

あの翌朝、照幸は陽子に静かに告げた。——昨日の診察でちょっと……暫くほたる園に戻ることにしました。

照幸は例の悟ったような儂げな微笑を浮かべ、お世話になりました、本当にご迷惑ばかりおかけしましたと深々と頭を下げて出て行った。陽子は何も言えずに見送ることしかできなかった。何を言う資格も己にはないと思っていた。それが照幸を見た最後だった。

照幸はほたる園に戻ったさき連絡がぶつりと途絶えた。心配で仕方ないのもあったがどこか安堵している自分もいた。結局いざ照幸がいなくなったところで何から解放されたわけでもなかった。むしろあの夜の罪悪感が常に陽子を苛み続いていた。もしかしたらあの夜、照幸は寝たふりをしていたのかもしれない。いや、察していたような気もするのだ。陽子の中に巢食う畜生を。それで帰ってこないのかもしれない。それならそれでいいのだ。自分はもうどうしたって照幸を傷つけてしまうのだから。一緒にいない方がよいのだ、と陽子は己に言い聞かせた。

やっと季節に相応しく肌寒くなり、夕暮れに一年の終わりの足音を感じ始める頃に照幸の死の連絡が来た。葬儀は園内で済ませるといふ。

数ヶ月ぶりに門をくぐったはたる園はほとんど変わっていなかった。相変わらず山の中に紛れるようにひっそりと在った。枯葉がからからと転がる道を歩いて園内の葬儀場に向かう。だんだん己の歩みが遅くなっていくのを陽子は感じていた。

葬儀は祖父母や両親の時よりさらに人が少なかった。照幸と同じ年頃であろう子供達から老婆まで、彼らは一様に同じような表情を浮かべていた。照幸が時折見せる、全てを悟り諦めきったどこか虚ろな顔つきだった。

急に己が場違いな気がしてならなかった。怖くて棺を覗きに行けない。お前が殺したのだと頭の中で声をする。言霊が照幸を取り殺したのだ。お前は弟を呪い殺したのだと声は陽子を嗤いながら詰った。この場から走って逃げ去りたい衝動に駆られる。震えが止まらず、陽子は己を抱き締めて壁に背をつけた。

「陽子さん、陽子さん」

はたる園の園長先生に肩を叩かれ、はっと陽子は意識を取り戻した。

「園長先生、御免なさい、私、私が」

年老いた園長先生は穏やかに彼女の肩に手を置いた。

「少し外に出ましようか」

葬儀場の周りは林になっている。死を覆い隠すような高い木々の間から穏やかな日差しが漏れている。肩に置かれたままの手が優しくとんと、とんと陽子を包んだ。暫く歩くと陽子はたまらなくなつて園長先生の前に出た。

「園長先生、私は、私は最低な人間なのです」

園長先生は黙って続きを促してくれていたのにそこから先は言葉が出ず、陽子は臉をぎゅっと閉じて俯いた。

「この度は本当に、よく照幸くんの家族として過ごしてくださいました。彼も願いが叶って幸せだったと思います」

「いいえ……いいえ、所詮真似事だったので。結局私はあの子を傷つけただけでした。よい姉として居てやれませんでした。欠格だったので、家族を知らない私なんか……」

何もしてやれませんでした。——縁者が私でさえなければどんなにあの子は、と言ったところで再び言葉が続かなくなった。最後まで姉さんと呼んでもらえずじまいだった。きっと姉とかわれていなかったのだろう。当然の報いだ。園長先生は静かに首を振り、労わるように背中を擦った。

「あなたが苦しい生活をしているとわかっていながら、どうしても照幸くんの願いを叶えてあげたくて無理を言っていましたね。大人しく、我儘を言ったりすることもない控えめな子でしたが、ずっと彼は療養所を出て家族と暮らしたがっていたのです。——あなたが弾いてくれるピアノに憧れていたようでした」

とても静かな最期でした。悔いはないような穏やかな顔をしていました。いつも何かを誰かと話すというよりは独りでピアノの鍵盤を触ったり絵筆を握ったりしているような子でした。昔から察しの良すぎるところがあって周りに余計に気を遣うのです。泣き言一つ言わず、死ぬ間際ま

で誰にも病の苦しさを悟らせようともしませんでした。だから陽子さんも驚いたと思います、と淡々と園長先生は告げた。再び震えが襲ってくる。たまらなくなつて抱えてきた思いが漏れる。

「代わつてあげたかつたわ。豊かな感性と才能に溢れたあの子が生きていた方が、どんなにか意味があつたでしょう……」

きっぱりとした声で園長先生は言った。

「そんな風に思われることが、きつと照幸くんにとって一番辛いはずです」

私はどうすればよかつたのでしょうか、と陽子は呟いた。問いは晩秋の日差しに消えていく。これでよかつたのですよ、という言葉に頷けないまま陽子は空を見上げた。

空はただただ高く冷たく澄んで陽子を見下ろしていた。

昼も間近に迫つた日の光が差し込み、陽子は目を開けた。家の居間の卓袱台に突つ伏して寝ていたらしい。伸びをすると身体中の骨が鳴つた。

とりあえず喉が渴いたのでお茶を用意する。湯呑みに緑茶を注ぎ、卓袱台に置く。向かい側の襖をとんとんと叩き、照幸くん、そろそろ起きたらと声をかけた。

返事がないので襖を開けた。部屋は空っぽだった。卓袱台の方を振り返る。飲まれないままの二人分の緑茶がどんどん温くなつていく。

突然照幸はもういないのだという事実が陽子の中に降つてきた。それは日常の一部を突然切り

取られたような感覚だった。唐突に心に穴を開けられ、冬を纏った木枯らしが通り過ぎていく。——習慣とは恐ろしいものだ。もういないとわかっているのに身体が勝手に動く。照幸がいる生活がいつしか当たり前になっていたのだ。いなくなつて初めて気がついた。そう、もういないのだ、永遠に。あの日々はどうしたつて二度と戻つてこないのだ。

照幸も陽子も妙に遠慮してお互いの部屋に入ろうとしなかったから、照幸の部屋がどう使われていたかなど知る由もない。——照幸が何を考えていたのかなど知る術ももうない。

おそろおそろ照幸のいた部屋に入る。こぢんまりとした畳の部屋は、元々あった筆筒と文机の他には何も残つていなかった。照幸は己のいた痕跡を一切残さなかったのだ。

押し入れを開ける。元々あった二組の布団以外は何もなかった。筆筒の引き出しも文机の引き出しも開けてみたものの全て空っぽだった。何がしたいのか自分でも分からず陽子は自嘲気味に鼻を鳴らした。文机の引き出しを閉める際、がたんと何か鈍い音がした。

音は机のあたりから聞こえた。小さな文机を揺らすとやはりぱたりぱたりと何かが挟まったような音がした。

机ごと抱え上げて前に引くと、机と壁の隙間に太い板のようなものがあつた。陽子の腕の長さくらいある布で包まれたそれを取り出す。

畳に置き、恐る恐る開くと布製のキャンバスが出てきた。暗い背景に荒々しく極彩色の油絵の具を叩きつけた跡がたくさん残っている。所々絵の具がだまになっている箇所が見受けられる。指をそつと走らせると厚く塗つてあるせいかぼこぼことしていた。照幸のおっとりとした態度に

似合わぬ激しい筆致だった。陽子の知らない照幸がそこにいた。

キャンパスを裏返すと、縁に何か字のようなものが書いてあった。漢字一文字と記号のような何かだった。どちらかがサインでどちらかがタイトルなのかもしれない。のたくったような字が読めず、陽子は再びキャンパスを表にひっくり返した。

何を描いたのかはわからない。陽子はキャンパスを抱え上げてしげしげと見つめた。忘れていったのか残していったのか、これを見つけてよかったのかはわからないが、せめてもの思い出にと絵を文机に立てかけた。そうして部屋を出て襖を閉めようと振り返ると、不意に絵が焦点を結んだ。あっと思わず声が漏れる。

線香花火が黄金と赤銅の飛沫を散らしている。火花の向こう側にはそれをしゃがんで眺めるぼんやりとした人影が在る。そんな絵だった。

不意に合点がいき、もう一度キャンパスを掴んでひっくり返す。漢字一文字、これは恐らく「姉」だ。力の抜けた腕で再度絵を置き直し、少し離れた所から見ると、あの日の心が一時通じ合ったような気がした瞬間が浮き上がる。

陽子の中で何かが解けた。頬を熱いものが伝う。悲しみに溺れる感覚とは少し違う、ではこれは何だ。後から後から止まらない。糸が切れたようにその場に陽子は蹲った。

視界が霞んで歪み、絵もぼやける。紛れもなく弟の存在をここに感じる。照幸は陽子の向かい側にしゃがみ込んでいる。色素の薄い瞳は静かに切々と陽子に何かを訴えていた。

「ねえ。——死にたくなかったの」

死にたくなかったの。

手を伸ばすと弟はふっと消えた。伸ばした掌を握り込む。穏やかな晩秋の陽光の温もりだけが残っている。

キャンパスの中のぼやけた己が己を見ている。照幸の遺した絵を胸に抱く。他には誰もいない小さな家の中に陽子の嗚咽だけが響く。

——ああ、御免なさい、御免なさい照幸。どうか許して。姉として見てくれていたの。こんなどうしようもない私を。弟であるあなたを羨んだり恨んだりしていた私を。

ねえ、照幸、私あなたのこと決して嫌いじゃなかったわ。信じてくれるかしら。あなたが描いたこの時、既に私は知っていたのね。あなたがいたから知ることができた。確かに私はあなたを愛しいと思った。愛しくて、だからこそ憎くて、ああ、滅茶苦茶だわ。でもどうかわかってほしい。ああ御免なさい、照幸、どうか許して——

——僕は最低な人間なのです。

そもそも家族を知らないのに、分不相応にもそれを望んでしまいました。出来るはずもなかったのに。

この世に生を受けて程なくして僕は「まだら」に雇ったそうです。その時点で「藤崎照幸」は死んでいたのです。

物心ついたときは既にほたる園で暮らしていました。僕はあそこが嫌いで仕方なかった。何もない山の中、周りの和を乱さないようひっそりと暮らすだけの生にはなんの意味もないと思っていました。人様の迷惑にならないようにと何度も言われ、僕は迷惑な存在なんだと思いました。名前さえも偽名を使うようにと言われ、生まれてから三年か四年でようやく己で己の名を考えました。

僕の本来の名前は照幸というらしいのですが、全く馬鹿げています。日陰で息を殺してただ生きていただけの僕に対する当てつけに違いないと思いました。それで己に「みかげ」という名をつけました。ほたる園では「みかげ」として暮らしていました。僕は全てを恨んでいました。僕を捨てた家族、僕らと接するときにはマスクと手袋を外さない職員たち、僕が身体が小さいせいなのかとろいせいなのか、何かと僕に当たり散らした年上の連中。

初めてあなたがほたる園にやってきたときは丁度そういう時だったのです。あなたが奏でるピアノを聞く間、僕は夢を見ていました。もし僕が普通の人間だったらあなたの弾くピアノを毎日聴いていられたはずだと思つくと、とくに諦めていたはずの普通の生活への憧れが疼きました。人目を盗んでは療養所の音楽室に忍び込み、周りの白い目に怯えながら鍵盤を触りました。時折園長先生からピアノの手ほどきを受けることもありましたが、ピアノだけがあなたとの唯一の繋がりのような気がしたのです。

あなたは来るたびに自由の匂いを纏ってやってきました。何度僕は後をついて帰りたと思つたことか！ 諦めの悪い己に嫌気がさしていました。「まだら」である以上普通の生活なんて自

分には過ぎた望みなのに、そう、普通に、ただただ普通に家族と暮らしてみたいと思わずにはいられなかったのです。

ああ、僕は最低な人間なのです。どうか許してください。僕はあなたが羨ましくて仕方なかった。——あなたは全てを持っていました。しかもそのことに無自覚でした。僕が片時も欲して止まず、諦めざるを得なかった全てを！——僕はあなたを傲慢だと思ってしまいました。ずっとあなたを恨んでいたのです。実の姉を憎んでしまったのです。あなたと暮らし始めてからもその気持ちは死んでくれませんでした。それがずっと苦しかった。僕があなただったら！一日だけでいい、あなたになれば！そう思わずにはいられなかったのです。

せっかく念願が叶って家族として暮らし始めたのに、ちっとも弟らしいことなんて出来やしませんでした。別にあの裕福そうな男の人に指摘されるまでもありません。あなたに迷惑をかけていることが分かっているながら、苦しめていることを分かっているがらざるで居座っていました。

驚くべきことにあれほど出て行きたくて仕様がなかったのに、いざ診察のためにほたる園に戻る度にどこかほっとしている自分がいました。結局僕はあそこでもしか生きられない人間だったようです。僕の居場所なんてこの世のどこにもなかったのです。僕は絶望しました。指が思う通りに動かなくなっているからには尚更でした。僕には何の価値もなくなってしまう。一体何のために生まれてきたというのでしょうか。人を苦しませるためでしょうか、己が苦しむためでしょうか。でももうすぐ僕は死にます。自分でわかっています。やっと解放されるのです。やっとこれで自

由になれるのです。

僕は根っからの不器用なんでしょう、言葉はいつも見つからないくせに性懲りもなく何かを表現したいという衝動は止みませんでした。そうしていないと気が狂いそうでした。幸い絵筆を握る力はまだ残っていました。身体が弱っているときは筆を口に咥えました。心に棲む闇を纏った獣を落ち着かせるにはこうする以外の方法を僕は知りませんでした。

ああ、あなたは悪くないのです。全て自分勝手な僕が悪いのです。どうか許して下さい。「まだら」でさえなければ僕はあなたを姉さんと呼べたでしょう。僕の我儘でままごとのような家族ごっこに巻き込み、あろうことかあなたの人生を滅茶苦茶にしてしまうことなどなかったのでしょうか。あなたを傷つけることなどなかったのでしょうか。僕が生まれてさえこなければ！

それでも僕はあの日、あなたと姉弟になれた気がしたのです。あの時のあなたの優しい目に、僕は勝手にも何かを許された気がしたのです。どうせもうすぐこの火花のように燃え尽きて死ぬのです、せめてこの火花のようにあなたに見つめられながら、美しいと愛でられながら死ぬならもう本望だと思ってしまったのです。——いえ、死にたくないと思ってしまうのです。僕は滅茶苦茶なのです。それなのにあなたにわかって欲しいと思ってしまうのです。ああ、姉さん、どうか許してください。こんな身勝手な僕を、どうか許してください——

(文学部総合人間学科四年)

選考を終えて

東光原文学賞総評

選考委員長 坂口 至

今回の東光原文学賞の応募作は二十八編で、前回の十四編から二倍に増えた。その理由は明確ではないが、学生諸君の創作意欲の高まりを実感できた。あるいは各方面からの慫慂に負うところもあったかも知れないが、学生諸君の積極的な応募の結果であり、素直に喜びたいと思う。

応募作のうち第一次選考を通過した十編を選考委員三名で読み、大賞作品一編と優秀作品四編を決定した。今回の作品の特徴は、前回まで比較的多かった空想的作品が少なくなり、現実的な作品が大部分を占めたことである。個人的に現実的な作品が好きで私にとっては、理解しやすい作品が多く、そのいずれもが読み応えのある力作であったように思う。中でも大賞に選ばれた作品、優秀賞に選ばれた作品は、選考委員全員が共通して推すものが多く、選考は比較的短時間で進めることが出来た。

大賞作品の『雪の下に咲く』は、選考委員全員が一致して大賞に推した作品で、自分の父親を死に追いやった男と正面から対峙して復讐を遂げようと思いつながら、様々な葛藤の末、最後には復讐を諦めるまでを、緊迫感のある文体で描いているところが高く評価できるところと思う。何らかの

形で復讐を遂げる結末となるかと思っていたので、やや意外であったが、読後感は爽やかであった。

優秀賞の『アジサイの日』は、精神病の父親への無理解と反発から、父親の言葉、父親の日記によって次第に理解を深めていく主人公の心の変化がよく描かれている。それを助ける加奈子や夫を信じ続ける母親の姿も好ましい印象を与えるが、母親の心情がもう少し描かれていれば、より深みを増したのではないかと感じた。

優秀賞の『縁者欠格』は、偏見を生む病がもたらす悲劇がよく描かれており、主人公の心の描写も、弟の人物描写も巧みである。陽子の婚約者とその家族の描かれ方がステレオタイプであり、医者の家ならば、もう少し理解があってもいいのではないかと感じ、弟の死が、病死とも自死とも取れる結末が少し気になった。

優秀賞の『若狭と鉄炮』は、時代小説らしく淡々とした筆致で物語は進行するが、仕事に一途な主人公の姿は印象が確かである。最後に大方の予想を裏切る結末が待っており、面白く読めた。当時の鉄炮とその使用に関する事柄など、必要な知識はよく調べられているが、会話文に用いられる言葉がもう少し吟味されていると良いと感じた。

優秀賞の『臨時運行レトロトレイン』は、大学院に通う中年の男性の日常、特に通学の際に用いる電車内での若者世代の生態を批判的に描きながら、自らの過去と向き合い、次第に若い世代を好意的に把握ようになる過程を描いている。熊本地震というアクチュアルな題材を積極的に取り込もうとする姿勢も評価できるが、全体として小説らしいストーリー性が弱いように感じた。

以上、大賞および優秀賞の講評を終わるが、最後に望属の思いを述べるとするならば、昨年の講評でも述べたように、「人間はどう生きるべきか」を、学生という等身大の立場から追及した作品が読みたいという気持ちがある人には強い。学生にとって「人間はどう生きるべきか」とは、私の経験から言えば、例えば恋愛の悩み、家族関係や友人関係の悩み、経済的不如意の悩み、心身の病気の悩み、将来への不安、などである。

次回も多彩な内容の多くの作品が寄せられることを期待して結びとする。

●坂口 至（さかぐち・いたる）

長崎県出身。九州大学文学部国語国文学科卒。現在、熊本大学文学部教授。

日本語史・方言学専攻。九州方言研究会代表（2011～2015）。著書・共著に

『九州方言の史的研究』（桜楓社、1989）、『長崎県のことば』（明治書院、1998）、

『これが九州方言の底力！』（大修館書店、2009）など。句集（私家版）に『旅次』

（2005）、『四季抄』（2012）、『四季続抄』（2013）がある。

講評

選考委員 跡上 史郎

応募作の数が去年から倍増しているとのこと、素晴らしいことだと思います。この調子で、どんどん文学作品を書くことにチャレンジしていきましょう。

その上で、そのような多数の応募作の中から頭一つ飛び出るにはどうしたらよいのでしょうか。応募作の多くに共通しているのは、①主人公は自己肯定感が低い、②人格的に悩み変りたいと願っている、③他者の助力による成長、または他者との関係失調による破綻という結末、というパターンです。

人がお決まりのパターンに陥っていくときというのは、いくつかのケースが考えられますが、一番多いのは、「今、自分は独自の感覚によって特別なものを制作している」と思い込んでいるときです。周りが見えていない状態でこれをやると、無意識に染み込んだよくあるパターンをなぞるだけになってしまい、本人がオリジナリティがあると思えば思うほど、実はありがちなものになってしまふわけです。

解決法は、まず真似すること、次に練習することです。

漫画を描くとき、まったく誰の影響も受けず、何の練習もせず漫画が描ける人はいないはずで、それは文学でも同じことで、真似したり練習したりすることは重要です。好きな作家がいれ

ば流行のものでもなんでも、真似していいのです。真似をしながら練習しましょう。

すると自分が依拠しているパターンを意識することができるようになります。もっと勉強すると、自分の好きな作家や作品が、周囲のよくあるパターンにどれくらい依拠していて、どれくらいそこから離れようとしているかという緊張関係も見えてくるかもしれません。

いわゆる純文学というのは、このよくあるパターンを踏まえつつも、そこからどれくらい効果的に逸脱し、新たな世界認識のモデルを提示できるかということを問題にしています。

いわゆる大衆文学は、これとは逆で、既成の秩序が脅かされつつ、さまざまな困難や葛藤を経て、最終的には読者が安心できるよくあるパターンに帰着すること、あるいはより安心できるパターンに更新されることが目的となります。

つまり、両者ともによくあるパターンの要素とそこから逸脱する要素があるのですが、その配合のバランスが異なっているわけです。あくまでも目安ですが、純文学はパターンからの逸脱成分が多い傾向にあり、大衆文学はパターンへの依拠成分が多い傾向にあるということになります。

大賞作の「雪の下に咲く」は、自己肯定感が低い主人公というパターンの拘束下にあります。通例は、自分を不幸に陥れた詐欺師と戦って、勝ったり負けたりして、成長したり破綻したりします。ところが、この主人公は不戦を貫きます。戦わずして敗北することの選択から欠損の回復を企図しているところに特徴があり、この捻れに時代への鋭敏でリアルな反応が垣間見えると思えました。この時代ならではの新たなパターンの提示、あるいは新たなパターンへの依拠ができているという判断です。

優秀賞の「若狭と鉄炮」は、他の応募作とはまったく違う発想のもとに書かれているのが面白いと思われました。主人公の刀鍛冶に人格的な悩みは皆無であり、物語の核は、ただ彼が鉄炮の複製を完成されるかどうか、助力者である娘の通説とは異なる意外な運命です。その意外な運命には、とても大きな幸福感が満ちています。文章や会話の処理にやや未熟な点も見受けられますが、極めてオーソドックスなエンタテインメントとしての時代小説を書くことへの志向、応募作中での異色さ、晴朗さを買いました。

文学賞への投稿を志す皆さんは、文学でもライトノベルでも漫画でもアニメでもなんでもいいので、この時代のパターンを会得しましょう。そして、洋服のお洒落を考えるように、パターンとそこからの逸脱のパランスを考えてみてください。するとあなたの頭の中はもっとお洒落になり、あなたの書く文学もお洒落になって、もっと評価されるようになることでしょう。

● 跡上 史郎（あとがみ・しろう）

熊本大学教育学部准教授。専門は日本近・現代文学。鹿児島県出身（跡上本家は天草の佐伊津）。

熊本文学隊代表世話人として「いま石牟礼道子をよむ・高橋源一郎×町田康×伊藤比呂美」（二〇一六・一一、五、於Denkikan）の企画・運営等。

その他最近の仕事は「宮崎駿、夏目漱石に熊本で出会う」（『熊本大学教育学部紀要』第六五号、<http://hdl.handle.net/2298/35821>）、「村上春樹「鏡」のあちら側とこちら側——一九八〇年代から『IQ84』まで——」（『昭和文学研究』第六八集）等。

講評 答えは自分の中にある

選考委員 岩瀬 茂美

ウィリアム・サローヤンの小説「パパ・ユークレイジー」では、父親と子どもの会話の中で、生きることの意味が繰り返し語られる。作家の父親は十歳の息子に「小説を書くこと」を求める。「僕は何を書くの？ 何について？」「お前自身についてさ、もちろん」「僕自身？ 僕って何だろう？」「それは小説を書いて発見するんだね」

十代後半から何度も読んでいる小説だが、「自分自身を書くこと」とは、つまり「書くこととは生きること」という意味でもあるのだろう。今回、初めて東光原文学賞の選考委員を務めることとなり、この小説の場面を思いだした。どれだけ自分自身に迫れたのか。その文章に血が流れているのか。抽象的な表現だが、選考では、文章にこめられた熱量を感じたいと思った。

大賞の「雪の下に咲く」は面白く読んだ。家族をほんろうした詐欺師との再会という設定がユニークで、回想を織り込む展開も巧みである。会話にはテンポがあり、カフェで展開される心理戦は読ませる。父譲りの目の色を隠すカラーコンタクトレンズによる心理描写も効果的だ。エン

ターテイメント度も高く、読みやすく仕上げた作者の力量を感じた。執拗に描かれる敗北感など「自分を見つめる視線」が、作品の軸としてぶれずに存在しているところに好感が持てる。

優秀賞の「アジサイの日」と「縁者欠格」はいずれも、家族の病気と偏見、相手との距離をめぐる葛藤を描いた作品という共通点がある。ともに一定の力を感じさせる完成度だが、古典的な構造でもあり、新鮮味に欠けるところもある。精神障害の父親に対する若者の心情の変化を描く「アジサイの日」は、実話と思わせるほどの説得力を感じた。母親や彼女の造形につながるリアルな表現など文章に魅力的なものがあり、物語の核となる父親の日記の構成力にも熟成がある。「縁者欠格」は、花火やピアノの情景の映像的な表現が印象的だった。揺れる心理を淡々と描く文体は最後、弟からの手紙で“転調”する。切実な文章がいい。

優秀賞の「若狭と鉄炮」は意欲的な時代小説だ。種子島の鉄炮伝来を題材にした家族の物語。時代小説ならではの「小さき人々」の喜びや悲哀が魅力的に描かれ、物語の世界に自然と引き込まれていく。穏やかな読後感が心地いい。

優秀賞の「臨時運行レトロトレイン」は、熊本地震後の風景が描かれている。五十代の主人公の視線で描く若者や社会の姿という構造が独特だ。車両のディテールや熊本風景、スマホの使われ方など表現が詳細で読ませる。地震に対する「もう一步」の接近がほしい。

入賞作以外では「木の股から生まれませず」も印象に残った。現代の人気作家の作品にも通じる「悪意」が描かれ、読後感の悪さがあるのだが、こうした作品の存在には時代を映す何かを感じる。

二〇一六年四月の熊本地震を体験した私たちは、「あの日」以降、多かれ少なかれ、心の奥に「喪失感」を抱き、そこからの回復の過程にある。地元紙として被災者一人一人に寄り添う報道を心掛けているが、同じ状況はどこにもないと実感する。今回読んだ作品のいくつかにも、通奏低音のような「喪失感」があった。もう少し深く、自分を見つめ直すことから、自分だけの新しい物語が生まれるのではないかと思う。そんな物語は隣人の物語にも重なる。ジョン・レノンやボブ・ディラン、ブルーハーツ、宇多田ヒカルの歌が、彼らの歌であり、私たちの歌でもあるように。

物語には力がある。だれかの人生を救ったり、ダメにしたりもする。いくつかの言葉は生き残り、サローヤンの小説のように五十年以上後になっても読まれることがあるだろう。今後、長く書き続けてほしい、と思う。

●岩瀬 茂美（いわせ・しげみ）

熊本日日新聞社編集委員兼論説委員。1963年、八代市生まれ。1988年、熊本日日新聞社入社。社会部、天草総局、編集本部、荒尾支局などを経て、2007年編集本部次長、11年社会部次長、13年同次長兼論説委員、14年文化生活部次長兼論説委員、17年3月から現職。主な連載企画に「水俣病40年」「水俣病小史」「水俣病は終わっていない」（平和・協同ジャーナリスト基金賞特別賞）、「30代の地図」「熊本地震連鎖の衝撃」など。

第九回熊本大学東光文学賞作品集

発行日 二〇一七年三月三十一日

編集・発行

熊本大学附属図書館

〒八六〇―八五五五

熊本県熊本市中央区

黒髪二―四〇―一

印刷 株式会社かもめ印刷

